



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

平成28年度指定 スーパーグローバルハイスクール

研究開発実施報告書

第1年次

— 平成29年 3月 —

学校法人 創価学園



創価高等学校



平成28年度指定 スーパーグローバルハイスクール

研究開発実施報告書・第1年次

平成29年3月

学校法人 創価学園



内容

1. 総論

A) はじめに.....	1
B) 調書と概念図	2
C) 完了報告書	5

2. グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)

A) 概要・年間スケジュール	10
B) GCP リーダー	11
C) 貿易ゲーム(1年生)	12
D) 世界がもし100人の村だったら(1年生)	15
E) いのちの食べ方を問う(1年生)	18
F) 模擬教育援助会議(1年生)	21
G) 環境問題のつながりを知る(1・3年生)	23
H) レイテ島決戦から戦争とは何かを知る(2年生)	27
I) 核兵器廃絶に向けて(2年生)	30
J) ルワンダ内戦から現代紛争を考える(2年生)	33
K) 異文化理解(2年生)	36
L) 人権すごろく(2年生)	39
M) ディベート(2年生)	42
N) 模擬国連(3年生)	45
O) ファイナルプロジェクト(3年生)	48

3. グローバル・リーダース・プログラム(GLP)

A) 概要・年間スケジュール	51
B) クリティカル・イシューズ・フォーラム(CIF)	53
C) ゲスト講義	55
D) プレゼンスキル(学園祭ポスターセッション・英語プレゼン)	58
E) 英字新聞の取り組み	62
F) 映像制作の取り組み	63
G) 評価と分析	65

4. 言語技術

A) 概要と目的	67
B) 学習・トレーニング内容	67
C) 評価	78
D) 1年間の総括、及びその成果と今後の課題	83

5. フィールドワーク

A) 1年間で行ってきたところ	86
B) カリフォルニア	87
C) 岩手	91

D) 広島	94
E) 沖縄	96
F) JICA(市ヶ谷)	99
G) ハンセン病資料館(東村山)	100
6. グローバルセミナー	
7. 語学活動	
A) 英字新聞(GCP)	104
B) イングリッシュキャンプ	106
C) スカイプ英会話	108
D) クリティカル・ライティング・センター	109
8. スコラ	
9. 評価と分析	
A) 評価	114
B) アンケートと分析	115
C) 中間報告会・活動報告会・評価(声)	118
D) 運営指導委員会	124
10. 関係資料	
① 2016年度カリキュラム表	129
② 目標設定シート	130
③ 英字新聞(GLP)	132
④ 英字新聞(GCP)	136

1. 総論

A) はじめに

創価高等学校 校長 木下清一

本校は、1968年に「日本の未来を担い、世界の文化に貢献する有為の人材を輩出すること」を目指して中学高校の男子校として開校し、小中高の一貫教育が整った1982年より男女共学となり、現在に至っています。これまで約半世紀にわたって、日本はもとより世界で活躍する幾多の人材を輩出してきました。

そして2014年には創価学園創立50周年の2017年へ向けて、新たなる学園のミッション・ビジョンを策定するとともに、それをもとにSGHへの挑戦を開始しました。翌年SGHAの認定を受け、「T AIWA力」あるグローバルリーダーの育成のために、全生徒のグローバルマインドの高揚をめざして、『世界を知る 私を知る ～世界の平和のために私は何ができるか～』との課題を設定し、全校生徒対象のGCP(Global Citizenship Project)と「平和と人権」をテーマとして課題を設定し希望者の中から選抜された生徒で研究に取り組むGLP(Global Leaders Program)を二つの柱にした探究型学習に取り組み、広島県や新潟県をはじめ都内でのフィールドワークも実施しました。これらの取り組みとその成果をもとに2016年度の構想調書を作成・提出し、昨年3月、SGHの認定を勝ち取ることができました。

本校は、SGHの認定より本校の目指す「世界の平和と文化に貢献する、実力ある人間主義のリーダーの育成」のために、創価高校におけるグローバル人材像を「創価の精神の根本である『生命尊厳の思想』をもって、世界平和に貢献する『地球規模課題の解決』に寄与できる人材」と定め、その資質を①文化的・社会的な差異を認めることのできる多面的・多角的な視点と寛容の精神 ②地球規模課題を身近な問題と捉えるための幅広い教養と理解力 ③多様な意見に耳を傾け、協働して問題解決にあたらうとする行動力 ④論理的思考力とクリティカルシンキングに基づく建設的な対話力 としました。この4つの資質・能力を育成するために、本校の「言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム」とのSGH研究開発構想のもと、①「コミュニケーション能力を備えた人材の育成」をはかる全校生徒を対象にした「言語技術」教育 ②全校生徒を対象にした探究型学習プログラム「GCP」(Global Citizenship Project) ③希望者の中から選抜された生徒対象に行い、全校の取り組みのパイロットケースとしている「GLP」(Global Leaders Program)を3本の柱として進めてまいりました。10月29日には、GCPの公開授業と活動報告を中心とした「中間報告会」を、2月18日には「言語技術」の模擬授業と活動報告を中心とした「活動報告会」を実施しました。本報告書は、この1年間の取り組みをまとめたものであります。ご一読頂いた皆様よりご指導賜りますようお願い申し上げます。

最後になりますが、ご指導いただいている運営指導委員の無藤隆先生(白梅学園大学教授・文部科学省中央教育審議会委員 教育課程部会長)、遠藤誠治先生(成蹊大学教授・日本国際政治学会 評議員)、村上清先生(岩手大学学長当別補佐・陸前高田市市政アドバイザー)をはじめ、提携していただいている国内外の大学、国際機関、研究機関や各企業、さらに交流いただいているSGH校や各学校の皆様に深く感謝申し上げますとともに、引き続きのご指導をよろしくお願いいたします。

B) 調書と概念図

平成28年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	そうかがくえん そうかこうとうがっこう				②所在 都道府県	東京都
28～32	①学校名	学校法人創価学園 創価高等学校					
③対象 学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	普通科 生徒数 1059	
普通科	354	346	359		1059	名 同キャンパスに小学校・中学校を併設	
⑥研究 開発構想 名	言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム						
⑦研究 開発の概 要	①日本語と英語を往還させ、言語技術に裏打ちされた論理的・批判的思考力の育成 ②全校生徒を対象に、探究型学習による地球規模課題の理解力の育成 ③選抜生徒を対象に、英語を中心とした高度な批判的思考力、協調的問題解決力を有したリーダーの育成						
⑧研究 開発の 内容等	⑧ 1 全体	<p>(1) 目的・目標 本校では、「生命尊厳の思想に基づき、地球規模課題の解決に貢献する能力を備えた人材」をグローバル人材と規定した。本構想では、この人材像をもとに、</p> <ol style="list-style-type: none"> ①文化的・社会的な差異を認めることのできる多面的・多角的な視点と寛容の精神 ②地球規模課題を身近な問題と捉えるための幅広い教養と理解力 ③多様な意見に耳を傾け、協働して問題解決にあたらうとする行動力 ④論理的思考力と批判的思考力に基づく建設的な対話力 <p>の4つの資質・能力を育成することを目的とした。 この4つの資質・能力育成のため、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言語運用能力の向上とそれに裏打ちされた英語4技能の習得 ・探究型学習やフィールドワーク(FW)を活用しての地球規模課題への深い知識と理解力の向上を目標に掲げた。 <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説 校内調査によれば、本校生徒は英語をはじめとした外国語への興味関心は非常に高いが、コミュニケーションに必要な母語(日本語)による言語運用能力の向上が課題であることがわかった。またSGHアソシエイトの活動を通して、生徒たちに地球規模課題への強い興味関心を持たせることができたが、その理解が表層的な知識に終わってしまったことも課題としてあげられた。</p> <p>上記の課題を踏まえ、グローバル人材として必要なマインドとスキルを育成するために、以下のような仮説を立てた。</p> <p>仮説1) 言語技術、特に「母語の強化」に焦点を当てることで論理的・批判的思考力が育ち、建設的な対話を実行する力が醸成される。 仮説2) 地球規模課題を協働的に学び、自らの考えを表現することで、幅広い教養と理解力が育成され、課題発見力・課題認知力・課題解決力が身につく。 仮説3) 国内・海外のFWを通して、文化的・社会的な差異を実感し、多面的・多角的な視点が育成される。</p> <p>(3) 成果の普及</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中間報告会(11月)と年度実践研究会(2月)の開催 ・研究成果を編纂し、冊子にして希望者に配布(年1回) ・英字新聞プロジェクトの成果作品を希望者に配布(年2回) ・GLP映像作品を学校ホームページにて配信 ・取り組みの様子を学校ホームページに特設サイトを設置し随時発信 ・GLP・GCPの取り組みを、SNSを活用して逐次発信 ・SGH事業に取り組んでいる他の高校との情報交換と協同研究会の開催 ・学校近隣の小学校・中学校・高校・大学と連携してのワークショップ開催(随時) 					

⑧-2 課題研究	<p>(1) 課題研究内容 (2) 実施方法・検証評価</p> <p>① 「言語技術」教育【1・2年生対象】 日本語と英語による言語技術の往還トレーニングを通じ、論理的・批判的な思考力・分析力を育てるカリキュラムを、国語科と英語科の協働で開発する。1・2年次に年間1単位を「言語技術」の授業として実施する。はじめに日本語のトレーニングを基本とし、平易な英語で同じ領域の学習をしたあと、再度日本語で行う。2年次にはさらに高度な論理的思考力・表現力、批判的思考といった能力をディベートなどの手法の学習を通して育成する。生徒が自己評価したルーブリック、教員によるルーブリック、さらに提出課題の3項目をもとに評価する。また、論理性と批判的思考力の一つの成果として、英字新聞作成プロジェクトを行う。他者にインタビューをすることは言語技術の応用実践となる。</p> <p>② 協調的探究学習グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)【全校生徒対象】 国連が提示する地球規模課題(Global Challenges)を中心にテーマを設定し、協働的な学びの手法を取り入れることで、現代社会に対する幅広い教養と協調的問題解決力の育成を目指す全校対象のプログラムを研究開発する。 1年次は環境・貧困・国際会議(模擬国連)を、2年次は戦争・冷戦後の紛争・人権をテーマにする。3年次には、言語技術の集大成とGCPの総括として、「ファイナル・プロジェクト」を実施し、全員が課題研究を行う。研究成果は、英語と日本語でプレゼンを行い、これをルーブリックに基づいて評価する。また、「現代社会」と「コミュニケーション英語Ⅲ」の授業において、プレゼンスキルや情報収集能力を習得するための教科横断的プログラムも提供する。また、留学生と地球規模課題について協働でポスターセッションを行うイングリッシュ・キャンプを実施する。</p> <p>③ グローバル・リーダーズ・プログラム(GLP)【選抜生徒対象(2・3年生の希望者から)】 選抜生徒に対して、国内外のフィールドワークを通して、より高度な論理的・批判的思考と協調的問題解決力を有したリーダーを育成するプログラムを研究開発する。 2016年度は「核廃絶」「環境・人権①(マイノリティー)」「人権②(国際人権問題)」「持続可能な開発・平和」の4つをテーマとし、より高度な問題解決能力を要求する実践研究を、英語を中心に使用して行う。Skypeを活用したオンライン英会話を実施し、英語のスピーキング力を高め、海外との意見交換、研究・調査のためのインタビューやディスカッションを行う。講義、文献調査、FW、インタビューなどを通して学び、課題解決の提言をまとめる。国内各地および海外にてFWを行う。そのまとめを、英語による映像制作およびプレゼンにより一般公開する。アンケートを実施し、生徒の変容をみることでプログラムの有用性を評価する。ここで開発されたプログラムの成果は、検証・評価の上、随時GCPをはじめ、学校全体の取り組みへと還元していく。フィールドワークは以下の通りである。</p> <table border="1" data-bbox="296 1256 1535 1534"> <tr> <td rowspan="3">海外</td> <td>アメリカ・モントレー</td> <td>核廃絶問題の日・露・米の高校生による発表会</td> <td>2名</td> </tr> <tr> <td>マレーシア</td> <td>異文化共存理解のための大学研修</td> <td>16名</td> </tr> <tr> <td>アメリカ・カリフォルニア</td> <td>平和学・人権問題講義と博物館研修</td> <td>16名</td> </tr> <tr> <td rowspan="4">国内</td> <td>沖縄・北海道・長崎</td> <td>各テーマのインタビューと博物館での研修</td> <td>8名</td> </tr> <tr> <td>広島県広島市</td> <td>被爆体験インタビューと平和記念館での研修</td> <td>12名</td> </tr> <tr> <td>岩手県葛巻町</td> <td>環境問題対策モデル自治体の訪問と研修</td> <td>12名</td> </tr> <tr> <td>首都圏</td> <td>環境・平和・人権に関する博物館・資料館研修</td> <td>70名</td> </tr> </table>	海外	アメリカ・モントレー	核廃絶問題の日・露・米の高校生による発表会	2名	マレーシア	異文化共存理解のための大学研修	16名	アメリカ・カリフォルニア	平和学・人権問題講義と博物館研修	16名	国内	沖縄・北海道・長崎	各テーマのインタビューと博物館での研修	8名	広島県広島市	被爆体験インタビューと平和記念館での研修	12名	岩手県葛巻町	環境問題対策モデル自治体の訪問と研修	12名	首都圏	環境・平和・人権に関する博物館・資料館研修	70名
海外	アメリカ・モントレー		核廃絶問題の日・露・米の高校生による発表会	2名																				
	マレーシア		異文化共存理解のための大学研修	16名																				
	アメリカ・カリフォルニア	平和学・人権問題講義と博物館研修	16名																					
国内	沖縄・北海道・長崎	各テーマのインタビューと博物館での研修	8名																					
	広島県広島市	被爆体験インタビューと平和記念館での研修	12名																					
	岩手県葛巻町	環境問題対策モデル自治体の訪問と研修	12名																					
	首都圏	環境・平和・人権に関する博物館・資料館研修	70名																					
	<p>(3) 必要となる教育課程の特例等 ①～③ 全て該当せず</p> <p>● 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) インド・デリー、中国・上海をはじめとした、海外高校生との平和・文化の意見交換会 2) 国内のSGH校他、同様なテーマを研究している高校との随時交流と定期的生徒間交流 3) Skypeを活用した外国人講師とのオンライン英会話の活用 4) マレーシア公開大学での語学・異文化研修プログラム <p>● 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 特になし</p> <p>● グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 2019年度の「言語科」の設置に向けた、言語科設置検討委員会の開設 2) 言語技術の授業導入に伴う、クリティカル・ライティング・センターの拡充 3) 探求型学習のためのルーブリック評価基準の開発とアクティブラーニング評価法の改革 4) 言語技術理解を深めるための、全教員対象の言語技術研修の実施 5) 全教員を対象とした英語力向上のための研修他、タイムマネジメント指導法開発も行う 																							
⑧-3 上記以外																								
⑨ その他・特記事項	<p>提携大学の創価大学はグローバル牽引型SGUであり、本校と有機的な研究開発ができる。本校は、2015年度よりSGHアソシエイト校の認定を受け研究開発を行っており、2月には年間報告会を実施した。</p>																							

創価高等学校 言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム

- グローバル人材の資質
- ① 文化的・社会的な差異を認めることのできる
 - ② 多様な視点と寛容の精神
 - ③ 多様な意見に耳を傾け、協働して問題解決にあたらうとする行動力
 - ④ 論理的思考力とクリティカルシンキングに基づく建設的な対話力

3年

Final Project

言語技術×GCP
言語技術をベースに応用しGCPにおける課題研究を深化させ英語と日本語で発表する

2年

言語技術 Language Arts

議論のトレーニング
他者の視点に立ち、ディベートを通して様々な角度から議論ができるようにする

認知のトレーニング
絵やテキストに登場する複数の人物の視点に立って、主観と客観の違いや多面的分析力を身につける

情報分析のトレーニング
絵やテキストを用いて物事を分析する際の基本原則を学び、論理的思考力・批判的思考力を身につける

1年

日本語⇄英語

言語技術の授業において日本語と英語の両方を活用することで学習効果を高める

情報伝達のトレーニング
情報を伝達する際の基本原則を学び、伝えたい情報を論理的に他者に伝える力を身につける

作文のトレーニング
パラグラフの概念を中心に文章の基本構造を学び、論理的な文章を書く力を身につける

対話のトレーニング
簡単な質問と返答をゲーム形式で繰り返し、具体的な、論理的に発言する力を身につける

複言語 複文化

創造的
思考力

協調的
課題
解決力

多面性 多角性

課題
認知力

知識 理解

課題
発見力

Mind Skill

【現代社会】 教科横断型 [英コミⅢ]

持続可能な開発

「持続可能な開発のための2030アジェンダ」を学び、1・2年次に学んだことを踏まえてテーマ選択を行なう

情報収集スキル

相手に伝わりやすいように、情報を分析し、まとめる力を身につける

英語のプレゼン・ディベート

全員が英語でプレゼンとディベートができるよう指導する

GCP Global Citizenship Project

人権

世界や日本における人権侵害の問題などをディベートを通して学ぶ

現代の紛争

現在も起こっている紛争の実態をグループ学習を通して学ぶ

戦争

戦争体験を聞き、多くの国の体験の共有を通して戦争の歴史を学ぶ

【手法】
ディベート
フィッシュボーン
ジグソー法

国際関係・国連

模擬国連を通して国際関係について知る

貧困

貿易ゲーム等を通して国家間の格差や貧困の実態を知る

環境

環境問題が世界の構造的な問題に由来していることを知る

模擬国連
貿易ゲーム
マインドマップ
ジグソー法

GLP Global Leaders Program

2・3年生の希望者から選抜した生徒を対象に、英語での言語技術トレーニングを実施するとともに、国連が提示する地球規模課題のうち「核廃絶」「人権①(マイノリティ)」「人権②(海外)」「持続可能な開発」の4つをテーマとし、課題解決のための提案を行う。またその提案を論理的・批判的に検証し、英語での動画制作およびプレゼン発表を行う。

選抜者

グローバルワーク

GLP

＜海外＞
◎アメリカ ミドルベリー国際大学院
◎マレーシア マラヤ大学・マレーシア公開大学
◎アメリカ カリフォルニア大学アーバイン校
◎アメリカ カリフォルニア州立大学フラトン校

GCP

＜海外＞
◎マレーシア マラヤ大学・マレーシア公開大学
◎アメリカ カリフォルニア大学アーバイン校
◎アメリカ カリフォルニア州立大学フラトン校

＜国内＞
沖繩 長崎 北海道 国連大学

＜海外＞
◎マレーシア マラヤ大学・マレーシア公開大学
◎アメリカ カリフォルニア大学アーバイン校
◎アメリカ カリフォルニア州立大学フラトン校

＜国内＞
岩手県 青森県 弘前県 山形県 秋田県 宮城県 福島県 茨城県 栃木県 群馬県 埼玉県 千葉県 東京都 神奈川県 新潟県 富山県 石川県 福井県 山梨県 長野県 岐阜県 静岡県 愛知県 三重県 滋賀県 京都府 大阪府 兵庫県 奈良県 和歌山県 徳島県 香川県 愛媛県 高知県 福岡県 佐賀県 大分県 熊本県 鹿児島県 沖縄県

主な連携先

創価大学 アメリカ創価大学

(アメリカ)ミドルベリー国際大学院
モンテレー校・カリフォルニア大学アーバイン校
カリフォルニア州立大学フラトン校
国連大学・北海道大学大学院
山田ゼミ・(中国)上海市甘泉外國語中・(インド)デリーブルーベルインターナショナルスクール

言語技術の発展として「言語科」を設立

言語技術の授業運営能力を持つ教員を養成するために、国語科・英語科、さらに情報科の教員を研修に参加させる。最終的には、日本語・英語教育の発展として「言語科」の設立を目指す。

英語力を磨くための海外・国内研修の充実

英語力を磨くために、希望者が参加できる研修プログラムを用意する。(海外)マレーシア公開大学研修(国内)創価大学English Camp・英字新聞プログラムなど。また、生徒にSkypeを使用したオンライン英会話を提供予定。



C) 完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都小平市たかの台2番1号
管理機関名 学校法人 創価学園
代表者名 理事長 原田 光治 印

平成29年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成28年 6月 1日（契約締結日）～平成29年 3月31日

2 指定校名

学校名 創価高等学校

学校長名 木下 清一

3 研究開発名

言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム

4 研究開発概要

○【言語技術】

日本語と英語を往還させ、言語技術に裏打ちされた論理的・批判的思考力の育成

○【グローバル・リーダーズ・プロジェクト（GCP）】

全校生徒を対象に、探究型学習による地球規模課題の理解力の育成

○【グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）】

選抜生徒を対象に、英語を中心とした高度な批判的思考力、協調的問題解決力を有したリーダーの育成

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
			○				○				○	

③日本語による説明の技術のトレーニング【ラベリング・空間配列・時間配列・概要から詳細の説明へ等】

※技術の習得状況を確認し、習得を促進するため、対話の技術に関しては生徒全員を対象に口頭試験を実施した。また、作文の技術に関しては、1年間で15本ほどの作文を生徒に書かせた。それらの作文を、教員が一人ひとり添削・コメントし、フィードバックした。

○【グローバル・リーダーズ・プロジェクト（GCP）】（全校生徒対象のSGHプロジェクト）

「世界を知る 私を知る 世界の平和のために私は何ができるか」をテーマに掲げた。

- ①1年生は「環境、貧困、食糧問題」を、2年生は「戦争、冷戦後の紛争、人権」を、3年生は「環境、国際会議」等を探求テーマに設定し、地球規模課題に対する探求学習を進めた。
- ②学期に2回（5月、7月、10月、11月、1月、2月）、GCPの時間を設け、運営は、全校生徒からの希望者で構成されたGCPリーダーズによって行われた。
- ③3年生は、2年後に現一年生が行う予定である課題研究「ファイナルプロジェクト」の二言語（日本語・英語）でのポスターセッションを先行実施した。

○【グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）】（選抜生徒16人対象のSGHプログラム）

は、毎火金の18時～19時30分に、地球規模課題に関する探究型学習を行った。

- ①地球規模課題に関する議論と講義に加え、アクティブラーニングやプレゼンスキルを活用した探究型学習を実施し、問題の理解と論理的な議論を展開した。
- ②沖縄とカリフォルニアで実施されたフィールドワークでは事前に仮説を設定し、論証のために必要なアンケート調査を実施し、論理的・分析的思考を高めた。
- ③報告会は全て英語で実施し、SkypeやYoutubeなどのSNSを利用して海外との交流や情報発信を行った。

○【その他】

- ①国内外フィールドワーク（全校生徒より希望者）：GCP、GLPで定めた各テーマに則り、カリフォルニア、沖縄、広島、岩手、東京（国連大学、国立ハンセン病資料館、JICA等）を行った。また、カリフォルニアで行われたCIF（Critical Issue Forum）に参加した。
- ②グローバルセミナー（全校生徒対象のセミナー）：国内外から著名な識者を招聘し全校生徒を対象としたセミナーを開催した。4月1回、5月2回、7月1回、11月2回と6回行った。
- ③イングリッシュキャンプ（全校生徒より希望者）：創価大学にて1泊2日で実施した。
- ④本年度の主な受賞は次の通り
ジャパントイムス主催の英字新聞コンテストで英字新聞賞（優勝）、NRI(野村総合研究所)学生小論文コンテストで優秀賞、手帳甲子園で優秀賞他各賞受賞、人間の安全保障学会ポスターセッションで奨励賞

7 目標の進捗状況、成果、評価

【言語技術】

- ①年度末に1年生全員にアンケートをとり、対話・作文・説明の各技術の重要性・有効性を感じたかという質問に対して、60%前後の生徒が「大変そう思う」「かなりそう思う」と回答した。

「まあまあ思う」という回答まで含めると、全体の95%を占めるに至った。また、同じアンケートにおいて、日本語と英語の構造における相違点や共通点を意識するようになったと回答した生徒は75%おり、日本語で学んだ言語技術を英語の授業で活用できたと回答した生徒は79%いた。

- ②英検2級のライティングのCSEスコアでは、1年間言語技術を受講した1年生が未受講の2、3年生より高かった。
- ③各教科の授業やクラスでの話し合いの場面では、生徒たちが結論・理由の順番で発言し、ナンバーリングを用いることにより、議論の進行がスムーズになり内容も濃いものになっている。
- ④英会話の授業や英作文の課題において、発言する際や文章を書く際の「型」を学んだ結果、これまでの生徒たちに比べ、より積極的に話し書いている姿が見られる。

【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）】

- ①SGHアソシエイトの昨年度に「国連2030アジェンダ」について、全校生徒へ導入的なレクチャーを行っており、それがベースともなって、1年目の取り組みはおおよそ順調に進んだ。特に、2年後の実施を目指す高校3年生の課題研究「ファイナルプロジェクト」の先行実施を行うことができたことは大きな成果となった。日本語でのレポート作成から始め、成果をポスターとしてまとめ、最終的に、日本語・英語の二言語でのポスターセッションを実施した。1、2年生への公開も行い、1、2年生が来年度への意欲を高める機会ともなった。
- ②2月に行ったアンケートでは、「地球的問題・課題（紛争・人権・環境・貧困等）についてのニュースに興味がありますか」との問いに、5月では「あてはまる」と答えた生徒が32%だったのに対して、2月の結果では55%と大きく上昇し、「どちらかといえばあてはまる」を含めると90%となった。このように、地球規模課題に関する全校生徒の意識は大きく向上した。また、協調的な探求学習の手法を多数用いたが、その成果として、「さまざまなワーキングにおいて、友達と協働して話し合って回答を出すことができたか」との問いに対して、5月には、18%が「あてはまる」と答えたのに対して、2月には実に41%の生徒が「あてはまる」と回答し、「どちらかといえばあてはまる」を含めると86%となった。生徒間で協働して答えを求めていく姿勢が身につけてきていることを示している。
- ③GCPの運営を担ったGCPリーダー（生徒の希望者で構成）は半年交代制をとり、前期は112名、後期は126名の生徒が集った。そのうち約70%が前期からの継続を希望したメンバーであったことから、生徒主体に運営を行う体制が成果をあげていることがわかる。

【グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）】

- ①フィールドワークに向けて、仮説を立てて進めることで、論理的かつ分析的な探究型学習を実施することができた。
- ②オープンキャンパスや、学園祭などでポスターセッションを実施し、公開された空間でのポスターセッションの機会を多く持つことができた。また中間報告会および最終報告会において、英語のプレゼンテーションを実施した。
- ③フィールドワークまでの研究成果をまとめて作成した英字新聞は、ジャパントイムズ主催の第1回全国中学高校生英字新聞コンテストにおいて、大賞である「英字新聞大賞」を受賞した。
- ④核問題について全員で取り組むことで、4月に実施される、カリフォルニア・ミドルベリー国際問題研究所の主催する、核廃絶に関する高校生による国際会議、クリティカル・イシューズ・フ

オーラムの取り組みで、2年生が英語によるプレゼン作品を作り上げることができた。

<添付資料> 目標設定シート

8 次年度以降の課題及び改善点

【言語技術】

- ②年度末のアンケートでは、95%の生徒が言語技術の重要性・有効性を実感しているものの、言語技術を他の場面で活用できるようになったかという質問に対して、「そう思う」と回答した生徒が、対話の技術で74%、作文の技術で84%、説明の技術で76%と、割合が少し下がっている。言語技術の授業内だけで活用できる力を向上させるには限界があるので、他の教科と連携し言語技術を活用する場面を増やしていく。そのため、全教員に対する言語技術の研修会等を実施する。
- ③1年生約350人の生徒に書かせた作文の添削を、正教員1名と非常勤講師2名の体制で行った。来年度以降、人員の増強を図りきめ細やかな文章指導を行っていく。さらに、評価のためのルーブリックや、自己・相互による評価方法の改訂・開発も推進する。

【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）】

- ①さらに多くの生徒が実感し、自らの進路選択に役立てていけるように内容を一層向上させていく必要がある。例えば、国内外のフィールドワークの参加枠を拡大し、より多くの生徒が実感を持った学びを進められるような機会が必要である。
- ②3年生が実施したファイナルプロジェクトでは、テーマの設定やレポートの添削を、担当教員とCWCの教員3名で行ったが、より細かな指導が行き届くために人員の増強を図りたい。また、成果をまとめたポスターを校内発表から外部へ発信していけるような工夫を行いたい。

【グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）】

- ①仮説に基づくフィールドワークは、探究型学習の取り組みとして大変に有意義なものとなったが、訪問地をカリフォルニアと沖縄に絞ったことで、地球規模課題と関係したテーマの設定が難しくなった。またSGH採択1年目ということもあり、フィールドワークの実施までの日程が限られてしまった。2017年度は早めに取り組むことができ、地球規模課題と関連した幅広いテーマ設定ができるように取り組む。
- ②評価方法として、プログラム終了後に、本校の考えるグローバル人材の資質・能力の個別能力の成長を自己評価および他人に評価させた。ただ、この資質・能力の基準について、事前に提示しておく必要性を感じた。2017年度はこの評価表をすでに提示しており、生徒たちに獲得する資質・能力について意識させながらプログラムを進めていく。

【担当者】

担当課	経理募金課	T E L	042-342-2611（代）
氏 名	山下 英一	F A X	042-342-2617
職 名	副課長	e-mail	yamashita@soka.ed.jp

2. グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)

A) 概要・年間スケジュール

■ 概要

グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)は、国連が提示する地球規模課題を中心にテーマを設定し、協働的な学びの手法を取り入れることで、現代社会に対する幅広い教養と協調的問題解決能力の育成を目指す全校対象の企画です。

企画は学期に2回ずつ行いました。1年生は「環境」をテーマに環境リンクマップの作成や、「格差」をテーマに「貿易ゲーム」や「世界がもし100人の村だったら」のロールプレイなどを行い、学びを深めてきました。2年生は、「戦争」や「紛争」をテーマに、日米両国の核兵器をめぐる考え方の比較や、ルワンダ内戦の歴史などについて学びました。3年生は、「国際パートナーシップ」をテーマとして、「COP21」を舞台に模擬国連を実施し、全員が一国の大使となって交渉を重ね、国際協調の重要さと難しさを学びました。そして、ファイナルプロジェクト(Final Project)として、各自がテーマを設定し、課題研究を行い、その成果をポスターセッションの形で日本語・英語の2言語で発表しました。また、Final Projectの準備として、「現代社会」と「コミュニケーション英語Ⅲ」の授業において、プレゼンスキルや情報収集能力を習得するための教科横断的プログラムも提供しました。

■ 年間スケジュール

		1年生	2年生	3年生
1 学期	5月7日	【環境問題】 VTR学習、ジグソー法	【戦争】 VTR学習、グループ ディスカッション	【環境問題】 VTR学習、ジグソー法
	6月22日	【環境問題】 ジグソー法 リンクマップの作成	【戦争】 ジグソー法	【環境問題】 ジグソー法 リンクマップの作成
2 学期	10月29日	【格差・貧困】 貿易ゲーム	【現代の紛争】 フィッシュボーン	【国際パートナーシップ】 模擬国連
	11月26日	【格差・貧困】 ロールプレイ「世界がも し100人の村だったら」	【国際理解】 本校の外国人講師に よるレクチャー	【格差・貧困】 貿易ゲーム
3 学期	1月21日	【食糧問題】 牛肉から考える地球規 模課題	【人権】 人権スゴロク	【Final Project】 課題探求のポスター セッション(日本語)
	2月18日	【途上国への教育援助】 模擬教育援助会議	【人権】 人権ディベート	【Final Project】 課題探求のポスター セッション(英語)

B) GCP リーダー

本校では、GCP 企画の運営を教員ではなく希望生徒（GCPリーダー）が担っています。本年度は 4 月（前期）と 10 月（後期）に各クラスの希望者から選出します。GCP リーダーは前期で総勢 112 人、後期で 126 名が集いました。

GCP リーダーは、企画本番前に、GCP リーダーズミーティングを行います。そこで、テーマについての学習や当日の企画のリハーサルをすることで、企画のテーマがクラスメートに分かりやすく、かつ楽しみながら伝わるように工夫を重ねてきました。



◆ 生徒感想

「僕は、半年間 GCP リーダーとして活動し、リンクマップや貿易ゲームのように、自ら手を動かし、答えを探っていくことで、地球規模課題に対する興味が沸き、世界市民として、今世界で起きている問題を理解することができました。また、リーダーとなってクラスをまとめることは大変でしたが、やりがいも沢山ありました。21 世紀のリーダーとして活躍できるように更に、学び、積極的に GCP の活動に参加していきたいと決意しています。」

「僕がここまでの GCP 企画を通して学んだことは、平和を築く上で必要なことは”知る”ことだということです。レイテ島での決戦やルワンダ内戦のことなど、僕は全然知りませんでした。でもこうした悲惨な歴史を知らなければ、いくら平和について考えても、平和を築くことはできません。GCP はアクティブラーニングをベースにし、友人と一緒に課題に取り組みます。また、僕たち生徒が進行を行うため、より深く、主体的に学ぶことができます。これからも GCP リーダーとして一人一人の平和に対する意識を向上できるように努めていきます。」



「私が GCP リーダーとして得たことは、学びへの意欲と感謝の気持ちです。GCP リーダーはその授業の時間を全て担うので、指示が上手にできなかったときなどは、普段の先生方の大変さを実感し、感謝の思いを感じます。そうした気持ちが普段の授業へのモチベーションにも繋がっています。自ら積極的に企画に関わっていくことで、テーマに対して自ずと興味・関心が沸き、自分は今何をすべきかという一歩深い学びをすることができます。創価高校の創立者池田先生は、私たち学園生へのメッセージの中で、『感謝とは人間性の真髄です。その心は『学ぶ』という、同じく人間性の真髄と一体となって、人生を限りなく高めてくれる二つの翼であります』とされています。その翼を鍛え、自由自在に世界を飛び回り、世界の平和のために貢献できる力を身につけられるのがこ

の GCP であり、それを引っ張っていくのが GCP リーダーです。そのことを胸にこれからも活動に励んでいきます。」

C) 貿易ゲーム(1年生)

■ 日時 10/29(土)・合計 90 分(貿易ゲームに 50 分、振り返りに 30 分)

■ 参加者 高校 1 年生

■ 目的

- ①「貿易」を中心とした世界経済の基本的な仕組みを理解する
- ②自由貿易や経済のグローバル化が引き起こす諸問題に気づく
- ③南北格差や環境問題の解決に向けて、国際協力や一人一人の行動について考える

■ 事前準備

10/29 の企画実施へ、クラスを盛り上げていくため、10/13～10/19 の間に、GCP リーダーズが帰りの HR で、“What’s going on?”と題して、新聞、ネットなどから「貿易」「自由貿易」「経済のグローバル化」などのキーワードに関わるニュースを探ってきて紹介する。

■ 当日の内容

前半、5～6人の班で、1つの国になり、紙やハサミなどの与えられた材料を用いて、力を合わせて、“マーケット”で売ることができる製品を作り、できるだけたくさんのお金を稼ぐことを競うゲームを行いました。

振り返りのポイントは以下のようにまとめられます。

①各国ごとに与えられる道具と材料には大きな格差があり、それが、先進工業国・開発途上国・後開発/発展途上国の格差を表しているといえます

②ゲームのルールはどのグループにも同じであったことは「自由貿易」を表している。自由に製品をつくり、売ることができる自由貿易は、開発途上国を不利な立場に追いやり、南北格差を助長する構造的問題があるのではないかと。関税、輸入制限で国内を守るべきではないか、などの課題を学びました。

③製品の値段が変わるといって「市場価格の変化」への対応。途上国の工業生産は、先進国の新製品によって経済発展がなかなかできません。先進国は新たな技術の特許などで守り、商品の価値を維持します。生産の偏りは、市場の動向に対応できていないことを表しているといえます。

④ほかのグループで作業した人は「移住労働者(外国人労働者)」であったと言えます。現実では、現地人の労働条件との違いや、生活習慣の違いからくるストレスなど、さまざまな問題を含んでいます。

⑤グループ間で協力して製品を作る「国際分業」が行われたケースも。台湾、韓国、タイなどの国々から供給された部品を組み合わせてつくるパソコンなどはこれにあたります。

⑥ほかの班から助けられたかどうか。「援助(国際協力)」の有無。道具や紙がなくて困っているグループに無償で道具を貸したり、資金を提供したりする「援助」のよりよいあり方とはどのようなものか。もし行われなかったとしたら、どうしてだったのか。



⑦紙の切れ端はどう扱ったかに「環境問題」への取り組みが現れていると言える。紙の切れ端が多いグループはどこだったか。切れ端の多さは、何を意味しているのか。過剰な生産と消費の繰り返しが、資源の無駄遣いや環境破壊につながります。

⑧製品の形が決められていることを通して「経済のグローバル化」を考えることができる。電化製品は規格を統一され、服装なども地域的な特色はなくなってきました。グローバル化がもたらす恩恵と課題は何なのか。

◆ 生徒感想

「貿易ゲームでは時間制限がありました。現実ではエンドレスに続くこのような経済の格差を少しずつでもいいから減らしていきたい、そして、援助することは大切だと感じた。僕たちの国は最初は3番目に良いスタートだったのに、周りとあまり交渉せずに時間が過ぎてしまった。僕たちよりスタートの条件が悪い国は、同盟を結び、少ない資源で交渉して成果を残していた。それに比べて僕たちの国は成果が出なかったのでも悔しかった。新しい発見の多いゲームになりました。」

「私たちの国は“鉛筆 1 本、紙 1 枚、100ドル”だけと言うところから開始しました。最初は商品を作り出すためのハサミがなくとても戸惑いましたが、同じように困っている国と力を合わせました。他の国と交渉したり、国連から援助を受けたりしながら、もともとの持ち金から 72 倍もの利益を生み出すことができました。みんなと協力する楽しさを味わったのと同時に、世界には豊かな国々と、貧しい国々があるということを知りました。今回のゲームを生かして世界の国々について考えていきます。」

「運営を担当する GCP リーダーズの皆で練習した時よりも、最貧国が活発に生産をし、資本を増やしていて驚きました。私はマーケット担当でしたが、生産品の流れや途上国がいかに製品を作りにくいかがよくわかりました。道具の援助では“貸して欲しい”と言ってきたグループは少なかったです。こちらから均等に援助することができないことも体験し、国際援助の難しさを感じました。」

第3回GCP企画「貿易ゲーム」進行表

2016年10月29日（土）

時間	動き	司会のやること	参加者のやること	備考
11:00	グループ分け	グループ分けの指示	座席を班の形に	司会席・マーケット席の確保 各班どうし机をできるだけ離す 各班、キャプテンを決める
	準備	片付けの指示	机の上・中のものを片付ける	全員の準備が完了してから次へ進む
全員の準備が完了したら	ルール説明	ゲームの目的を説明		「お金」を稼ぐことを強調 質問は受け付けない、相談は後で乗る
		袋を配布	袋を受け取る	開始までは触らせない
全員の準備が完了したら	ゲーム開始	開始のスライドを表示する	作業開始	
(目安11:10)	ゲーム中			マーケット班はマーケットに専念 司会班は巡回し相談に乗っても良い 司会班は各班の動きをよく見て記録しておく 適宜、マーケットの動きを全体に伝える
開始20分以上後	流れを変える	マーケットの価格を変動①		マーケットが回転し、途上国もマーケットに参加してから
開始25分以上後	支援	途上国（E班～H班）に道具を貸してあげる		援助しすぎない 5分間だけ、と時間を限定して渡す
開始25分以上後	新資源発見	G班・H班に紙を10枚～15枚あげる		あげすぎない
残り10～15分程度	流れを変える	マーケットの価格を変動②		
11:55	終了予告	「そろそろゲームを終了します」		
	終了宣言	「ゲーム終了です」	お金を数える	マーケットは閉局し、受け付けない
12:00	振り返り①	各班の金額を聞き、「優勝グループ」を決める 優勝班と最下位班のキャプテンから、今の気持ちを一言聞く		資源や作りかけは考慮しない
	振り返り②	各班ごとに振り返りを行う		
12:15	振り返り③	各班の振り返りを共有する ここで、スタート時の袋の中身を言ってもらおう 最初の金額から最終金額へ何倍に増えたかを見してみる		
12:20		スライドを使って、振り返りを行う		
12:30終了				各クラス4名に感想を書いてもらう（リーダーズ2名、それ以外2名）

D) 世界がもし 100 人の村だったら(1 年生)

■ 日時 11/26(土)・合計 70 分

■ 目的

- ①「世界がもし 100 人の村だったら」に描かれた世界の現実を、シミュレーション(疑似体験)という参加型の方法で体験する。
- ②世界の現状を理解し、自分との関係に気づく
- ③問題の原因追及や解決は深く掘り下げず、自分の興味・関心を高める

■ 当日の内容

- ①役割カードを全員に配布
- ②以下のプログラムで進行

1. 世界の人口

- i. 世界の人口は何人か?といった簡単なクイズ
- ii. 人口増加についての現状を学ぶ
- iii. 人口増加の結果、何が起こるかを考える

2. 女性と男性、どっちが多い?

- i. 男性・女性の人口に関するクイズ
- ii. 男性役・女性役に分かれて座る

男性役は廊下側、女性役は窓側に座り、世界の男女比が同じであることを知る

- iii. 国によっては男性が多いが、これはなぜか?

3. 世界は今、高齢化?若年化?

- i. 役割にしたがって、動く

大人:しゃがむ 子ども:立つ お年寄り:イスに座る

- ii. 日本の高齢化の現状、世界が高齢化している現状を知る
- iii. アフリカでは子どもが多く日本は高齢者が多いのはなぜか?

4. 大陸ごとに分かれてみよう

- i. 人口に関する簡単なクイズ
- ii. 大陸ごとに分かれて座る
各グループ、大陸の大きさのひもに入ってみる
- iii. 人口密度が高いことによる問題点を考える

5. 世界の言葉で「こんにちは」

- i. 世界で最も多く話されている言語を知るクイズ
- ii. 同じあいさつの人を探そう

同じ挨拶の人が見つかったら、後方に座る。同じ挨拶がない少数言語の人たちは前方に座る。その後、人数が最も多い言語から紹介し、少数言語も一人ずつ紹介していく。司会から、どこの国の言語なのかを紹介

6. 文字が読めないということ

- i. 全員起立させ、キーワードを知る人だけが座れる、という状況をつくる
- ii. 世界の識字率を知る
- iii. 非識字役のメンバーに、簡単なロールプレイをしてもらう

薬局で、3つのペットボトルの中から「薬」を選ぶ。薬のラベルの文字が読めないとき、どうやって選ぶか?

iv. 文字が読めないことの不便さを考える

7. 所得が多いのは誰？

i. 役割カードの分類ごとに分かれる。(人数は等分される)

ii. お金(札束に見立てた紙)を、各班ごとに配布していく。このときの分配から、世界の富の不平等さを知る

iii. 世界の所得の不公平さについて考える。

③振り返り

◎「世界がもし 100 人の村だったら」を読んでみよう

◎今回行ったシミュレーションの中から、最も印象に残ったものは何か、考える

◆ 生徒感想


「今回の GCP 企画を通して、縮小化された世界を体験しました。その中で、最も感じたことは、世界は広く、自分と同じような生活をしている人はほんの一握りの数にしかすぎないということでした。今、生活している状況が世界から見れば特殊で、同じ言葉を話す人も世界のうち 0. 数%でした。世界がもし 100 人の村だったら、他人の文化や思想厳護をあるがままに理解して、受け入れなければ争いや対立が生まれてしまうであろうと思います。今、世界には多くの格差があって、その差を埋めていくにはどうしていくべきなのか？ということを考えるいいきっかけになりました。」

「今回の GCP 企画を通して、一部の幸せに多数の犠牲が伴っているんだなと思います。そして、自分たちが小数の幸せ側であるから、これらの犠牲は普通にしていたら気付かないんだろうと思います。だからこそ、自分たちは小数の幸せ者であること、それよりもっと不幸な人がいて、自分たちはあたりまえではないことを忘れないようにしていきたいです。」



「印象に残っていることは、アジアの枠のスズランテープの中に入ったらばんぱんだったことです。でも、意外だと思ったのはアフリカや北アメリカが人口が多いと思っていたけど、以外と少なくテープの余裕がけっこうあったことです。」



● パワーポイント(例)

<p>If the world were a village of 100 people</p> <p>世界がもし 100人の村だったら</p> 	<p>「世界がもし100人の村だったら」に描かれた世界の現実をシミュレーション(疑似体験)という参加型の方法で体験します。</p>																											
<p>【今日の目的】 世界の現状を理解し自分との関係に気づくこと</p> <ul style="list-style-type: none"> 問題の原因追及や解決は深く掘り下げません。 世界への興味・関心を高めることが目標です。 気になった事柄やキーワードをワークシートに書き込んでいきましょう。 	<p>本日の流れ</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>テーマ</th> <th>所要時間(分)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>世界の人口</td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>女性と男性、どっちが多い?</td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>世界は今、高齢化?若年化?</td> <td>10</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>大陸ごとに分かれてみよう</td> <td>10</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>世界の言葉で「こんにちは」</td> <td>10</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>文字が読めないということ</td> <td>15</td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>所得が多いのは誰?</td> <td>15</td> </tr> <tr> <td></td> <td>合計</td> <td>70</td> </tr> </tbody> </table>		テーマ	所要時間(分)	1	世界の人口	5	2	女性と男性、どっちが多い?	5	3	世界は今、高齢化?若年化?	10	4	大陸ごとに分かれてみよう	10	5	世界の言葉で「こんにちは」	10	6	文字が読めないということ	15	7	所得が多いのは誰?	15		合計	70
	テーマ	所要時間(分)																										
1	世界の人口	5																										
2	女性と男性、どっちが多い?	5																										
3	世界は今、高齢化?若年化?	10																										
4	大陸ごとに分かれてみよう	10																										
5	世界の言葉で「こんにちは」	10																										
6	文字が読めないということ	15																										
7	所得が多いのは誰?	15																										
	合計	70																										

● 使用したワークシート

 <p>第4回 GCP 企画 世界がもし 100 人の村だったら</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">  <p>【役割カードについて】 今日一日は、役割カードの人物になりきってください。 ほかの人には見せないでください。</p> </div> <ol style="list-style-type: none"> 世界の人口 人口増加の結果、どんなことが起きると思いますか? 女性と男性、どっちが多い? 世界の国で、インドでは4000万人、中国では5000万人、女性の人口が男性よりも少ないと言われていますが、なぜだと思いますか? 世界は今、高齢化?若年化? なぜアフリカでは子どもの割合が高く、日本では大人の割合が高いのかを考えてみましょう。 大陸ごとに分かれてみよう アジアで人口密度が高いことにより、どんなことが起こると考えられますか? <p style="text-align: right;">SGP 年 組 番 名前 No. 役</p>	<ol style="list-style-type: none"> 世界の言葉で「こんにちは」 クイズの1位から4位までがそろったら、なぜこれらの言語人口が多いのか考えてみましょう。 文字が読めないということ 文字が読めないと、どんな不便さがあるでしょうか? 所得が多いのは誰? なぜ、世界にはこのような所得の不公平があるのでしょうか?不公平に対してどうしたらよいでしょうか? <p>□振り返り ◎「世界がもし100人の村だったら」を読んでみましょう。</p> <p>◎今回行ったシミュレーションの中から、最も印象に残ったものは何でしょうか?</p> <p>～時間があれば～</p> <ul style="list-style-type: none"> 読み合わせをして、印象に残ったところを共有しましょう。 今までのGCP企画で学んだことと、どう結びついているか考えてみましょう。
---	---

E) いのちの食べ方を問う(1年生)

■ 日時 1/21(土) 90分

■ 目的

「いのちを食べること」に関わる課題を考えるため、今回は牛肉をテーマにして学んだ。食肉センターで働く人の人権の問題、肉牛の食べる穀物が人の食料何人分にもなってしまうこと、肉牛を運搬する時に出る二酸化炭素や、飼育時に発生する二酸化炭素が環境問題につながることなど、私たちが牛肉を食べることで起きる地球規模課題を学ぶ。

■ 事前準備

(必要であれば)グループメンバーを考える

パワーポイントの確認

牛肉パズルセットの作成(班の分、切っておく)

以前、牛肉を食べることに関わる課題について調べておく

■ 当日の流れ

1.お肉はどこからやってくる (25分)

★好きな牛肉料理をあげてみよう!

★牛肉の生産過程を考えよう。

★650kgの牛から、どれだけの精肉がとれるでしょう?

★私たちが食べている、牛肉(精肉)の部位を確認しよう!

★精肉以外の部分はどう使われる?

2.ここにも牛がいる (15分)

★次のものに共通するものは何だろう?

★次の絵の中で、牛が使われている製品はどれでしょう?

★牛を無駄にしない気持ちを知ろう

3.食肉センターで働くということ (15分)

★次のことをグループの人と話し合おう。

★実際に現場で働く人たちの思いを知ろう。

(休憩 10分)

4.牛肉が地球を食べる (35分)

★牛肉クイズ

★選んだ牛肉料理と世界の繋がりを考えよう。

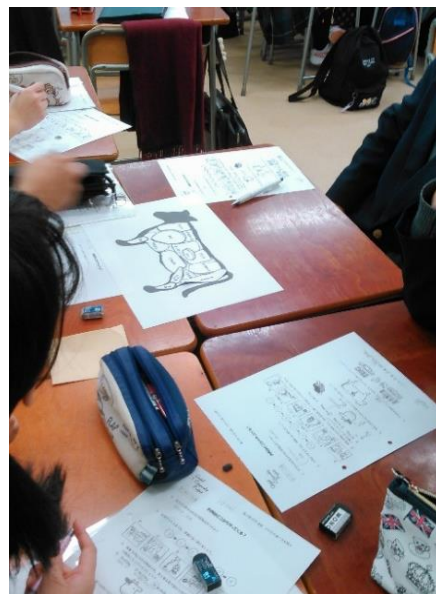
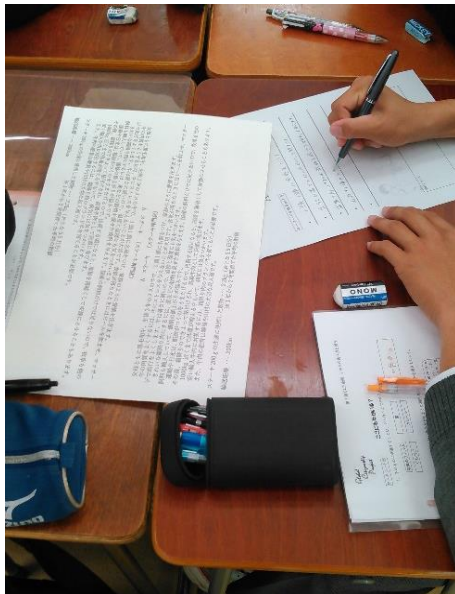
★牛肉から見える地球規模課題+まとめ

◆ 生徒感想

「自分たちが日々食べている牛肉を通して、それに関わる人々の声や世界規模の問題を知り、学ぶことができた。特に印象に残ったことは、食肉センターで働く人の話だった。『牛を簡単に殺すなら人も殺しかねない』と周りの人に言われたことがあると働く人が言っていて、世の中のために仕事をしているためにも関わらずそのように言われるのはとても不条理で悲しいことだと思った。今回のGCP企画を終えて、自分が今食べているもの、着ているもの住んでいるところはみな陰で力を尽くしてくれている人がいるということをしっかり自分の心に留めておこうと思った。そして、これから『いただきます、ごちそうさま』を忘れずに言っていきたい。」

「今回学習した GCP 企画の内容は驚かされた内容がたくさんありました。前半では、牛のことについて学びました。牛を、どこまでも無駄にしないように使う精神は何事にも通じることがあると思いました。また、牛の映像や決して『殺す』という言葉を生肉業の人たちが使わないことを知り、とても感慨深いです。自分も、誰かが消費者のために働いてくれているからこそ食べ物を食べて生活が出来るのだと感謝していきたいと思いました。後半の、実際に食べ物を使って、キーワードを出していく作業では牛の現状について知ることが出来ました。値段によって、牛の育てられる環境やエサ等においてほぼほぼ異なりました。印象に残ったのは、安い牛肉が大量生産のために牧場の草が大量に必要だったり、固形飼料を与えられたりしているということです。それらは、環境や人体などに悪影響を与えていると思われます。今日をきっかけに、世界の現状に興味を持ちました。」

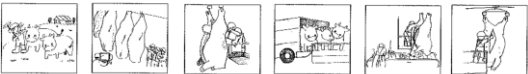




「今回の GCP 企画では、私たちの生活に身近な『牛肉』をテーマに世界とのつながりを考えることが出来ました。まず私は、普段お肉がどのようにして店まで来るのかを考える機会がほとんどなく、食肉センターの存在も知りませんでした。しかし、今回の企画を受けて、食と命について考えたり新しい事実も知ることができ、充実した時間を過ごすことができたと思います。食べることは、その生き物だけでなく世界の様々な問題とも関わっていることがわかったので、これからも感謝の気持ちを忘れずに食事をしていきたいと思っています。」



● 使用したパワーポイント(一部)

	<p>いのちの食べ方を問う</p> <ul style="list-style-type: none"> • プログラム 1. お肉はどこからやってくる? 2. ここにも牛がいる? 3. 食肉センターで働くということ 4. 牛肉が地球を食べる 
<p>いのちの食べ方を問う</p> <p>今回のテーマ</p> <p>以上のプログラムを通して、いのちを食べることに関わる課題を考える</p> 	<p>2. ここにも牛がいる!?</p> <p>★牛を無駄にしない気持ちを知ろう</p> <p>食肉センターで働く人たちは、昔から仕事をするとき、「() 以外は無駄にしない」と言ってきました。() に入る言葉を考えてみよう。</p> <p>※各班 1 個ずつ答えを挙げてもらう</p> <p>答え. 鳴き声 (モ～)</p>

● 使用したワークシート

<p>Global Citizenship Project 第5回 GCP 企画 いのちの食べ方を問う</p> <p>ワークシート① お肉はどこからやってくる?</p> <p>1. あなたの好きな牛肉の料理は何ですか?</p> <p>2. お肉ができるまでを、準備に並べ替えましょう。</p> <p>○ → ○ → ○ → ○ → ○ → ○</p> <p>ア イ ウ エ オ カ</p>  <p>3. 体重 650kg の牛が解体され、皮と骨を取り除いてお肉屋さんの店先に並ぶ時は、何 kg の精肉になっているでしょう?</p> <p>① 約 370kg ② 約 270kg ③ 約 200kg ④ 約 100kg</p>  <p>4. 全員でお肉のそれぞれの部分のジグソーパズルをしましょう</p>  <p>5. 下は焼き肉店のメニューです。それぞれ、牛のどこを表しているのでしょうか?</p>  <p>SGI 年 組 番 名前</p>	<p>Global Citizenship Project 第5回 GCP 企画 いのちの食べ方を問う</p> <p>ワークシート② ここにも牛がいる?</p> <p>1. 下のものに共通することは、どんなことですか?</p> <p>写真のフィルム 葉 <input type="text"/></p> <p>くちべに カレールー <input type="text"/></p> <p>2. 絵の中から、牛のどの部分がどのように利用されているかを書きましょう。</p>  <p>3. あなたの身の回りにも、牛からできているものにどんなものがありますか?</p> <p>4. 食肉や皮肉に関わる人たちは、昔から仕事をするとき、「() 以外はむだにしない」と言ってきました。() に入る言葉を考えましょう。</p> <p>SGI 年 組 番 名前</p>
--	--

F) 模擬教育援助会議(1年生)

■ 日時 2/18(土)

■ 参加者 高校1年生

■ 目的

①現代の国際社会における教育機会の格差、理想的な教育援助のあり方について学ぶ

②援助国と被援助国感で話し合われる援助内容と、援助される側のニーズとの違いやギャップに気づく

③来年度以降実施する「模擬国連」にむけた練習の機会とする

■ 事前準備

当日の教育援助会議に出席する役の生徒は、事前に配られた役割カードをもとに、担当国の教育現状を把握しておく。C国市民役の生徒は、事前に配布されたC国市民全員の意見が書かれたプリントを参考に、C国市民としてのニーズはどこにあるのかを考えて役の練習をしてくる。

■ 概要

今回行った模擬教育援助会議は、①導入②会議③質疑応答④被援助国の主張⑤班での振り返り⑥全体のまとめ、以上の6段階で構成されています。最初の導入部分では、世界を取り巻く教育の現状について簡単なクイズ形式で学習をし、先進国と発展途上国には圧倒的な教育各差があることを生徒全員で確認しました。

会議開始前に進行役のGCPリーダーズの指示のもと、事前に指定された、会議参加者の役(6名)、被援助国の市民役(8名)、オブザーバー(そのほかの会議を見守る生徒)にそれぞれ分かれて着席しました。会議は教育援助をするA国・B国の政府役と市民役、援助される側のC国政府役とその小学校長役、NGO職員役の計6名で行われます。事前に用意された台本に沿ってロールプレイ形式で会議を行い、質疑応答を行った後、援助をするA国・B国側の「したい援助」と援助をされる側C国の「してほしい援助」は必ずしも一致していないことを全員で学びました。

次に、被援助国であるC国市民役の8名の生徒が、役割カードに沿ってそれぞれの主張を展開し、教育各差に悩む声を発信しました。生徒は、C国の現地のニーズが援助会議に直接反映されることは難しいことを学びました。

続いて各班に分かれ、ワークシートに沿って振り返りをおこないました。なお、各班にC国市民役の生徒が一人ずつ入るように班を設定することで、援助を必要としている当事者の声と客観的に会議を見ていたオブザーバーの間での幅広い意見交換が可能になりました。この後、各班の振り返りをクラス全体で共有しました。最後にパワーポイントを使用して、まとめを行いました。



◆ 生徒感想

「少しの援助で世界中の子どもたちが教育を受けられる機会は整うことを知りました。ただ、寄付

したお金全てが援助に使用されるかが心配です。人間が引き起こした課題は他にも多くあります。課題に対して嘆いているだけではなにもかわらないと思います。まずは自分から少しずつ変わっていき、その波動を周囲に伝えていきたいと思いました。」

「こんなにも支援する側と支援を受ける側のニーズがあっていないということに驚きました。また、世界の軍事費の3日分で、世界中の子どもが1年間学校に通えることを知り、とても悲しくなりました。もっと必要なことにお金を使ってほしいです。」

「私は歩くのが生まれつき苦手な8歳の男子の役で会議に参加しました。その中の台詞で『僕は頭がいいからクラスで1番になれる。でも、僕は学校に行くことができないんだ』というのがありました。学校に行けていない子どもたちの中にもノーベル賞を取る人や宇宙飛行士になれる子などがたくさんいるのだと気づきました。」

「『問題はなぜ起こるのか』『その問題に対してどうしていけばいいか』という深い話し合いもできたので良かったです。私たちは日本という国にいて、教育を受けることが当たり前になっているところがあると思います。しかし、世界の教育の現状を学び、学校生活を楽しく送れているということは、本当に幸せなことなのだと実感しました。」



● パワーポイント(例)

Q2: 小学校に通えない理由には
どんなことがあるでしょう?

- A. 学校や先生の数が足りないから
- B. 家にお金がないので働かなくてはいけないから
- C. 親や地域の人々から学校に行かなくても良いと言われたから
- D. 戦争や紛争で学校が壊されたり、軍に利用されたりするから

答: **全部正解!**

- ・小学校に通っていない世界の子どもの半数は、紛争地域に住んでいて、その割合は2008年から上昇しています
- ・過去10年間で少なくとも25カ国で、学校が軍事拠点・射撃拠点・武器庫・拘置所として利用されてきました
- ・過去5年間で少なくとも70カ国で、政治・軍事・イデオロギー・宗教・民族などの理由により学校は攻撃の対象となっています

振り返り

● A国政府・市民… 日本の教育援助を反映

特徴①

低所得国(サハラ以南アフリカ)よりも、
中所得国(アジアなど)へ援助が多いです。

地域	割合
サハラ以南アフリカ	52%
南・西アジア	22%
東アジア太平洋地域	10%
中東	5%
北米	2%
ヨーロッパ	11%

地域	割合
サハラ以南アフリカ	20%
南・西アジア	18%
東アジア太平洋地域	39%
中東	2%
北米	21%

振り返り

● C国政府… 世界の低所得国の特徴を反映

特徴②

- ・2000年以降、入学率は改善した。教育の質は向上していません。

例) 訓練を受けた教員の不足、教室が狭い、教材不足

むしろ、低学年や貧困地域で学級規模が大きくなり教育の質が悪化している場所もあります。

● ワークシート(例)

役割カード① 援助する側・A国の政府の担当者

【自己紹介】
 ●あなたが最初に発言してください。
 ●文中の指示にしたがって、**援助カード①**を提示してください。
 ●**大字の部分**はあなたの主張したい部分なので、強く発言してください。

ごほん。みなさん、はじめまして。
 A国の政府を代表して来ました○○(あなたの名前)です。
 我が国は、戦後の工業発展を遂げて急成長し、先進国の仲間入りを果たした国です。発展した私たちA国はODAというお金を使って開発途上国に多大な支援をしてきました。今年からはC国へも教育分野の援助を行うことになりました。内容としては、**高等教育***を特に重視した援助をいたいと計画しておりまして、そのための予算を用意しているのです。(→ **援助カード①**「高等教育」を机の上に提示してください)
 具体的な援助内容に関しては、後で質問があればお答えします。私たちの援助でより多くの若者が我が国の大学で学べるようになるでしょう！

●後に関わる時間があるので、以下の質問例を参考に質問してください。

【質問例】ほかの質問をしてもかまいません
 例 B国政府へ：これまでC国へは、どのような教育援助をしてきたのですか？

【A国の情報】
 質問に回答する時に参考にしてください。答えられない時は「調べておきます」と回答してください。
 文中の指示にしたがって、**援助カード①**を提示してください。
 ✓ A国の市民のODAに対する意識や関心は低い。
 ✓ これまで、仏語圏国ではなく、主に中国語圏に高等教育分野で援助をしてきた。
 ✓ 昨年はアフリカの基礎教育に25億円、東アジア・太平洋の高等教育に400億円の教育援助を行った。
 ✓ C国への具体的な援助内容：C国から留学生を毎年100人大学に受け入れる。奨学金と旅費、生活費などの学生が留学に必要な費用を扱う。
 (→ **援助カード①**「留学生100人受け入れ」を机の上に提示してください)
 *高等教育とは、大学・大学院、海外からの留学生への奨学金などのことをいいます。

【援助カード(したい援助)】

援助カード① 高等教育	援助カード② 留学生100人受け入れ
----------------	-----------------------

【C国の市民の主張】

役割カード② C国の市民 父親 子どもには教育を受けさせる必要はないと思っていますよ。だって女の子2人だしね。どうせ何年かしたら嫁に出すので。男子が生まれたら学校に通わせるつもりなんですけどね。	役割カード③ C国の市民 母親 私自身は学校に行っています。3人の子供もたちは、読み書きができるように学校に通わせたいと思っていますが、家畜の世話や家事、きょうだいの手回りを手回してもらわなくては行けないので、子どもたち全員を学校に通わせる余裕はありません。
役割カード④ C国の市民 教師 私は○○校長先生(前出)の学校で働いています。実は、私は、教員訓練を受けたことはありません。それどころか高校卒業資格もありません。いつも、どうやって生徒に教えるのかわからず悩んでいます。C国の政府にはもっと教育分野へ予算を割いてもらいたい。教員養成や給料に定めてもらいたいです。(→援助カード④を机の上に提示してください)	役割カード⑤ C国の市民 15歳男子 僕がもっと小さかった頃、村に小学校ができました。もちろん毎日通いました。友だちもできたし、何より楽しかった。でも、勉強は得意じゃなくて、さっぱり先生の言っていたことが分からなくて、結局、簡単な文章を覚えることすらできなかった。「先生の教え方がもっとよくなれば…」って外国の人たちが言ってた。もう15歳だけど、中学校へは通ってません。(→援助カード⑤を机の上に提示してください)
役割カード⑥ C国の市民 13歳女子 家は貧乏で、おばあちゃんも病気で私が働いて家計を助けないといけない。通っていた学校を中途退学して、今は工場で毎日洋服をミシンで縫っています。働いているときは私は17歳って嘘をついています。だって、「児童労働」になっちゃうから。私の作った洋服はどこが着るんだろう？(→援助カード⑥を机の上に提示してください)	役割カード⑦ C国の市民 11歳男子 学校は楽しい。下が読めるようになったし、計算だってできる。将来の夢はお医者さんになること。だけど今は、船中で軍が校舎をつかっている。学校へ行けなくなりました。友だちも軍に入らないかって誘われてるんだけど、どうしよう。(→援助カード⑦を机の上に提示してください)
役割カード⑧ C国の市民 9歳女子 私の村は学校から遠くて、毎日歩いて2時間かかるんです。学校には女子用トイレがなく、生徒の数が多くて教室はいつもぎゅうぎゅう。座るところも足りません。机も小さくて、よく見えない。せつかく学校に歩いて、先生が来ない日もあるから悲しい。先生が増えたらもっと質問できるし、勉強できるのにな。(→援助カード⑧を机の上に提示してください)	役割カード⑨ C国の市民 8歳男子 僕は多くの生まれつき苦で、椅子に車輪が付いている学校へもいけるのにな。学校には一度も行ったことがないけど、僕は眼が悪いからクラスで一歩にたれるはずだよ！でも、近隣の小学校には入学を断られてしまったんだ。友だちはみんな小学校に行っているのにな。(→援助カード⑨を机の上に提示してください)

G) 環境問題のつながりを知る(1・3年生)

- 実施対象 高校1年(49期) 高校3年(47期全員)
- 実施日 2016年5月7日(100分授業)前半
2016年6月22日(90分授業)後半
- 5月7日 報告

「環境問題」をテーマに設定し、アメリカ、中国、ツバルの三点を、同時に捉えたVTRを視聴。環境問題が複雑に関係し合っていることを学びました。また、環境問題に関する7枚の写真を使い、ジグソー法を用いてエキスパート班でのリサーチを進めました。


◆ 生徒感想

「発展のために環境を顧みない国、深刻化する環境問題をビジネスのチャンスにする国、そして、理由も分からず住む場所を奪われる人々、「地球は一つである」ということを強く実感しました。」

「環境問題についての映像を見て、誰も間違ったことを言っていないし、間違った行動をしていないにも関わらず、そこには明確な不平等があるように感じた。— 今回のGCPでは、世界規模の問題に、自分がどうやって関わっていけるのか考えるきっかけになった。」

GCP2年 個人用

テーマ名 地球温暖化



(例) 南極から溶け出した水により漂流するペンギンの群れ。

内容に関する説明メモ

キーワード

1	2	3	4
5	6	7	8
9	10		

■ 6月22日 報告

引き続き「環境問題」をテーマに、リンクマップの作成に取り組みました。エキスパート班でのリサーチの中から、キーワードを10個ずつ抽出した後、種類の異なる7枚の写真をもつジグソー班に分かれて、リンクマップを作成しました。リンクマップにはグループごとにタイトルを付けました。「産業革命がもたらしたもの」や「Cancer of the earth(地球の癌)」など様々なタイトルでその本質に迫ることができました。

◆ 生徒感想

「関係が無いと思っていた様々な環境問題が、思っていたよりも密接に繋がりに合っていることに驚きました。また、人類の経済発展が原因となり、多様な環境問題になっていることを実感しました。」

「環境問題を考える中で、全てが繋がっていることに気がつきました。1つ1つが微妙に絡み合っていて、私たちも一人一人から行動をしていくことが大事だと思いました。」



● 教員用指導案

GCP企画(1, 3年)

教科	GCP		担当教員	各担任	
実施年月日	2016年5月7日	(100分授業)		生徒在籍数	各クラス在籍数
	2016年6月22日	(90分授業)			
単元名	環境		本時(5月7日)の目標	次時(6月22日)の目標	
本時の題目	環境問題の問題間のつながりについて		NHK Special 同時三点ドキュメント「煙と金と沈む島を見て、「世界は連鎖している」を実感する。	KJ法を利用して、環境問題に関するリンクマップを作成し、いかに繋がっているかを実感する	
項目	項目	授業の進行内容(発問も)		時間(分)	留意点・準備・その他
導入	視聴する「煙と金と沈む島」の紹介 各クラスのGCPリーダーが運営する	GCPの一年間の流れ・取り組みについて(放送) 見るDVDの簡単な内容を把握する (事前に渡してある簡単な要約を読む) 内容を確認するための班を形成する DVDがよく見られるように座席を調整する		5	9:00からDVD開始のため、素早く行う。 VTRメモを各個人に配布 (GCPリーダーズ)
	話し合うグループ(3~4人 男女混合)を作る				
展開 (1限目)	VTR「第一部」 約14分を視聴させる (VTRは、職員室から1・3学年に同時配信) 9:00~9:14	「世界は連鎖している」を実感する 舞台 ツバル・重慶(中国)・ニューヨーク 人物 シンガノさん 周羅進さん ジャック・コーゲン社長 原因・話題 ツバル 日々の生活 重慶 石炭利用の現状 ニューヨーク 排出権取引について		14	VTRの第一部を見る
	9:14~9:20 (GCPリーダーズが、どのように内容把握すれば良いか解説する)	DVD内容の確認 ラインマーカー等を用いて、特に印象深かった発言等に線を引く		6	班の中で記入された内容を確認し、内容を理解する 班の中で、ラインを引いた箇所を比較させる。
	VTR「第二部」 約20分を視聴させる (VTRは、職員室から1・3学年に同時配信) 9:20~9:40	「世界は連鎖している」を実感する ICPPの報告 2005年 地球温暖化防止国際会議 ツバル 外相の発言 アメリカ 担当官の発言 2月23日の各地域の状況 2月24日の各地域の状況		20	VTRの第二部を見る
	9:40~9:45 (GCPリーダーズが、どのように内容把握すれば良いか解説する)	DVD内容の確認 ラインマーカー等を用いて、特に印象深かった発言等に線を引く		5	班の中で記入された内容を確認し、内容を理解する 班の中で、ラインを引いた箇所を比較させる。
	9:45~9:55	トイレ休憩			
(2限目)	VTR「第三部」 約15分を視聴させる (VTRは、職員室から1・3学年に同時配信) 9:55~10:10	2月26日の各地域の状況 2月27日の各地域の状況 2月28日の各地域の状況 排出権で得た利益の使い道について 地球を包む大気 その大気を巡って 見えない利害が渦巻いている		15	VTRの第三部を見る
	10:10~10:25 (GCPリーダーズが、どのように内容把握すれば良いか解説する)	DVD内容の確認 ラインマーカー等を用いて、特に印象深かった発言等に線を引く		5	班の中で記入された内容を確認し、内容を理解する 班の中で、ラインを引いた箇所を比較させる。
	10:25~10:30(3分程度) 担任の意見発表	「10年前の映像なのでそれぞれの場所が現在どのような状態になっているのか。」「SGI提言等で、創立者はどのように環境問題に関して言及しているか」等の内容を、先生方が独自に映像を見ての感想を生徒に提供する。			
	10:30~ (GCPリーダーが班分けを指揮する) 10:35~ (GCPリーダーが班分けを指揮する)	7枚のキーワードとなる写真を提示する 7枚の写真に、6名または7名の担当者を決める 選んだ写真ごとに場所を決め、(7グループ) 写真毎に集まる		10	
まとめ	まとめ・総括 (GCPリーダーが用紙の使い方を指揮する)	次回までに、調べてくる用紙を配布する (写真とタイトルが入られたA4版の用紙) 用紙の書き方について解説する		5	環境問題の写真を中心としたキーワード探求用紙を配布
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・GCPリーダーは説明会の時に先に第一回の内容を担当と共に事前に理解しておく。 ・グループ分けは前日までに決めておけばベストであるが、写真を見てから分かれても良い。 ・運営は、GCPリーダーにまかせ、担任はGCPリーダーのサポートとDVDを見た後の感想を担当する。 ・時間をしっかりと守る。DVDは、1年の教室と3年の教室に中央制御で配信する。 ・実際の作業を伴ったメインは、6月22日のLHR~4:00に行うリンクマップ作成である。 				
講評					

GCP企画（1，3年）

教科	GCP		担当教員		各担任	
実施年月日	2016年6月22日		(80分授業)		徒在籍	各クラス在籍数
単元名	環 境		本時（6月22日）の目標		苑時（5月7日）の目標	
本時の題目	環境問題の問題間のつながりについて		KJ法を利用して、環境問題に関するリンクマップを作成し、いかに繋がっているかを実感する		NHKSpecial 同時三点ドキュメント「煙と金と沈む島を見て、「世界は連鎖している」を実感する。	
項目	項目	授業の進行内容（発問も）		時間	留意点・準備・その他	
導 入	移動・準備（14:45～14:50） 班分けについて	席をくっつけたり、道具の準備をしっかりとさせる。 調べた内容毎に7グループにする		5		
展 開	事前学習内容の共有 （14:50～15:05）	グループ内で、与えられた写真を説明する際に 使用するキーワードを10～12相談の上選ぶ 話し合いの上、決定したキーワードを付箋に各自が記入する。		15	グループで集まった各自が、それぞれ同じ10～12枚のキーワードを記入した付箋を持つことになる	
	机を移動して7グループ作る （15:05～15:10）	7つのグループにそれぞれ別々の写真担当が入るようにする。		5	各班に、切り分けた7枚の写真・のり・A2程度の用紙（台紙）・感想用の少し大きめの付箋を配布	
	物品の配布はGCPリーダーが行う グループ内で、担当した写真のプレゼン （15:10～15:30）	各自10～12枚の付箋を持っているので 合計、100枚前後キーワードを持つことになる グループ内で担当した写真の解説を2分以内で行い、7枚（6枚）の写真に関して内容を共有する。 （20分以内）		20	2分ごとに「始めて下さい」と「時間です」を担当がコールする。	
	リンクマップ作成 （15:30～15:55）	7枚（6枚）の写真の位置を大まかにA2用紙上に置く。 写真の周りに、記入したキーワードの付箋を貼る。 同じ言葉が出てきたら、重ねて一枚にする。 全体を見回してみて、繋がりが見えるように配置を修正する。 各用語・写真間の関係を様々な矢印や囲い込みする。 囲い込んだ理由を、見出しとして用紙内に記入する。		10	担任は、リンクマップの作成状況を、ipad等で撮影しながら、出来具合を映しだし意識を高めさせる。	
ま と め	まとめ・総括 （15:55～16:00） 付箋へ感想記入	リンクマップを見ての感想を少し大きめの付箋に記入し、リンクマップの周囲に貼る 作成したマップを、ipadのカメラで撮影する。		5	付箋に書かれた感想をいくつか、書いた本人に読み上げさせる。	
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・GCPリーダーは説明会の時に事前にリンクマップを作成を経験し、担任と共に理解しておく。 ・机の配置等は、GCPリーダーを中心に前日までに決めておく。 ・GCPリーダーは配布する写真・付箋・のり・A2用紙を前日までには確認し、当日は配布担当となる。 ・担任は当日、ipadを持参し、カメラ機能を使って作成状況を進度をある程度統一するために、映し出す。 ・各班の作品は、ipadで撮影し、良く出来た者は、掲示する。 					
講 評						

H) レイテ島決戦から戦争とは何かを知る(2年生)

■ 概要

高校 2 年生の 1 学期は、「戦争」をテーマとし、特に第二次世界大戦を中心にその実像を見つめていきました。5 月 7 日に行われた第 1 回目は、フィリピン・レイテ島の決戦の戦争証言の映像を通して、戦争とは何かについて学び合いました。映像では、レイテ島決戦を戦った兵士のたちの証言映像を特別に編集し、その際に、日本兵、アメリカ兵、そして、現地のフィリピン人など、戦争に関与した全ての当事者の証言を順番に視聴することで、偏った見方をせず、戦争について客観的に考えることを目的としました。

レイテ島は第二次世界大戦中、日本軍とアメリカ軍が最も激しい地上戦を繰り広げた舞台の一つです。その地上戦の経験者の証言は、授業で学んだ机上のものとは異なり、生々しいものでした。そして、戦争の勝敗に関係なく、戦争に関わった全ての人が悲惨な思いをし、深く傷ついていることを知ることができました。

最後に、映像を通して学び合ったことを、「戦争とは」とのテーマでマインドマップを作成しました。「あなたが一番『かわいそうだ』『ひどい』と感じたのはどの国の人か」との質問を投げかけることで、より深く考えることができたのではないかと思います。

◆ 生徒感想

「レイテ島のことも知らなかったし、戦争というものに漠然としたイメージしかなかったけど、VTRで実際に体験した人の話を聞くと改めて残酷なものだったんだと思いました。今まで私は、日本は負けたからアメリカの方がひどいと思っていました。しかし、どの国の人でも一人ひとり辛い思いがあって、同じような苦しみを味わい、沢山の人が亡くなったんだと知りました。」

「今まで自分が感じたことのないものを感じた。表面では見えないものが見えた。班の中で『なぜ人を殺してはいけないのか』との問いが出たときに『人間の心を失ってしまうから』との回答も出たが、うまく答えられなかった。」

「優勢であった国の人でさえも『良い思い出はない』と言っていたことに驚きました。本当に誰も幸せにならないのにどうしてまだ紛争や内戦がなくなるのか、どうすれば平和はつくれるのかを考えていきたいと思いました。」

「戦争の経緯を歴史で学んで説明することができても実際の痛みを知らなかったら何も知らないのと同じだと痛感しました。今まで概念として捉えていた『戦争』を他の国の視点で見られたことで、自分の考えが深められたと思います。」



GCP 企画(2年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2016年5月7日(土) ①8:55~9:45 ②9:55~10:45		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	戦 争	本時の題目	戦争証言を通して「戦争」とは何かを知る	
本時の目標	戦争証言を通して、「戦争とは人の命を奪うことである」、「戦争には加害者も被害者もない」ということを一人一人が理解し、二度と戦争を起こさない・起こさせないという不戦の誓いを新たにする			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
導 入	①GCP 企画についての説明	48期生の一年間の企画について簡単に説明をする	2	
	※配布物あり	GCP ファイル・「個人 WS①」	4	
展 開	②個人作業	「個人 WS①」 ①②③に取り組む。	3	
	③グループディスカッション A	グループで机を合わせ、「個人 WS①」 ①②③に記入したことを共有し、「グループ WS①」に書記が記入する	10~12	グループ活動を始める前に進行と書記を必ず決めさせる
	※配布物あり	「個人 WS②」「レイテ島決戦解説プリント」		
	④VTR の説明	これから上映する映像について説明する。	3	VTR 鑑賞後にどのようなディスカッションをするのかを確認する
	⑤VTR 上映 A (1.銃撃戦と消耗戦)	NHK 戦争証言アーカイブよりフィリピン・レイテ島での決戦を語った戦争証言をまとめた VTR を鑑賞する。	10	「個人 WS②」に適宜メモをとるように指示する
	→グループディスカッション B	印象に残った人をグループで共有する	3~4	
	⑥VTR 上映 B (2.斬り込み隊)	映像の続きを鑑賞する	10	
→グループディスカッション C	印象に残った人をグループで共有する	3~4		
10分休憩				
	⑦VTR 上映 C (3.フィリピン現地民との戦い 4.戦争とは?)	映像の続きを鑑賞する	10	
		VTR 終了後、メモをまとめる時間をとる	3	
	⑧グループディスカッション D	感想をグループで共有し、「個人 WS①」 ④⑤⑥の内容をディスカッション。「戦争」とは何かを「グループ WS②」にまとめる	15~20	グループの様子をみながら弾力的に時間配分する
ま と め	⑨クラス発表 →担任講評	各グループでまとめたものをクラスに発表 担任の先生に各グループの内容を踏まえて講評をいただきます(10:40を過ぎない)	15	10:30 までには必ずスタートする
	⑩個人作業	今回の GCP 企画を通して感じたことや学んだことを「個人 WS①」 ⑦に記入する	3	※時間が足りなくなった場合は担任と相談して帰りの SHR 等を活用してください
	⑪ワークシートの回収と次回予告	GCP リーダーズがワークシートを回収し、次回(6月22日)の GCP 企画の予告を行なう	3	
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・ GCP リーダーは説明会の時に先に VTR を鑑賞し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。 ・ グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・ 担任は初めての GCP 企画のため GCP リーダーズの進行のサポートをしていただく。 			
講 評				

● ワークシート(例)

レイテ島の戦い とは…

- ・フィリピンのレイテ島とは、日本軍が「太平洋の天王山」と呼び、米軍のマッカーサー元帥が「アイ・シャル・リターン（私は戻ってくる）」の約束を果たす地と決めた太平洋戦争の決戦場。
- ・太平洋戦争中の1942年、日本軍はフィリピンを占領。当時、米軍大將だったマッカーサーは「戻ってくる」と言い残してフィリピンを脱出。1944年10月20日、マッカーサー率いる米軍約20万人がフィリピン奪還のためにレイテ島に上陸。
- ・約2カ月に渡る日本軍とアメリカ軍の地上戦で、日本側はほぼ全滅した。
- ・同島の太平洋戦争中の死者（推計）は日本軍約8万人、米軍約3500人。
- ・日米両軍の間で翻弄され、レイテ島の島民約5万4千人も犠牲になった。
- ・また、米軍に協力したフィリピン人のゲリラ部隊と日本軍との戦闘も激化した。



〈レイテ島に上陸するアメリカ軍〉



〈米軍の猛烈な艦砲射撃で炎上する日本軍陣地〉



〈フィリピンと日本の戦後〉

太平洋戦争末期、日本軍が抗日ゲリラとの関係を疑って無実の人を虐殺する事件が相次ぎ、遺族らの反日感情はいまも強い。元従軍慰安婦が日本政府に補償を求めている問題や、米軍や住民の追及を恐れて日本人であることを証明する書類を捨てたために日本国籍が認められない残留日本人の問題も残る。

〈日米両軍による激しい戦闘で壁に無数の砲弾の穴が今も残る建物〉 →



(出展：朝日新聞 2010年9月18日朝刊)

GCP 企画【グループワークシート②】

「戦争」とは

である

～なぜなら～

班	メンバー：	進行	書記				
---	-------	----	----	--	--	--	--

1) 核兵器廃絶に向けて(2年生)

■ 概要

6月22日に行われた第2回目は、「核兵器」をテーマに行いました。折しも、前月の5月27日には、オバマ大統領が広島を訪問し、日本にとっても世界にとっても歴史的な日となりました。広島訪問が新聞やテレビでも大きく報道され、生徒にとっても核兵器への関心が高まっており、この話題を軸に、ジグソー法を用い、日本とアメリカそれぞれの視点を示すA～Dのカードを分析しながら、核兵器に対する両国の意見や立場を、総合的に整理しました。

カードは、日本とアメリカの両者の立場が対比できるように構成し、例えば、オバマ大統領の広島演説に対して安倍総理の演説や、原爆投下を指示したトルーマン大統領の孫のインタビューに対して、広島で長らくボランティアガイドをしている人のインタビュー、あるいは、日米それぞれの核兵器に対するアンケート結果などを用意し、今までは日本人からの視点で捉えてきた核兵器に対して、敢えて両国の立場に分かれて考えることで、偏ることなく客観的に考えられるようにしました。日本とアメリカの核兵器へのスタンスを、付箋を使って整理しながら、共通点と相違点を導き出し、核兵器廃絶への可能性を探りました。

◆ 生徒感想

「核兵器をなくすのは難しいが、それをなくす努力を全人類がしなければならないと改めて感じた。日本の若者が核兵器の存在を認めている人が多いのに対して、アメリカの若者は存在を悪いと感じている人が多くなってきているという事実があることにはすごく驚いた。」

「アメリカ側の主張は、核の保有は仕方がないというものだと思っていたので、各想像と少し違って勉強になった。日本は被爆国であるが、日本が他国に対して行った悲惨なこともあり、日本のしたことや日本についてもっと知ること、学ぶことが必要だと感じた。」

「戦争が残した爪痕は決して消すことができない。でも戦後71年が経過した今、両国の距離は縮まってきているのかなと思います。今回皆で核兵器について考えられたことはすごく良い時間になりました。オバマ大統領が広島を訪問してくれたことは自分としてとても嬉しかったし、少しずつでも進歩しているんだなと思いました。本当にこれからは、アメリカと日本という、核を落とした国・落とされた国が力を合わせていかなければならないと思います。」



GCP 企画(2年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2016年6月22日(水) 14:45~16:15 (90分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	核 兵 器	本時の題目	核兵器廃絶への可能性を探る	
本時の目標	原爆投下(広島)による被害の事実を知り、アメリカと日本の核兵器へのスタンスを整理しながら、核兵器廃絶への可能性を探る			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
導 入	①GCP 企画の説明	本時の内容について説明する ※5月27日のオバマ大統領広島訪問について触れながら今、原爆(核兵器)について考えることの意義に触れる	3	原爆投下についてアメリカを非難するための企画ではないことを理解させる
	②個人作業 ③VTR 視聴 ④グループ作業A ⑤グループ作業B ⑥グループ作業C ⑦グループ作業D	【個人WS】に取り組む ※広島原爆投下の簡単なクイズを通して事実を確認する 「学ぼう広島DVD」ダイジェスト映像を視聴する 4人1組のグループを作り、アメリカG、日本Gにわかれ、日米のそれぞれ視点で書かれたA~Dの4枚のカード配布し、G内で担当を決め、分析する。 A~Dで同じカードをもつ人が集まり、より深い分析を行なう。その際、大きな付箋にカードの要約を記入する(自分のG用と2枚) 日米の同じアルファベットのカードをもつ人が集まり、作業Bで記入した付箋を交換し、両者の相違点と共通点を整理する もとのグループに戻り日米8枚の付箋とカードを【グループWS】に整理しながら、日米のそれぞれの立場を整理する	3 10 5 10 10 20	あらかじめ日本をまとめるグループとアメリカをまとめるグループにわけ
ま と め	⑧クラス発表	各グループでまとめたものをクラスに発表 発表内容は【個人WS】に各自でまとめる	13	※時間が足りなくなった場合は担任と相談して帰りのSHR等を活用してください
	⑨担任講評	担任の先生に各グループの内容を踏まえて講評をいただきます その際、創立者の「SGI提言(抜粋)」を配布し、創立者の核廃絶への思いを確認する	5	
	⑩個人作業	今回のGCP企画を通して感じたことや学んだことを【個人WS】に記入する	5	
	⑪ワークシートの回収と次回予告	GCPリーダーズがワークシートを回収し、2学期のGCP企画の予告を行なう	3	
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・GCPリーダーは説明会の時に先にVTRを鑑賞し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。 ・グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・担任はGCPリーダーズの進行のサポートをしていただく。 			
講 評				

● ワークシート(例)

アメリカ人意識調査 (2015年 1000人実施)



Hiroshima & Nagasaki
Do you think the United States made the right decision or the wrong decision to drop two nuclear weapons on Japan? %



年齢層	Right (%)	Wrong (%)
Total	46	29
18-29	34	45
30-44	33	36
45-64	55	21
65+	65	15

AGE

July 18-20, 2015

これまでアメリカでは、原爆投下は戦争を早く終わらせるために必要な「正しい」判断だったという見方が世論の大勢を占めていた。しかし70年の時を経て、その意識に変化が起り始めている。

インターネットマーケティングリサーチ会社の「YouGov (ユーゴブ)」が先月発表したアメリカ人の意識調査によると、広島と長崎に原爆を投下した判断を「正しかった」と回答した人は全体の45%で、「間違っていた」と回答した人の29%を依然として上回っていた。

しかし調査結果を年齢別に見ると、18~29歳の若年層では、45%が「間違っていた」と回答し、「正しかった」と回答した41%を上回った。また30~44歳の中年層でも、36%が「間違っていた」と回答し、「正しかった」と回答した33%をわずかに上回った。

それよりも上の年齢層では、やはり原爆投下を「正しかった」と考える人が多数を占め、45~65歳では約55%、65歳以上では65%が「正しかった」と回答した。

今回の調査では、特に29歳以下の若年層で原爆投下に関する意識が大きく変化していることがわかった。これまでアメリカでは、原爆投下を肯定する意見が世論の大半を占め、世論調査機関ギャラップが戦後50年に実施した調査では89%が、戦後60年の調査では57%が原爆投下を支持していた。

一方同じ調査で、アメリカ人全体の62%が「核兵器の発明」そのものを「悪い事」だった、と回答している。日本の戦争の記憶が薄れる中、アメリカの若い世代では、核兵器が絶対悪だという忌避感が強まり、さらに原爆投下を「間違っていた」と考える方向へ徐々に変化していることがうかがえる。

日本人意識調査



学生平和委員会は23日、中国地方5県の大学生や専門学校生を対象にしたことしの平和意識調査の結果を発表した。核兵器の存在を「いかなる場合も認めない」と答えたのは63%で、3年連続で低下した。

ことし調査は18回目。4~5月に対面方式で計13項目を尋ね、1035人から回答を得た。核兵器の存在について、いかなる場合も認めないは63%で前年に比べて1ポイント減った。初めて調査項目に設定した2010年は72%。その後の3年間で9ポイント下がった。

一方で、「自衛のための最終手段として認める」とする割合は29%に上り、10年比で8ポイント上昇した。米国による広島、長崎への原爆投下を「許せない」としたのは48%。3年連続で半数を割った。

調査では、平和貢献活動をしているかどうかや、原爆に対する意識なども尋ねた。同委員会の広島国際大4年西川広伸さん(22)は「若者が戦争の悲惨さを学び、核兵器廃絶へ行動を起こすよう訴えたい」と話した。

(中国新聞 2013/8/24 朝刊)



判断	割合 (%)
求めない	78%
求める	16%
その他	6%

オバマ米大統領が現職として初めて被爆地の広島を27日に訪問するのを前に、共同通信が広島、長崎で被爆した115人に実施した面接方式のアンケートで、原爆投下は是非に踏み込み謝罪することを78・8%が「求めない」と回答した。「求める」とした人は15・7%にとどまった。

謝罪を求めない理由としては「日本が始めた戦争だから」(70歳男性)、「謝罪してほしいが、求めたら来られない」(73歳男性)などが多かった。一方、謝罪を求めるとした人では「無差別に殺したことへの謝罪はあるべきだ」(78歳女性)などの回答があった。

(東京新聞 2016/5/23 朝刊)

GCP 企画【グループワークシート】

班	メンバー	進行	書記		
●日本カード					
A	B	C	D		
●アメリカカード					
A	B	C	D		
相違点			共通点		

J) ルワンダ内戦から現代紛争を考える(2年生)

■ 概要

10月29日に行われた第3回目は「現代の紛争」がテーマでした。

1994年にアフリカのルワンダで起きたジェノサイドー大量虐殺について学びました。

事前学習では、NHK海外ドキュメント『ルワンダ(1)』を視聴しました。さらに、ルワンダ内戦と大量虐殺を深く学ぶために、増田弘著の『なぜ世界で紛争が無くならないのか』、虐殺被害者と加害者の証言を、ジャン・ハッツフェルド著の『隣人が殺人者になる時 ルワンダ・ジェノサイド生存者たちの証言』『隣人が殺人者になる時 加害者編 ルワンダ・ジェノサイド生存者たちの証言』、国際社会の対応では、伊勢崎賢治著の『NHK未来への提言 ロメオ・ダレール 戦禍なき時代を築く』から抜粋したものを学習冊子として用意し事前配布。当日までに読了してくることを課題にしました。

当日は、映像「NHK海外ドキュメント『ルワンダ(2)』」を視聴し、ルワンダ内戦がおきた原因について、学習資料をもとに「フィッシュボーン」と呼ばれるチャートにまとめていきました。そして、原因を整理しながら、「二度とジェノサイドを起こさないために、必要なことは何か」を考えました。

◆ 生徒感想

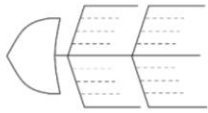
「何十万、何百万人という単位で人が殺されているということを知ると、自分からは遠い世界の話であるように思ってしまうけれど、その背景や理由を学んでみるとそんなことはなくて、いつでもどこでも起こり得ることなのだ、自分にそれがふりかかってきてもおかしくないのだ、と思いました。国際社会に救いを求めている国家や、国際社会の援助が必要な国家は必ずあると思うので、『自分の利益にならないから』などという理由で目をそらすのではいけないなと思いました。」

「おそらくこのような機会がなければルワンダについて何の知識もないまま社会に出ることになっていて、世界平和についても深く考えられない人間になると思う。みんなが学び、どうすれば解決できるのかを自分なりにまとめることで少しずつ平和に近づくのではないかな。僕も僕なりに結論を出した。これを忘れず、平和への歩みを止めないで進んでいきたい。」

「ジェノサイドは本当に恐ろしいことだな、と純粋に思いました。ですが、それ以上に恐ろしいのは、それを引き起こしてしまった人間の心なんだということを知りました。『人間というものは一瞬にして言い尽くせないほど残忍になり得る動物』とはジャネットさん(生存者)の言葉ですが、僕がもしフツ族として生まれて、彼らと同じ立場だったとしたら自分はどうしていただろうか、人を殺していたのだろうか。考えただけでゾッとします。僕のような平和な国に生まれた人間には彼らの気持ちはわかりません。ですが、それを知ろうとすること、また理解しようとするのが大事なのだと思います。」



GCP 企画(2年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2016年10月29日(土) 11:00~12:30 (90分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	現代の紛争	本時の題目	現代紛争の実態と原因を探る	
本時の目標	ルワンダ内戦・大量虐殺(ジェノサイド)について国内政治・植民地支配・民族の違い・マスメディア・人権思想・国際社会等について着目をしながら原因を整理し、二度とジェノサイドを起こさないために必要なことは何かを考える			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
24日(月) S H R	GCP企画の説明	TV放送でGCPリーダーズより企画の概略と当日までの課題(『学習資料の読了』)の説明	3	『学習資料』の配布
26日(水) L H R	事前VTR学習	TV放送でルワンダの大虐殺(ジェノサイド)がおこるまでの過程についてVTR学習	30	『学習資料』持参 映像: NHK 海外ドキュメント「ルワンダ(1)」
導 入	①GCP企画の説明	本時の内容について説明する	3	『学習資料』持参
展 開	②概略の説明 VTR学習	ルワンダ内戦についてリーダーズが概略を説明し、その後、VTRを視聴する	10	映像: NHK 海外ドキュメント「ルワンダ(2)」
	③グループ作業A ※4人1グループ	『学習資料』を読み解きながら、内戦の「原因」を①国内政治②植民地化政策③現地民(ツチ族・フツ族)④国際社会の4つのトピックにグループで整理しながら、グループワークシート(フィッシュボーン)にまとめていく	25	※フィッシュボーン 
	④グループ作業B ※4人1グループ	二度とこのようなジェノサイドをおこさないために必要なことは何か、グループで話し合いグループワークシートにまとめる ※まとめたものは個人ワークシートに転記させる	15	必要であればここで トイレ休憩
ま と め	⑤グループ間セッション	他のグループ員と4人1グループになり、1人2分の発表を4回行い、グループ作業の内容を共有する。適宜、質疑応答をささむ。	15	※保護者にも聴衆として参加して頂く
	⑥グループ作業C (個人作業)	他のグループの発表内容を共有し、個人ワークシートに本時の感想を記入する	10	
	⑦担任講評	担任より本時の活動を通して講評を行う	2	
	⑧ワークシートの回収と次回予告		2	
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・GCPリーダーは説明会の時に先にVTRを鑑賞し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。 ・グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・担任はGCPリーダーズの進行のサポートをする。 			
講 評				

● ワークシート(例)

GCP 企画 グループワークシート

	組	班 ①	②	③	④	⑤
--	---	-----	---	---	---	---

国内政治

植民地政策

ルワンダ内戦・大量虐殺

現地民(フツ族・ツチ族)

国際社会

二度とこのようなジェノサイドを起こさないために必要なこと

GCP 企画 参考資料

ジェノサイド Genocide

集団殺害を意味するが、語源がギリシア語の *genos*(種族)とラテン語 *caedes*(殺戮)の合成語であることから、ある国家あるいは民族(人種)集団を計画的に破壊するという意味で用いられる。ジェノサイドという語は、ポーランド人法学者レムキン(R.Lemkin)により『被占領ヨーロッパにおける軸枢国の支配 Axis Rule in Occupied Europe』(1944)の中で、ナチス・ドイツによるユダヤ人やジプシー等の迫害に対する非難を込めた言葉として初めて使われた。

●現代のジェノサイドの歴史(代表例)

1910年代	1930年代	1940年代
アルメニア人虐殺	南京大虐殺	ホロコースト
オスマン帝国	日本・中国	ドイツ
第一次世界大戦中、オスマン帝国の少数民族であったアルメニア人の多くが、シリアに強制移住させられ、虐殺などにより死亡した事件。	日中戦争初期に日本軍が中華民国の少数民族の首都だった南京を制圧し、行なつたといわれる中国兵捕虜ならびに民間人に対する集団殺戮・暴行事件。	ナチス・ドイツのヒトラーが1933年に政権を握り、第二次世界大戦中にユダヤ人などに対して収容所に強制移送し、組織的に行つた大量虐殺。
犠牲者は一般的に 100万 から 150万人 の間であると考えられている。	犠牲者は中国側は 30万人 と主張する一方、日本側は 4万~20万人 とする見方が多い。	犠牲となったユダヤ人は少なくとも 600万人以上 とされている。

1940年代	1970年代	1990年代
ホロドモール	ボル・ボト派による虐殺	スレブレニツァの虐殺
ソ連→ウクライナ	カンボジア	ボスニア・ヘルツェゴビナ
ソ連の最高指導者ヨシフ・スターリンによる、ウクライナ人たちの強制移住により、家畜や農地を奪われたために多数の市民が餓死した事件。	ベトナム戦争の混乱の中誕生したクメール・ルージュ(ボル・ボト)政権が行つた反政府者の虐殺と、極端な共産主義政策により、大量の餓死者を出した事件。	ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争において、セルビア人勢力が行つたスレブレニツァに居住していたボシュニャク人の男性すべてを組織的に殺害した事件。
飢饉の犠牲者数についても学説によって 250万から1,450万人 までの幅がある。	犠牲者 140万人 (アムネスティ・インターナショナルによる) ※諸説あり	犠牲者 8,373人 大半は男性だが、子どもや女性、老人もまた殺害されている。

※当事国が事実を否認している場合や、現在もなお論争が続いている事件もあります。犠牲者の数も関係国によって推測値などに違いがあります。

Global Citizenship Project

事前学習資料

〈テーマ〉
現代の紛争
～ルワンダの大量虐殺(ジェノサイド)から学ぶ～

- ルワンダ内戦・大量虐殺とは? 1

『なぜ世界で紛争が無くならないのか』増田弘 著 2009年(講談社)より
- 虐殺被害者の証言 9

『隣人が殺人者になる時 ルワンダ・ジェノサイド生存者たちの証言』ジャン・ハッツフェルド 著 2013年(かもがわ出版)より
- 虐殺加害者の証言 12

『隣人が殺人者になる時 加害者編 ルワンダ・ジェノサイド生存者たちの証言』ジャン・ハッツフェルド 著 2013年(かもがわ出版)より
- 国際社会の対応 14

『NHK 未来への提言 ロメオ・ダレール 戦禍なき時代を築く』ロメオ・ダレール/伊勢崎賢治 著 2007年(日本放送出版協会)より

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

創価高等学校

K) 異文化理解(2年生)

■ 概要

11月26日に行われた第4回目は、「国際理解～世界の中の自分～」をテーマに、外国の文化や考え方を知り、日本とは違う文化を受け入れ、共生していくための方途を学ぶことを目標に行いました。

1限目は、フランス、ドイツ、韓国、ロシア、マレーシアの5カ国の外国語講師から、(1)出身国の紹介と、日本との「文化」や「考え方」の違いについて、(2)出身国では、どのような「歴史」の授業を受けていたか、(3)出身国では、どのように「隣の国の人」と交流していたの3点を講義していただきました。

2限目は、「ドルジュバードプロジェクト」を行いました。これは、ドルジュバード王国という仮想の国と日本人がテレビ取材のための交渉を行うというロールプレイングゲームです。各グループで日本人2名、ドルジュバード王国住人2名にわかれ、それぞれが自国のルールに従って交渉を行います。例えば、ドルジュバード王国の住人は、「Yes」の意思表示を「大地が笑うでしょう」という言葉で表現します。生徒は、お互いの国のルールを知らない状態で交渉を行うことで、実際に、言葉遣い・宗教・生活文化の全く違う人同士が交渉を進める上で、乗り越えなければいけない異文化の壁を体験することができました。その中で、いかに違う文化を理解して受け入れ、共生していくことが難しいことかを感じることができました。

◆ 生徒感想

「自分たちと違う文化の人たちと理解し合うということはとても難しいことだと改めて感じました。異文化の人たちと理解し合うためには相手の話をしっかり聞くことが大切だと思います。今後、異文化の人たちと出会うことは増えると思うので、日々の生活で相手のことを理解しようとする気持ちを心がけていきたいです。」

「外国語講師の先生の話が新鮮でおもしろかった。日本の文化を知らないと、他国との親睦は深められないと感じた。特に韓国の大学受験に向けた意識が日本と全然違って印象的だった。」

「外国語講師の方々のお話を聞いて、外国のことをたくさん知れたし、色々な国に行ってみたいと思いました。日本と外国では全然文化が違うこともよくわかり、日本では当たり前のも世界では違うことがあるということをしかりと頭に入れ、理解した上で外国の方と接しなければいけないと思いました。また、交渉ゲームをやってみて、“当たり前”の違いや言葉、宗教観、価値観の違いを強く感じ、楽しみながらも異文化の理解の大切さがよくわかりました。様々な設定で交渉を行うのが楽しかったです。またやりたいと思いました。」



GCP 企画(2年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2016年11月26日(土) 8:55~10:45 (100分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	国際理解	本時の題目	世界の中のわたし	
本時の目標	外国の文化や考え方を知り、日本とは違う文化を受け入れ、共生していくための方途を学ぶ			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
25日(金) 放課後	生徒リハーサル	GCPリーダーズより選抜した本会場参加の受講生徒でリハーサルを行う。	60	
導 入	① 企画の説明	本日の内容について説明する。	3	司会生徒あり
展 開 ①	② 講師紹介	【講師】 (1) フランス 岡村能里子先生 (2) ドイツ ダーシャ・寺西先生 (3) 韓国 キム・ウジュン先生 (4) ロシア ユリア・ディチャチェヴァ先生 (5) マレーシア ク・ウェイチェン先生 【講義内容】 (1) 出身国の紹介と、日本との「文化」や「考え方」の違いについて (2) 出身国ではどのような「歴史」の授業を受けてきたか (3) 出身国ではどのように「隣の国の人」と交流してきたか	5	(受講生徒について) GCPリーダーズより選抜した生徒が本会場で受講し、講義後に簡単な質疑応答を行う。 (各クラスとの相互通信について) 各クラスの担任のiPadと放送室PCを「appear.in」で接続し、生徒質問の後に各クラスから質問を募る。
	③ 講義		40	
	④ 質疑応答			
	×5名 (1人6~8分)			
休 憩			10	受講生徒は自教室に戻る
展 開 ②	⑤ ドルジュバードプロジェクトの説明	ドルジュバードプロジェクトについて、ルールと目的を説明する。 教室：「ドルジュバード王国側」 廊下：「SOKA テレビ側」	13	グループになり、それぞれ「ドルジュバード王国側」と「SOKA テレビ側」にわかれる。
	⑥ プロジェクト開始	「SOKA テレビ側」のグループは、ドルジュバード王国の独自文化の制約と限られた予算の中で、撮影交渉をする。	15	各グループ一枚ずつ、制約カードを持つ。
	⑦ プロジェクト終了・種明かし	時間になったら、各クラスのGCPリーダーズの合図で終了する。 交渉を行ったグループ同士で、制約の内容について種明かしをする。	5	
ま と め	(⑧ クラス発表)	どのような契約を結んだか(結べなかったか)、どのような点で苦労したかをグループの代表者がクラスに発表する。	5	2~3グループをGCPリーダーズが指名する。時間が足りない場合は行わない。
	⑨ 担任講評	担任より本時の活動を通して講評を行う	3	
	⑩ 個人作業	個人ワークシートに本時の振り返りと感想を記入する	7	
	⑪ ワークシートの回収と次回予告		2	

● ワークシート(例)

ドルジュバード王国

<基本情報>

- ・アフリカ中部にある歴史の古い王国
- ・「日本語」で会話することができる(特別です!!)
- ・あなたはこの町の観光案内人を勤めている
- ・国民的スポーツは「クリケット」「サッカー」である

<交渉のルール>

- (1)相手の意見を肯定・賛成(YESを意味)する場合は「大地が笑うでしょう」、否定・反対(INOを意味)する場合は「カラスが鳴くでしょう」と必ず答える。うなずいたり首を横に振ったりはしない。
- (2)握手をした後は必ず自分の手を拭く
- (3)いきなり本題に入るのはしない。場が和むまでは別の話をする。相手がいきなり本題に入ってきた場合「あなたと話すことはありません」と軽くあしらう
- (4)識字率が低い国で、あなたは文字を書くことができない

<撮影場所について>

- (1)アフリカの生活について詳しく知ってほしいため、地味ではあるが、B・F・Hの3カ所の取材を希望している
- (2)「ヤギ」は神聖な生き物なのでカメラで撮影することは厳禁とされる

<報酬額について>

- (1)ドルジュバード王国の物価は日本の5分の1程度である。つまり、日本円の1万円はドルジュバードでは5万円の価値がある
- (2)日本人はお金をもっている。富めるものから多く支払わせることは決して悪いことではないと考えている

日本取材クルー

<基本情報>

- ・アフリカ中部にある歴史の古い王国
- ・「日本語」で会話することができる(特別です!!)
- ・相手は訪問する町の観光案内人を勤めている
- ・スポーツが盛んな国である

<交渉のルール>

- (1)今回お互い初めての出会いである。
- (2)交渉のはじめには相手に敬意を払い「握手」を求めよ
- (3)今回の交渉で決めるべきことは「撮影場所」「報酬額」の2つ
- (4)「撮影場所」はスケジュールの都合上3カ所しかまわれない
- (5)相手が要求した条件に対しては柔軟に対応し、相手が納得するまで説得しなければならない
- (6)交渉がまとまったら契約書にサインをもらわなければならない

<撮影場所について>

- (1)視聴率を考えると現地の特別で派手な文化を取材したい。A・E・Gの3カ所の取材を希望している
- (2)日本では認知度の低いドルジュバード王国について知ってほしいという思いをもっている

<報酬額について>

- (1)こうした取材の一般的な報酬額は日本円で50万円だが、ドルジュバード王国の物価は日本の5分の1程度である。つまり、日本円の1万円はドルジュバード王国では5万円の価値がある
- (2)報酬額の予算については50万円を超えてはいけない。低予算で実施できた場合、あなたは昇進する可能性がある

GCP グループワークシート【ドルジュバードプロジェクト】

交渉を通して、取材箇所を3カ所決めよう！

A



小動物の丸焼き

B



学校

C



屋外でピリヤード

D



クリケット

E



豪快な巨大魚釣り

F



家事の様子

G



木登りするヤギ

H



土壁の家

L) 人権すごろく(2年生)

■ 概要

1月21日に行われた第5回目は、「人権」をテーマに、人権というものが、人類の長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきたものであることを理解すると共に、身近な生活の中から人権尊重の必要性、重要性を感じることを目標として行いました。

導入として、オリジナル教材である“人権スゴロク”を使って、楽しみながら身近な自由が、「人権」として保障されているものであることを知りました。最初に、自身の出身国や性別といった人物像が設定され、設定によって異なる結果がでるようにし、理不尽な人権侵害を体感できるようにしました。各マスには、「突然逮捕される。2マス戻る」や「テロ首謀の容疑で拷問を受ける。1回休み」など、人権に関わる内容が書いてあり、それを読み上げながら進めることで、理解を深めていけるようにしました。

続いて、人権団体：ユース・フォー・ヒューマンライツが作成した映像『人権の歴史』を視聴しました。短時間で分かりやすく人権の歴史がまとめてあり、生徒の理解が進みました。次にグループごとに、世界で実際に起きている人権問題に関するニュースを配布し、それが世界人権宣言のどの項目に抵触するかを検討しながら学びを深めました。各グループには全て異なるニュースが配られ、最後に自分たちが担当したニュースの簡単な発表を行い、他グループの学習成果についても共有できるようにしました。

この企画を通して、平和な日常で暮らしていると意識できていなかった「人権」というものを少し身近に感じることができました。

◆ 生徒感想

「様々な企画を通して、世界人権宣言が発表されても未だ拷問や人権侵害などの行為が世界のいたるところに存在し続けているのだと知った。形として声明が出されてはいるが、それを実行できるのは法でも策でもなくて、民衆の行動だと思った。又、長い歴史を経て今の世界人権宣言があることを知った。人類が今まで格闘して出した答えが今の世界を作っているんだと気づいた。」

「今の日本では考えられないことが世界のどこかでは起こっていると考えると、なぜそうなるのか、なぜ人にそんなことができるのか、僕には到底わかりませんでした。でも、全ての人を持つ人権を守っていく義務が、全ての人にあるのだと思います。」

「人権についてボンヤリとしか知らなかったが、文章で設けられていることを知り、読んでみて納得した。中には同じようなことが書かれているものもあったが、人権を守るためには内容が重なってもいいから隙があってはいけないのだと思った。世界中で人権宣言にサインしているにもかかわらず、未だにそれが守られていない地域があることに驚き、残念だった。」



GCP 企画(2年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2017年1月21日(土) 8:55~10:35 (90分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	人権	本時の題目	「世界人権宣言」を学ぶ	
本時の目標	「人権」とは何かを知り、人権が人類の長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきたものであることを理解する。また、『世界人権宣言』を通して、世界の人権問題を考える。			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
導入	①GCP 企画の説明	本時の内容について説明する	3	
展開	②人権すごろくゲーム	ルール説明 4人1組になり、A~Dを割り当てる ルールに従い、すごろくゲームを行う →ゲーム振り返り	5 15 3	時間になった時点で全グループ終了
	③VTR 学習	「人権の歴史(10分)」を視聴する	12	ユース・フォー・ヒューマンライツ作成
	④世界人権宣言を学ぶ	世界人権宣言配布。個人で読み、ゲーム中に自分が制限された人権とは何かを考え、ワークシート④に取り組む。	5	
	⑤世界の人権問題を学ぶ	ワークシート「世界の人権問題を知ろう」配布。グループごとに異なる人権に関するニュースを読み、世界人権宣言に照らしてどの人権が制限されているかを考える	20	ここでグループごとに適宜休憩をはさむ
	まとめ	⑥クラス発表 ⑦担任講評 ⑧振り返り・まとめ ⑨ワークシートの回収と次回予告	「世界の人権問題を知ろう(一覧)」を配布。グループを組み替え、新たな4人1グループで作業の内容を共有する。 担任より本時の活動を通して講評を行う 本時の振り返りとまとめを個人ワークシートに行う	15 3 5 2
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・GCPリーダーは説明会の時に先にVTRを鑑賞し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。 ・グループ分けは前々日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・担任はGCPリーダーズの進行のサポートをする。 			
講評				

● ワークシート(例)

GCP企画【人権すごろくゲーム】

START	紛争が勃発し、住居を失う。以後2回は出た目のマイナス1	右隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	テロ首謀の容疑で拷問を受ける。1回休み	政府を批判したとして逮捕される。2マス戻る	好きな人と結婚する。1マス進む	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	仕事を辞めて大学に入る。1マス進む	
	右隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	紛争が勃発し、難民となる。以後2回は出た目のマイナス1	好きな人と結婚する。1マス進む	Challenge③	脱税の容疑で財産をすべて凍結される。1マス戻る	国教が定められる。以後2回は出た目のマイナス1	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	長期休暇を取得し、リフレッシュする。2マス進む
	長期休暇を取得し、リフレッシュする。2マス進む	好きな人と結婚する。1マス進む	政府を批判したとして逮捕される。2マス戻る	長期休暇を取得し、リフレッシュする。2マス進む	Challenge⑤	労働組合に加入していることを理由に解雇される。2マス戻る	ミュージカルを鑑賞し、リフレッシュする。1マス進む	殺人容疑で裁判を受けずに死刑になる。スタートに戻る。
	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	右隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	Challenge⑥	殺人の容疑で拷問を受ける。1回休み	国教が定められる。以後2回は出た目のマイナス1	公務員に転職し、給料が上がる。2マス進む	子どもを公立小学校に入学させる。1マス進む	Challenge①
	仕事を辞めて大学に入る。1マス進む	開発したシステムで特許を取得する。1マス進む	子どもを公立小学校に入学させる。1マス進む	GOAL	殺人容疑で裁判を受けずに死刑になる。スタートに戻る。	大ケガをしたが、近くに病院がなく治療を受けられなかった。1回休み	大ケガをしたが、近くに病院がなく治療を受けられなかった。1回休み	大ケガをしたが、近くに病院がなく治療を受けられなかった。1回休み
	政府を批判したとして逮捕される。2マス戻る	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	強制的に結婚させられる。1マス戻る	外国に移住する。1マス進む	左隣の人の奴隷となる。左隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	ミュージカルを鑑賞し、リフレッシュする。1マス進む	失業をしたが、失業手当をうける。1マス進む	労働組合に加入していることを理由に解雇される。2マス戻る
	外国に移住する。1マス進む	仕事を辞めて大学に入る。1マス進む	テロ首謀の容疑で拷問を受ける。1回休み	大きな病気になったが保険が適用され安く治療を受ける。1マス進む	Challenge④	公務員に転職し、給料が上がる。2マス進む	左隣の人の奴隷となる。左隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	公務員に転職し、給料が上がる。2マス進む
	学動不審を理由に1ヶ月拘束される。1回休み	Challenge②	殺人の容疑で拷問を受ける。1回休み	強制的に結婚させられる。1マス戻る	子どもを公立小学校に入学させる。1マス進む	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	ミュージカルを鑑賞し、リフレッシュする。1マス進む	左隣の人の奴隷となる。左隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る

(1) エジプト

デモ隊と治安部隊の衝突 撮影しようとして死刑の危機に

2013年夏、エジプト全土でモルシ前大統領の支持者と治安部隊の間で大規模な衝突があり、約1,000人が命を落しました。最多の犠牲者が出たのはカイロ近郊ナセルシティーのラバア広場でした。盛り込みでモルシ復権を訴える親モルシ派を排除しようと治安部隊が実弾や催涙ガスを使用し、数百人が亡くなったのです。

この事件では、デモ参加者が大勢逮捕されました。事件の様子をカメラに収めようとしていたフリーの報道カメラマン、マフムード・アブゼイドさんも、逮捕されてしまいます。現場にいたフランスと米国のカメラマンも同様の目に遭いました。

2人の外国人カメラマンはその日のうちに釈放されました。しかし、マフムードさんは拘束され続け、今に至ります。C型肝炎にかかっているのですが、治療を受けさせてもらえません。

2年半後ようやく始まった裁判

マフムードさんは他のデモ参加者など738人とともに起訴され、2016年3月、逮捕されてから2年半以上経って、ようやく裁判が始まりました。マフムードさんが関わったのは「禁止団体(ムスリム同胞団)に所属」「殺人」「殺人未遂」「武力と暴力で体制転覆」など9つの罪でした。マフムードさんはすべてを否認。彼はただ、写真を撮るためにそこにいただけなのです。しかし、裁判で有罪になれば、死刑を科される恐れがあります。

エジプトでは2011年、30年以上続いた独裁政権が民主化運動によって倒れ、翌年、選挙でモルシ氏が大統領に選ばれました。ところが景気低迷と治安悪化で連陣を求めた声が高まり、1年もたないうちに、軍によって解任されます。治安部隊との衝突事件では、多くのモルシ派が死刑判決を受けています。

(2) イラン

クルド人女性のために活動して終身刑 拷問で失明の危機に

ゼイナブ・ジャラリアンさんは、イランでクルド人の権利、特にクルド人女性の地位向上に取り組んでいました。ゼイナブさん自身もクルド人です。

2008年3月、彼女は誰かによって突然、逮捕されてしまいます。弁護士や家族にも連絡をとらせてもらえず、8カ月も独房に閉じ込められ、その間、壁に頭を何度も打ちつけられるなどの拷問を受けたと言います。そのせいで頭蓋骨にひびが入り、脳内出血を起こしました。拷問の後遺症で今も目に問題を抱え、家族の費用負担で刑務所で手術を受けましたが、失明の危険性は消えていません。しかし治療は拒否されています。

武力闘争に関わったと疑われ

逮捕はクルディスタン自由生活党(PJAK)の武装派メンバーだと疑われたためです。PJAKはイラン政府と戦闘を繰り返しており、イランや米軍などではテロ組織に指定されています。ゼイナブさんはPJAKの政治部門と連携することはありましたが、武装派との関わりは否定し続けています。

わずかに数分で終わった裁判では、神への敬意を持った罪で有罪になり、死刑を言い渡されました。その根拠は拷問で強要された自白で、PJAKの武力行動との関係を証明する証拠は示されませんでした。その後2011年12月に、最高指導者の指示により終身刑に減刑されています。

2016年4月、国連の憲章的拘禁に関する作業部会は、ゼイナブさんがクルド人の権利のために活動し、PJAKの非戦闘部門と関わったために拘束されたとする見解を採択しました。そして彼女を直ちに釈放し賠償を受けられる権利を法的に認めるよう、イラン当局に求めています。

(3) イタリア

ロマの家族が強制立ち退き 危険な場所からまた危険な場所へ

2016年6月21日、75家族・約300人のロマの人たちが、イタリア・ナポリ近郊にある居住キャンプから強制的に立ち退かされた。このキャンプはジュリアーノ・イン・カンパニア市が2013年に設置したもので、それまで何度も強制退去を受けてきたロマの人たちは、このキャンプに移されて3年の間暮らし続けていた。キャンプは有毒廃棄物の堆積場の近くで、閉鎖は健康・安全上の理由による裁判所の命令でした。そもそも居住地にするには、危険な場所だったのです。

建物のない代替地

ジュリアーノ市は新たな居住地を作ることになりましたが、完成まで住む場所として市が急ぎよう意地したのは、ひどいものでした。テニスコート4面ほどの狭さの花火工場跡地で、周りは雑草だらけ。トイレは二つしかなく、一つはぼろぼろ、一つは壊れていました。排泄物を化学処理するトイレと貯水槽が設置される予定ですが、あまりに劣悪な環境です。

家屋もなく、住民たちはトレーラーを持ち込むことを許可されましたが、トレーラーを持っていない家族は外で寝泊まりするしかありません。がれきりやびた釘、「自然発火物」「粉」と書かれた怪しげな容器などが転がったままで、健康面でも安全面でも適切な場所とは言えません。

少数民族ロマの人たちの強制立ち退きは、イタリア各地で行われています。EUが社会統合に向けて資金援助をしているにもかかわらず、ロマに対する差別と偏見がまん延し、へんびな場所に居住区を作るなど、イタリア政府は隔離政策を改める様子はありません。

資料：アムネスティニュースレターより

M) ディベート(2年生)

■ 概要

2月15日・18日に行われた第6回目は、再び「人権」をテーマに行いました。ディベートを通して身近な人権について考えると共に、映像を通して、創立者池田大作先生の人権闘争を学ぶ中で、自身の生活の中で他者の人権を尊重するための方途を探ることを目標としました。

ディベートは4人1グループを作り、肯定と否定側に2人ずつ分かれて全員で行いました。論題は、「メディアは、積極的に少年犯罪の加害者の実名報道をすべきである。是か非か」です。15日には担当教員よりディベートのレクチャーを受け、その後、ブレインストーミングを行い、論題導入によるメリットとデメリットを考え、グループごとに肯定側・否定側に分かれ立論・反駁作成を行いました。生徒にとって、ディベートは難しい手法ではありましたが、丁寧にマニュアルを作成し、抵抗感なく行えるように配慮しました。さらに、今回のGCP企画におけるディベートのルールを決め、判定は出さないものとししました。その結果、生徒は、論題のメリットやデメリットを考えることに集中でき、人権に関わる問題の難しさを感じることができました。

試合後に、創立者の人権闘争をまとめた映像を視聴しました。これは、モンゴメリー・バス・ボイコット事件で有名な、アメリカ合衆国の公民権運動活動家であるローザ・パークスさんが、創価大学の学生の姿を通して創立者を知り、対談を望み、実際に出会いを重ねた歴史が記されたものです。また、2人が同じ人権の闘士として即座に共鳴し合い、ローザ・パークスさんにとって創立者が人生に大きな影響を与えた一人として、『talking picture(邦題:写真は語る)』の中に2人の写真を掲載したことなどが紹介されています。生徒は、この映像を通し、大きな社会変革も「一人」の勇氣ある行動から始まるということを知ることができました。

◆ 生徒感想

「プライバシーや知る権利など、とても難しかった。ディベートは自分の意見と逆の立場のことも考えなければならず、きつかった。被害者は殺され未来を失ったのに、なぜ加害者の未来は保障されるのか。被害者がかわいそうだと思った。」

「質疑応答では、自分の経験や事例などを述べるとさらに面白いなと思いました。こんなに熱く面白くなれるとは思ってもいなかったので驚きです。自分は肯定側でしたが、否定側の意見も本当に納得というか、そうか！と思うところがあり、少年犯罪自体について考えを深められた気がします。」

「ディベートを通して、一つの物事を議論するだけでも様々な視点があるのだということに気づかされました。とてもいい経験をすることができました。機会があったら本物のディベートを観てみたいです。」



GCP 企画(2年)

教 科	GCP		担当教員	各担任	
実施年月日	2017年2月15日(水) 14:45~15:35 (50分) 2017年2月18日(土) 08:55~10:50 (95分)		生徒在籍数	各クラス在籍数	
単 元 名	人 権	本時の題目	身近な人権・創業者の人権闘争を学ぶ		
本時の目標	ディベートを通して身近な人権について考え、創業者の人権闘争を学ぶ中で、生活の中で他の人権を尊重するための方途を探る。				
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他	
15日 (水)	導 入	①TV中継 18日(土)実施の3年生ファイナルプロジェクト見学の説明を行う ・ディベートの方法についてレクチャーする ・今後の流れについて説明する	7 15 3		
	展 開	②グループ作業 論題「メディアは、積極的に少年犯罪の実名報道をすべきである。是か非か」 (1)ブレンストーミングを行い、論題導入によるメリットとデメリットを考える (2)グループごとに肯定側・否定側にわかれ立論・反駁作成を行う	25		
18日 (土)	F P 8:55~	③3年ファイナルプロジェクト見学	アリーナに移動し、3年生のファイナルプロジェクト(ポスターセッション)を見学する	35	詳細は別紙参照
	展 開 9:45~ 10:50	④グループ作業	②の続きを行う。	10	
		④ディベート	グループごとにディベートを行う 肯定側立論(2分) 否定側質疑(2分) 否定側立論(2分) 肯定側質疑(2分) 否定側アタック(2分) 肯定側アタック(2分) 否定側ブロック(2分) 肯定側ブロック(2分)	25	
		⑤振り返り	ディベートの反省・改善点を挙げ、議論を通して感じたこと、学んだことを振り返る	5	
		⑥VTR鑑賞	VOD『人権の夜明けのために〜ローザ・パークスと池田大作〜』を視聴する	17	
		⑦担任講評	担任より本時の活動を通して講評を行う	3	
		⑧振り返り・まとめ	個人ワークシートに本時の感想を記入する	5	
		⑨ワークシート回収			
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・GCPリーダーは説明会の時に先にVTRを鑑賞し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。 ・グループ分けは前々日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・担任はGCPリーダーズの進行のサポートをする。 		
講 評					

● ワークシート(例)

GCP 企画「人権」ディベートワークシート【準備② メリット・デメリットを考える】

●少年犯罪の「実名報道」ってなに？
2015年2月に神奈川県川崎市で少年が殺害され、容疑者として3人の少年が逮捕されました。そんな中、ある週刊誌が、逮捕された少年のうち一人を実名と写真付きで公表したことで、少年法第61条が注目されています。この実名は、犯罪等を犯した少年の氏名・写真など、少年を特定できるような情報の報道（推知報道）を禁止しています。

<少年法—第61条>
家庭裁判所の審判に付された少年又は少年のとき犯した罪により公訴を提起された者については、氏名、年齢、職業、住居、容ぼう等によりその者が当該事件の本人であること推知することができるような記事又は写真を新聞紙その他の出版物に掲載してはならない。

その主な目的は、少年の社会復帰のためと一般に説明されます。犯罪事実が実名・顔写真等とともに公開されると、たとえ少年が少年院等で反省して出所し、新たな人生を歩もうとしている時に、世間の偏見（ラベリング）等により人生をやり直すことが難しくなるため、人格形成過程にある少年の将来を考慮し、実名報道を禁止する必要があるのだといわれます。少年法は、20歳未満の者を「少年」と定義し、その少年の立ち回り（社会復帰・更生）のためのさまざまな措置を定めているわけです。

●メリットとして想定されること

少年犯罪の抑止効果	メディアの「報道の自由」の確保
現状では、罪を犯しても実名が公開されないため、あたかもそれが、社会や世間から“守られている”という意識を生み、犯罪行為へ走りだし、もう危険性があります。実名報道が行われるようになれば、罪を犯した際に、成人と同じ社会的制裁を受けることとなります。このような、犯人として世間に見られてしまうというプレッシャーが、少年犯罪の抑止効果につながる可能性があります。また、社会的制裁を受けたことで、再犯を起させにくくなることも考えられます。	新聞やテレビなどのメディアには、国に左右されず重要と思われることを国民に伝える「報道の自由」があると言われています。しかし、現状の少年法(第61条)では罰則規定はないものの、少年犯罪の加害者の実名報道は禁止されています。実名報道が行われるようになれば、メディアの「報道の自由」を確保することができます。
ネットによる不正確な情報拡散の防止	被害者・市民の「知る権利」の保障
現状では、実名報道が行われていないために、凶悪な少年犯罪が起こった場合、一部ユーザーによってインターネットの掲示板等で犯人を特定するための書き込みが行われることがあります。その際に誤った情報によって無実の少年が苦しめられてしまう危険性もあります。匿名報道では内容の正しさを確かめることができず、誤った報道が見過ごされてしまったりすることもあります。実名報道が行われるようになれば、無責任なうわさや憶測の独り歩きを防止し、透明性を確保することができ、無実の少年が犯罪者扱いされる危険性を防ぐことができます。	日本は民主主義国家であり、主権者である国民には国のあり方を考えるに必要となる情報が「知る権利」があるといわれています。現状では、少年犯罪の加害者が誰なのか、どのような人間なのかを知るすべはありません。これは、被害者であっても同じです。実名報道が行われるようになれば、こうした被害者や市民の「知る権利」を保障することが可能になります。犯罪の原因や今後の防止策などについて、国民全体で議論していくためには、その犯罪事実について、事件の背景なども含め、できるだけ正確でわかりやすい情報が必要になるといえます。

●デメリットとして想定されること

加害者の人権侵害・更生の阻害	保護者・親族の報道被害
現状の少年法は、処罰することよりも少年の更生に重きを置いているため、実名報道には消極的立場をとっています。少年には社会復帰のために犯罪事実を実名で公表されない権利があると捉えるのです。実名報道が行われるようになれば、加害者のプライバシーを著しく侵害したり、心を傷つけてしまったりする危険性があります。報道が過熱し、犯罪と直接関係の無いような情報まで日本中に報道されてしまい、社会復帰そのものや、就職が困難になる可能性も考えられます。その場合、再犯につながる危険性もあります。	少年犯罪は、監督責任をもつ保護者が批判の対象となることしばしばです。しかし、環境は家庭によって様々であり、一概に保護者の責任を追究することが正しいとは限りません。実名報道が行われるようになれば、そうした保護者にも直接報道の目が向けられ、また、関係のない親族までもが批判の対象になることも考えられます。その場合、平穏な日常生活が阻害され、とすれば罪を失う事にもなりかねません。少年の健全な更生のためにも、生活が経済的に安定していることは重要な要素とも言えます。
模倣犯の増加	えん罪被害
現状では、加害少年は「少年A」といったような匿名で報道されています。実名報道が行われるようになれば、犯人が有名人化・偶像化され、犯行の手口や犯人の性格・趣味などの詳細が合わせて報道されることで、同年代の少年たちの中から加害少年をヒーロー視した模倣犯が出てくるおそれがあります。一部には重大事件を真似ることによって社会的な注目を集めたがっている者がいることも事実です。メディアの報道が「模倣犯」を誘発してしまう危険性があります。	誹謗中傷やえん罪被害はあってはならないことではあります。一方、そのようなことが起こった場合であっても、実名報道がなければ被害ある程度食い止めることができません。実名報道が行われるようになれば、本来無実であった少年が裁判前からあたかも犯罪者のように実名が報道され、名誉を著しく傷つけてしまうことがあります。一度広がった情報を修正することは大変困難です。無実の少年が犯罪者扱いされ、社会的制裁を受ける危険性は避けるべきです。

【アタックのポイント】
「少年」は、将来において社会を担っていく大人になるための生育途上にあるものです。そのような生育途上にある少年が過ちを犯したからといって、これを成人と同じように社会的制裁を加えることは、少年をきちんと教育していない親を含めた大人が負うべき責任を少年に押し付けることになりかねません。しかし、現状のままでは、少年の更生や社会復帰にはプラスかもしれませんが、他方でメディアや市民の「知る権利」を考えるとマイナスになります。どちらも憲法で守られている重要な権利であり、一般論としてどちらかが絶対的に優位であるとはいえず、今の少年法第61条は、こうした権利よりも、少年の更生や社会復帰の利益のほうを優先させる立場をとっているようにも見えます。憲法の観点からみれば、これに十分な理由があるかどうか、表現の自由への過剰な制約ではないか、という問題も提起され得ます。しかし、必ずしもメディアが無責任な報道をするとは限らず、視聴者の興味関心を引き立てるだけの悪質なメディアも存在します。また、インターネットの普及によりメディアで報道されなくても、ネット上で拡散されてしまうケースもありますし、一部週刊誌が罰則規定のないことを理由に実名報道をしても実名もありません。その場合に、メリットやデメリットがどの程度の規模で発生するのか、よく注意する必要があります。

★この他に思いついたメリット・デメリットを挙げてみよう!!

GCP 企画「人権」ディベートワークシート【準備④ 立論を作成する】 No. _____

○これから（肯定側 否定側）立論を始めます。
○（メリット デメリット）を（2点 1点）述べます。

〔 〕点目は、 _____ です。

○現状分析です。現状では…

○発生過程です。ここで少年犯罪の加害者の実名報道が行われるようになります。すると…

こうして、(デ)メリットの _____ が発生します。

○（重要性 深刻性）です。なぜこの(デ)メリットが（重要 深刻）なのかというところから、この(デ)メリットは（重要 深刻）です。

以上で、（肯定側 否定側）立論を終わります。

スピーチに何分かかかるかあらかじめ計測しておこう → 時間 _____ :

GCP 企画「人権」ディベートワークシート【準備⑤ アタックを考える】 No. _____

○これから（肯定側 否定側）アタックを始めます。〔 〕点反駁します。（ 〕点目。
【ブレイクストロミングで挙げた想定される相手の議論を書きまします】
<主張>相手は立論の〔 _____ 〕で _____

_____と言っていました、それは違います。

<根拠>なぜなら、
(例) 事実ではないから 根拠が不明であるから 論理が飛躍しているから
別の視点(角度)から見ると違っているから 長期的に見ると違っているから
議論の前提・言葉の定義が間違っているから

<結論>よって、

肯定側	考えられる否定側のパターン	否定側	考えられる肯定側のパターン
現状分析	<input type="checkbox"/> 現状に問題はありませぬ	現状分析	<input type="checkbox"/> 現状には問題があります
	<input type="checkbox"/> とても小さな問題です		<input type="checkbox"/> 現状はそれほど良くありません
発生過程	<input type="checkbox"/> 現状のままでも問題は解決します	発生過程	<input type="checkbox"/> 現状のままでもデメリットは発生します
	<input type="checkbox"/> メリットは発生しません		<input type="checkbox"/> デメリットは発生しません
重要性	<input type="checkbox"/> メリットは発生してもわずかで、むしろデメリットにつながります	深刻性	<input type="checkbox"/> デメリットは発生してもわずかで、むしろメリットにつながります
	<input type="checkbox"/> 重要性までつながりませぬ		<input type="checkbox"/> 深刻性までつながりませぬ
	<input type="checkbox"/> 重要ではありません		<input type="checkbox"/> 深刻ではありません
	<input type="checkbox"/> 否定側の主張に比べれば重要ではありません		<input type="checkbox"/> 肯定側の主張に比べれば深刻ではありません

【質疑で確認すべきポイント】

N) 模擬国連(3年生)

■ 概要

模擬国連とは、実際に国連で行われている国際会議をモデルにして、一人一人が世界各国の大使となって会議・交渉を行うものです。今回は、気候変動枠組み条約の締約国会議「COP21」をテーマに、各クラスを15の国に分け模擬国連を実施しました。

2020年以降の新たな枠組みの創設を目指し、論点①「2020年以降の温室効果ガスの新しい削減目標」、論点②「先進国と途上国の扱いをどのように区別するのか」という二つの論点に沿って、それぞれの国の立場で交渉をし、会議の最後には、決議案を全会一致で採択することを目指しました。

各クラスのGCPリーダーが、会議の議事進行、交渉の調整、決議案の採択等を行う、議長(Chairman)、秘書官(Secretary)を務めました。その他の生徒は参加国(15カ国)の大使として、国ごとに独自に用意した決議案に基づき、他国との交渉を重ねました。

大使それぞれの1分間スピーチの後、事前に立案しておいた自国の政策をもとに、他国との自由交渉(アンモデ)を繰り返し、会議の意思決定の下地となる決議案(Draft Resolution)を作成していきます。自国の国益を追求しつつも、国際社会にとっても有益かつ問題解決に実効的な解決策・対策を盛り込んだ決議案を採択することができるか、活発な交渉が展開されます。投票はコンセンサス採択(全会一致)を採用し、投票の段階で1カ国でも反対する国があれば否決となります。否決する国がでないよう、署名をしない反対国とも交渉を進めて、決議案の採択を目指しました。

◆ 生徒感想

「ニュースでしか知らなかった国連を実際に模擬としてすることができ、とても面白かったです。また自分の国の主張や他の国の意見を考慮して自分の国との妥協点を見つけていくことの難しさを知ることができ、地球環境問題を取り巻く国際社会の複雑さや利害関係を、身をもって学びました。」

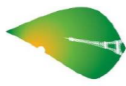
「どうすれば納得してもらえるか考えながら交渉するのはとても新鮮で、想像していたよりも難しかったです。色んな国の主張を受け入れながらも、自国の主張を貫き通すことの大変さや、全ての国にメリットがあるような決議案を出すことの大変さがよく分かりました。」

「自分の国の要求のトップとボトムを決めて臨んだつもりだったが、それが他国のボトムと大きく違い、驚くとともに、各国の要求をまとめるのが非常に難しいと実感しました。」



GCP 企画(3年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2016年10月29日(土) 11:00~12:30 (90分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	地球環境問題	本時の題目	模擬国連の開催 (気候変動枠組み条約)	
本時の目標	気候変動枠組み条約の締約国会議「COP21」をテーマに、各クラス15の国に分かれて模擬国連を実施し、地球環境問題を取り巻く各国の主張や、国際関係を体験的に学ぶ。また、交渉の過程を通して、スピーチ力、プレゼン力、論理的思考力の育成を目指す。			
項 目	項 目	授業の進行内容 (発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
11日(月) 15:40~	GCP 企画の説明 (模擬国連とは何か)	TV 放送で模擬国連の概略と議題の説明、当日までの課題(スピーチの作成)の説明	30	「模擬国連とは」の ppt 資料配布
12日(火) 朝 読 書	事前学習① 「COP21」とは何か	模擬国連のテーマとなる「COP21」とは何か、気候変動枠組み条約の基礎知識を学ぶ	10	「事前学習資料①」配布
19日(水) L H R	事前学習②、③ 国別に分かれて事前準備	会議での論点の確認と、国ごとにスタンスペーパーの読み込み、決議案の作成、スピーチの準備を行う	50	「事前準備資料②」「③」「決議案」「スタンスペーパー」の配布
26日(水) L H R	事前学習④ 模擬国連の流れの説明	GCP リーダーズが、模擬国連の当日の流れを説明し、国別に最後の準備を行う	20	「模擬国連の流れ」の ppt 資料配付
準 備	机、イスを配置し、国名プレートを設置	会議開始のための準備を整え、国別に最後の確認を行う	15	「ネームカード」配布
展 開	①開会宣言・出席国の確認	議長の開会宣言と出席国確認を行う ・「Yes/Yes present」と答える	1	「スタンス Memo」 1分をタイマー表示 30分をタイマー表示。 議長、秘書官は各国の調整に動く。 1分をタイマー表示 40分をタイマー表示 決議案を受け取ったら 秘書官は電子黒板に書き込む 反対する国はプレート を挙げる
	②スピーカーズリストの解放	スピーチをしたい国を募る ・希望する国はプレートを挙げる	1	
	③スピーチ (前半8カ国)	各国、一分でスピーチを行う。参加国は各国の主張をメモにとる	8	
	④アンモデ (自由交渉)	決議案に9カ国以上の署名を集めるために自由に歩き回って交渉を行う	30	
	⑤スピーチ (後半7カ国)	各国、一分でスピーチを行う。参加国は各国の主張をメモにとる	7	
	⑥アンモデ (自由交渉)	9カ国以上の署名を集めるために交渉を行い、署名が集まったら議長に提出する。採択の際に反対する国が出ないように、非署名国にも交渉を重ねる	40	
	⑦決議案の読み上げ	提出された決議案を議長が読み上げる	5	
	⑧投票	コンセンサス投票を採用し、反対が1カ国でもあれば否決とする	2	
	⑨閉会宣言	議長の閉会宣言と全員の拍手で閉会	1	
ま と め	⑩振り返りの記入	「Reflection Sheet」に振り返りを記入する	15	「Reflection Sheet」配布
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・10月11日までにグループ分けと国分けを行う。 ・10月22日(土)14:00~GCP リーダーズで実際にプレ模擬国連を開催する。 ・担任は GCP リーダーズの進行のサポートをする。 			
講 評				



模擬国連「COP21」開催に向けて

模擬国連で議論する内容は？

◎事前学習①の復習

COP21の正式名称は「気候変動枠組条約第21回締約国会議」です。COPとは「Conference of the Parties」の略で条約に参加する国々の会議という意味。1992年、国連で「気候変動枠組条約」が採択され、何度も国際会議で地球温暖化対策を話し合ってきました。2015年12月、その21回目の会議となるCOP21がパリで開催され、歴史的な合意「パリ協定」が採択されました。

今回、10月29日に各クラスで開催する模擬国連は、この「COP21」の会議を模擬し、皆さん自身が各国の大使になりきって、交渉を進め、最後に今後の地球温暖化への取り組みについての「決議案」を採択していきます！

それではここで、決議案の文案(Draft Resolution)を皆で読んでみましょう！各国が、決議案の中での立場をとるのは「スタンスペーパー」(後で配布に書いてあります。(別紙「決議案」を読む))

◎模擬国連で議論する内容は？

模擬国連「COP21」で議論する内容は大きく2つです。

論点① 2020年以降の温室効果ガスの新しい削減目標

1. 何を考慮するのか
2. どのように削減するのか
3. 対象は全ての国か、先進国か
4. 削減目標に法的拘束力を持たせるか (法的拘束力…決めたことに従う義務が生じる) という4つの点について、各国の「スタンスペーパー」をよく読み、各国の立場にたって大使として、参加国との交渉を進めます。

論点② 先進国と途上国の扱いをどのように区別するのか

京都議定書では先進国と途上国の差を明確に定めていました。これについて、全ての国を対象とするべきか？について議論します

1. 従来の先進国/途上国という区別のまま
2. 一定以上の排出国には、先進国と同等の義務をかける
3. 途上国の中でも、中・印・南ア・メキシコ・韓・ブラジルなどと、後発発展途上国、また、島嶼国は別にして考える

という3つの選択肢から、各国の「スタンスペーパー」に立った主張を展開してください。



Draft Resolution (決議案)

Conference of the Parties
共同提案国 (自国含め9か国必要) :

COP21は、

温室効果ガス削減目標の設定に際しては〔選択肢：a 排出量 b 経済力 c 能力 d 歴史的責任〕が重要な基準であることを強調し、

環境問題の解決に向けて努力する過程で、「共通だが差異ある責任」に留意し、

〔(1)従来の先進国/途上国の分類 (2)先進国/途上国の区別だけでなく排出量を考慮した分類 (3)先進国/新興国/途上国の分類) を採用することを強く望み、¹⁾

1. 温室効果ガスを削減するためには、()²⁾ ことを最優先に推進することを決定し、
2. 削減目標をすべての国が設定し、その達成について〔先進国には・能力のある国には・すべての国に〕法的拘束力の〔ある・ない〕ものとすることを要請し、
3. 「共通だが差異ある責任及び各国の能力」を考慮し、〔(1)先進国がより強い責任を負うべき (2)先進国ならびに能力ある途上国が積極的に責任を負うべき (3)従来の先進国/途上国の二分法から脱却し柔軟な解釈・適用すべき〕ことを強調する。

¹⁾ (1)~(3)の中で、該当する考え方に○を付けてください。

²⁾ 例として(1) 再生可能エネルギーの割合を拡大させる (2) 再生可能エネルギーの割合を拡大させるとともにエネルギー効率の改善目標も設定する (3) 非化石燃料エネルギーの割合を拡大させる (4) 非化石燃料エネルギーの割合を拡大させるとともに、技術のない国に技術のある国が援助する 等が挙げられる。削減に向けて具体的にどのようの行動を重視していくのかを書いてください

0) ファイナルプロジェクト(3年生)

GCP 企画の総括として、高校 3 年生が課題研究「Final Project」を実施しました。2015 年に国連が採択した「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の中で示された 17 のゴール SDGs から、高校 3 年生全員が一人一つのテーマを設定し課題研究を行いました。研究の成果は、最終的にはレポートとしてまとめます。その過程で、日本語と英語のポスターにまとめ、二言語でのポスターセッションを行いました。

企画の流れ

7 月 「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の SDGs から設定された大テーマを提示・選択

※大テーマは、現代社会の教科書とリンクし、設定されている。以下が大テーマ一覧。

No.	大テーマ一覧	教科書該当ページ	2030 アジェンダ
1	貧困・飢餓(食糧問題)	P170~171	1, 2
2	少子高齢化社会と福祉	P185	3
3	少年兵・子どもの教育	P175	4
4	ジェンダーの平等、女性の権利・教育		5
5	水資源問題	P170	6
6	エネルギーの持続的な開発	P12~13, P184	7
7	現代の雇用・労働問題	P134~135, P180	8
8	世界の格差(南北問題)	P168~169	10
9	地球温暖化(気候変動)	P6~11	13, 14
10	砂漠化・生物多様性の危機	P10~11	15
11	東西冷戦とその後の世界	P160~161	16
12	民族紛争・難民問題	P172~173	16
13	人種差別(アパルトヘイト等)・人権問題	P174~175	16
14	核兵器と軍縮	P162~163	16
15	国連の課題、国連平和維持活動(PKO)	P154~	17
16	日本の役割(被爆国、平和憲法、ODA)	P176~177	
17	日本の平和主義と安全保障	P68~70	
18	日本の公害問題・循環型社会への取り組み	P139~141	

- 8 月 大テーマに関して探求を進め、レポートを作成
- 9 月 大テーマから、一人が一つの小テーマを設定
課題探求を進める上で必要な二つの視点も設定
- 10 月 小テーマレポート・アウトラインの作成
- 11 月 小テーマレポートを作成
- 12 月 小テーマレポートをもとに、関係図を作成
関係図をもとにポスターを作成
- 1 月 クラス内ポスターセッションを行い、内容をブラッシュアップ
- 2 月 学年ポスターセッション「Final Project ポスターセッション」を実施(体育館)
英語でのポスターセッションを作成
英語でのポスターセッションを実施(2クラス合同)
1, 2 年生に向けたポスターセッションを二言語で実施(体育館)
最終レポート(2,000 字以上)を作成

生徒が設定した小テーマの例

「ニュージーランドの非核政策に学ぶ非核への歩み」

「近代オリンピックから見る黒人差別」

「女性国会議員の割合が世界一高いルワンダの試みと日本の道」

「世界一焼却炉が多い日本は世界一ごみを出す国なのか」

「ワークシェアリングがもたらす雇用創出と課題」

◆ 生徒の感想

「どれだけ深く入り込めるか、学べるかは、初めの小テーマ決めや視点をしっかりと決めることで差が出ると感じた。小テーマが具体的なものは、発表でも何を結局学んだのか、伝えたいのかがわかります。また、視点の違いがすごく面白かった。自分と同じ大テーマの人の発表を聞いたときにそこに Point をあてたのか！と自分の気づかなかった面をしてくれて大いに学びました。」

「時間をかけた分、自分が決めたテーマに対する考えがしっかりと深まり、より興味・関心が大きくなりました。また、他の人のポスターセッションを聞いて、世界の問題を身近に感じられるようになりました。ポスターやレポートを作成するスキルがあがった。特にデータの信憑性を見極めることの大切さを知ったので、メディアに振り回されない姿勢が身につきました。沢山の時間をかけ、大変でしたが、その分、沢山のことを学びました！」

「最初は嫌でしょうがなかったが、準備を重ねる中で、だんだんと自分が決めたテーマに対する考えが深まり、関心が大きくなりました。ポスターセッションの前日も当日もワクワクしていて、最初の自分とは 180 度変わりました。英語も含めて、あきらめずに全力で挑戦できたことが嬉しく、成長できました！もう一度、違うテーマでやりたいくらいです。SGH1 期生でよかった！伝統を築けてよかった！」

「お互いの発表を聞いて、世界には課題が山積していること、そしてそのどれもが複雑に絡み合い、一つだけでは解決できないことを改めて実感しました。だからこそ、この SGH1 期の仲間たちと一緒に、2030 年を目指し世界の諸問題の解決に取り組んでいきたいです！」



《人権問題》女性国会議員の割合が世界一高い ルワンダの試みと日本の道

3年3組24番 大川優希

①世界の女性国会議員割合

- 1位 **ルワンダ** 57.5%
- 2位 **ボリビア** 51.8%
- 3位 **キューバ** 48.9%

1887人中!!

151位 **日本** 11.6% (2016年現在)

(IPU※より)

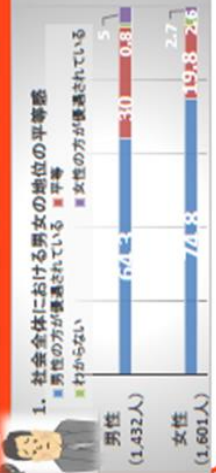
※: Inter-Parliamentary Union... 1899年に設立された多国議会の組織。本部はスイス、ジュネーブ。

③ルワンダの女性社会進出

1994年 ルワンダ内戦... 民族対立によって80万人以上が犠牲され、男性の人口が減少。
 (新国家建設と人権擁護の観点から) 土壌・相続について女性不平等を是正、+ 勇退の職業訓練、自立支援。
 シェンダの平等、家庭内暴力撤廃政策へ。

外堀から、
女性の社会進出が進んだ!

⑤内閣府世論調査 (平成24年10月)



1. 社会全体における男女の地位の平等感
 ■ 男性の方が優遇されている ■ 平等 ■ 女性の方が優遇されている ■ わからない

②日本の男女共同参画への歩み

- 1946年 日本国憲法制定
→ 男女平等について明記。女性の法制上の地位を見直す。
 - 1999年 男女共同参画社会基本法施行
→ 男女共同参画社会形成への第一歩。
- But! 民法という生活に身近な法律に関しては弱い。
 天婦団地、再婚禁止期間 etc.

④ルワンダのクォータ制

2000年 2020年までの中期開発計画「EDPRS」にジェンダー課題を打ち出す。
 2003年 2003年憲法を公布。
 議会の女性議員の割合を3割以上と規定するクォータ制を導入。
 「議席割当制」... 議席のうち一定数を女性に当てること。
 導入前 25.7% → 導入後 48.8%

⑥日本クォータ制導入への動き

日本の内閣府は、社会の男女別分科において、2030年までに議員の約30%に女性を増やす割合を少なくとも30%以上とする目標を掲げている。(平成23年6月) 2016年4月に総務省の議員選挙は、公選法改正を契機としてクォータ制導入の動きをまとめた。

社団代表と小選挙区の議選立候補者等、政界の別面で男女の2グループに分け、交互に比例代表で過半数を確保することが可能。

→ 進捗する際に、男女議員のそれぞれの比率が均等化される仕組み。

※: 議員候補者、①議員選挙、②法人・団体等における議長等以上の職、③専門的・技術的・学術的・芸術的・スポーツの分野に専ら従事する者、④2030年以降の目標達成に向けてCDP（環境省・男女共同参画推進部）※、⑤国政選挙各政党の役員・主要な役員等として活動すること。

《参考資料》 インターネット・国際ジェンダー平等開発計画ルワンダ国（国連行政協力国国際協力機構 JICA）・内閣府男女共同参画局 ホームページ・毎日新聞 社説「GLOBAL NOT 法の道」現代社会社説欄・大津林 第三巻

Protect Young People from burden!!

3234 Hiromi Suzuki

Introduction
 I believe... young people are suffering from many & heavy burden. They need help. That's why I chose this topic.

Why "young"?
 They are important work force & tax payer

1. They will be elderly person in the future
 ⇒ We should protect them (from 2000 to 2050)

I Heavy burden of young people
 Hard work & tax
 Distress young people
 According to questionnaire, the person "they don't raise a child" is... 56.5% → Care, attend TIME to over 65 age → 22.2% → Cent contribute work

III Meet their "needs"
 To reduce their burden, appropriate policies are very necessary. Therefore, the government should analyzes what young people really need.

Most important thing is = listening to 'real voice'

Conclusion
 We should help them, and make stable base of Japan for our future.

~ reference ~
 Younging the 2016.6.20
 Public Health 2016.6.21
 100-201.14

Japan's food problems

3525 Ayaka Izumida

Introduction
 Japan has two big food problems.

① Low food self-sufficiency ratio
 The current condition
 39%
 180% 100% 50%
 Canada 14% 80%
 America Germany Japan
 → Lets eat domestic agricultural products!
 → Much food waste
 • The amount of food waste → 6,320,000 tons!
 • Solution → Understand the operation date → Consume-buy date

Conclusion
 There are food problems in Japan.
 But... We can change the future!!
 → Youth should participate in farming.
 • Don't forget appreciation for food!!

3. グローバル・リーダーズ・プログラム (GLP)

A) 概要・年間スケジュール

■ 概要

グローバル・リーダーズ・プログラム (GLP) はその成果を、GCP はじめ全校のSGHの取り組みに還元していく事が最大の使命であります。昨年度の SGHA の時点で先行的に開始したこのプログラムは、これまでに本年度の SGH 本採用にもつながる実績を残しております。先程プレゼンテーションを行いました GCP 広島フィールドワークは、昨年度の GLP フィールドワークがベースとなっております。またフィリピン講師とのスカイプ英会話は、現在全校生徒が取り組んでおり、英語の4技能の中でも課題となっているリスニング・スピーキング力の向上に貢献しています。言語技術授業の英語と日本語往還の実験も、GLP で行われました。

本年度の取り組みは16名で行っています。毎週火曜日・金曜日のクラブ終了後18時から19時30分過ぎまで図書館にあるグループ学習室で行います。また必要に応じて合宿などの集中プログラムを実施します。

■ プログラム内容

玉川学園の「学びの技」を教科書として、論理的・批判的思考や情報収集・分析力など探究型学習の基礎を育てます。さらに、フィリピン人講師によるオンライン英会話ではインタビュースキルなどの英語力を磨きます。また地球規模課題への理解と知識を深めるために、国連大学訪問や、平和学者、外交官、国際機関職員による懇談会を行なっていただいています。また創価大学・法学部の飯田教授より国際人権法の連続講義を受けて、夏のフィールドワークに向けての準備を行いました。

■ 年間のプログラムの流れ

まずは地球規模課題の学習と仮説を設定し、それを踏まえてフィールドワークを実施しました。さらに内容と仮説を吟味して、学園祭でポスターセッションを行いました。そのあとすぐに、それまでの取り組みの内容を、ジャパントイムズ監修の英字新聞作成を実施。その後は、主張をまとめてプロの動画編集者の指導のもと、動画を制作しました。作成した動画を Youtube などにアップロードし、Skype を通じて、フィリピン・インドの2カ国の、海外の人々に動画に対してのインタビューを行いました。英語のプレゼンテーションスキルを身につけた上で、3年生がこの活動を取りまとめ、最終報告会を英語で行いました。また2年生は4月に長崎で開催されるクリティカルイシューズフォーラム(CIF)に向けて、核不拡散についての研究を取りまとめたミニプロジェクトを作成しました。

■ 年間スケジュール

日程	プログラム内容	探究・発表等の手法など
春期休業	集中講義：昨年度の内容の共有、年間計画の確認	Chromebook 配布(貸与)
4 月	アメリカ・ミドルベリー国際大学院 モントレー校 派遣 Critical issues forum(CIF)参加(4/12～18、代表 2 名)	海外：米・カリフォルニア
	講演「平和とは何か」 講師：ニュージーランド国立平和紛争研究所 所長 ケビン・クレメンツ博士	
5 月	授業「国家の安全保障・人間の安全保障とは」	グループワーク
	国連大学 研修 講演「2030 アジェンダについて」 講師：国連大学 サステイナビリティ高等研究所 プログラムアソシエイト 今井夏子氏	国連大学
	講演「国連開発計画とは」 講師：国連開発計画 駐日代表 近藤哲生氏	
	講演「人権とは」 講師：創価大学 飯田順三教授	
	講演「自身の学生生活を振り返って」 講師：東ティモール大使館 特命全権大使 山本栄二氏	
	言語技術「認知の技術」	
6 月	授業：「戦争と平和」「人権」のグループごとにテーマについて情報収集	ディスカッション
	言語技術「絵のクリティカルリーディング」	
	ディスカッション「探究学習のテーマについて」	KJ 法
	講演「国際法とは」 講師：創価大学 飯田順三教授	
7 月	講義「アジア開発銀行とは」 講師：アジア開発銀行 帯刀良信氏	
	ディスカッション「探究学習のテーマについて」	ディスカッション
	講演「国際人権法とは」 講師：創価大学 飯田順三教授	ディスカッション
夏季休業	校内合宿 ①フィールドワークでの情報収集のポイントを学ぶ ②各フィールドワーク先での探究学習テーマを設定・プレゼン ③英字新聞編集会議	グループワーク ディスカッション プレゼンテーション
	フィールドワーク 戦争と平和：沖縄(8/10～12) 人権：アメリカ(8/20～27)	アメリカでのフィールドワークは GCP と共に実施
9 月	授業「ポスターの作り方」	

日程	プログラム内容	探究・発表等の手法など
10月	ポスター発表「フィールドワーク報告」(一般公開)	ポスターセッション
	授業「英字新聞原稿作成」	
	中間報告会「フィールドワーク報告(英語)」(一般公開)	パワーポイント
11月	講演「グローバルな人ってどんな人？」 講師:北海道大学大学院 山田智久准教授	
	言語技術「絵の分析」	ディスカッション
	講義「映像のクリティカルリーディング」 講師:映像制作会社 Gigavision 津田盛治氏 他	ディスカッション
	第一回全国中学校・高等学校英字新聞コンテスト出場	
12月	集中講義:一年間で学んだことを伝える映像制作	グループワーク、映像制作
	交流会: 沖縄県立那覇国際高校	プレゼンテーション
冬季休業	映像制作作業	
1月	授業「英語でのプレゼンテーションスキル」	ペアワーク
	インド高校生インタビュー 「映像を視聴して感じたこと」	appear.in の活用
2月	2017年度 CIF 準備	
	GLP 最終発表会	プレゼンテーション、要旨作成
3月	活動の振り返り・評価	自己評価・相互評価

B) クリティカル・イシューズ・フォーラム(CIF)

- 実施 4月13日から17日
- 参加者 代表生徒2名(3年生男女1名ずつ)
- 場所 アメリカ・カリフォルニア州、モンレー

ミドルベリー国際問題研究所ジェームズ・マーティン不拡散研究センター

■ 内容

Critical Issues Forum (CIF)という会議に参加してきました。この会議には、ロシアの高校から3校、アメリカからハワイも含め7校、日本から6校の代表生徒約2名ずつが参加し、核兵器の不拡散をテーマにプレゼンテーションやディスカッションを通して意見を交換する。2016年の Student Conference のテーマは「核の脆弱性:さらなる平和で安全な世界への教訓」

■ 行程

● 13日

サンフランシスコ空港に到着し、そこからバスで2時間ほどかけて美しい港町のモンレー市内を散策したあと、現地のホストファミリーと合流し1日目を終えました。

● 14日

朝から男女別に地元の高校の校内見学をしました。その後、ジェームズ・マーティン不拡散

研究センターにてロシアの代表生徒と合流しオリエンテーションを終えた後、サンタカタリーナ高校でプレゼンテーションのリハーサルを行いました。最後に合流したアメリカの代表生徒とも交流する機会がありました。

● 15 日

発表会がスタートし、創価高校も 5 番目にプレゼンテーションを行いました。世界における核兵器に対する認識が、「必要悪」から「絶対悪」へと転換する時期にきていることを、様々な角度から訴えました。そして、映像の配信などを通じて、世界中の私たちの世代からその波を起こしていこうと訴えました。プレゼント後の質疑応答では、プレゼン中で使用した去年の GLP メンバーが作ったビデオについて「自分たちの身近にいる同じ高校生などに核廃絶への自覚をもってもらうためにビデオを作ることはとても効果的であるし、内容も良かった」などとコメントをいただくことができました。

● 16 日

5 校がプレゼンテーションし、アメリカの元国防長官の、ウィリアム・ペリーさんが核廃絶に向けての教育の重要性について、ご自身が戦時中に日本へ派遣された経験などを通して語って下さいました。その後の質疑応答では、私たちも核廃絶と教育の役割などについて質問をさせていただきました。

◆ 生徒感想

「僕がこの五日間で、良い経験だと思ったことは、アメリカ、ロシア、そして日本の最優秀の生徒と交流することができた事です。彼らからは学ぶところがたくさんあり、よいライバルをたくさんつくることができました。また同じ若い世代として、次代の世界を担うのは今の若い世代であり、核廃絶をしていく主役は紛れもなく私たちであることを実感しました。彼らと交流する中で、自分の中に培われた哲学は、世界を舞台に活動する上で、本当に強い武器であることに気づきました。海外に行った時、ぶれない自分をつくってくれている事を強く実感し、後一年、さらに深い哲学を自身の中に確立していこうと決意しました。」

「フォーラムに参加させていただいて、改めて今世界が直面している、核兵器の問題の重要性、重大性を改めて認識しました。核廃絶の第一線で活動されている参加者の方々が私たち高校生におっしゃっていたことは、他言語を学ぶこと、新聞やウェブサイトなどで世界の情勢について知ること、クリティカルシンキングを身につけることでした。今回の会議だけで終わらせることなく、私はこの 3 つのことに挑戦したいと思います。今こうして聞いている皆さんの中には、日々の人間関係や、勉強部活のこと、進路のことの方が自分にとっては重要だから、核兵器の問題は難しいし、自分はあまり関係ないと考えている人もいるかもしれません。しかし、たった一発の核兵器によって、それらのことは一瞬で消し去られてしまうのです。想像しづらい話かもしれませんが、この世界に核兵器が存在する限り、その可能性は無くなりません。今回の学びを通じて私はそのことをしっかりと学びました。そして今後はぜひ皆さんにも核兵器の問題をもっと身近な問題として自分なりに理解を深めてほしいと感じました。」



The Critical Issues Forum の2016年生徒発表の様子参考サイト

<http://sites.miis.edu/criticalissuesforum/2016/04/28/2016-student-spring-conference/>

C) ゲスト講義

■ 講義 ニュージーランド国立平和紛争研究所所長 ケビン・クレメンツ博士
(2016年4月19日)

■ 概要

「なぜ今、global issuesに『慈悲の精神』によるエンパワーメントが必要なのか？」をテーマに、最新の平和学の知見について、全て英語で講義していただきました。

◆ 生徒感想

「アリとキリギリスに寓話について、平和学者のクレメンツ博士に質問できたのは貴重な機会でした。彼の回答の中に、「自分が利他主義をとることによって、今度は相手が自分に利他主義をとってくれる」という考え方があったのがとても啓発的でした。この返答は非常に分かりやすく、また受け入れやすい考え方でした。また、CIFの話になると、とても嬉しそうに話を聞いて下さって、高校生をとても大切に思ってくれていることが伝わってきました。」



■ 連続講義 1 創価大学法学部 飯田順三教授(2016年5月13日)

■ 概要

人権とはどういうものか、2人、4人のグループに分かれ、まとめていきました2人のときに出たのは「人間であれば誰もが持っているもの。差別されない」などということ、4人のときには、「すべての人が生まれながらに持つ個人の生命を尊重される権利」など、まとまった定義が出ました。最後は、映像「人権のための連合」し、どのような人権があるのか学びました。



◆ 生徒感想

「私自身、人権の定義というのは、現代社会の教科書などで短くまとまっていたことしか思い浮かびませんでした。しかし、「人権のための連合」のサイトには、30個の項目があることを知りました。また、人権の考え方が生まれた背景として、高2の世界史で習った出来事がたくさん出てきました。このことから、日頃の授業で習った内容を忘れずに、自分のものとしていくことが大切だと感じました。」

■ 連続講義 2 創価大学法学部 飯田順三教授(2016年6月21日)

■ 概要

飯田先生は7つの項目(国際社会、国際連合、国際法、条約、世界人権宣言、権利、人権)を、具体例を交えながら分かりやすく教えてくださいました。また、動画「The 30 Articles of Human Rights」を英語で見ながら、国際人権法全30条を英語と和訳されたものとを照らし合わせ、確認しました。

◆ 生徒感想

「以前は、人権は生きるために必要な権利であると考えていましたが、飯田先生の講義で人権とは、人間として生まれただけで他人に出張できる権利であることを知り、人権に対する認識が一変しました。」

■ 連続講義 3 創価大学法学部 飯田順三教授(2016年7月19日)

■ 概要

飯田順三著書『国際法への誘い』の第18・19話を「United Nations Human Rights office of the high commissioner」のサイトの内容と照らし合わせながら、解説していただきました。第18話は現在の国際人権法が成立するまでの流れと制度の内容についての説明で、ポイントとなる条約や議定書などの英訳を確認しながら、国際人権法の全体像を学びました。第19話は国際人権法の展開ということで条約以外の国連によって築かれた人権保障制度についての説明で、人々の人権を更に強固に守るための運動を学びました。

◆ 生徒感想

「私は今回のGLPを受けて、実際、自分自身もこのようにして人権が守られていることを知り、新鮮な感動を抱きました。また、飯田先生の話の中で「アジアにはまだ人権を守る決定的条約が

ない」ということを知り、大きな問題であるがゆえに拘束力の強い条約を迅速に作らなければならないと思いました。」

■ フィールドワーク 国連大学訪問(2016年5月26日)

■ 概要

国連大学サステナビリティ高等研究所(UNU-IAS)プログラムアソシエイトの今井夏子さんと、国連開発計画(UNDP)所長の近藤哲生さんの講義を受講しました。

今井さんの講義では国連大学の概要をお話いただきました。人間の安全保障とは国を守る以上に人間一人一人を守るものであり、国連が中心となって地域に働きかける「トップダウンアプローチ」と、国連がNGOや市民社会と力を合わせて草の根レベルの人から社会における脅威を取り除いていく「ボトムアップアプローチ」がある事を学びました。

また、近藤さんの講義ではUNDPの活動内容について、具体的にはチャドの妊産婦死亡率の低下や、女性の早期結婚をやめさせるなどの取り組みをご紹介いただきました。

その後、1945年から国際連合のオリジナルの文書が保存されている国連大学内の図書館と、安倍首相やアンジェリーナ・ジョリーが訪問したウ・タント会議場を見学しました。



◆ 生徒感想

「私は2つの講義を聞いて人間の安全保障の大切さやSDGsの目標について詳しく知れたことを、自分の身の回りにいる友人や家族に伝えてシェアしていき、移り変わる時の中で今の自分や他人の行動がいつか世界を持続可能なものに変革するという「トランジショナル・チェンジ」を起こしていきたいと思いました。」

■ 講義 アジア開発銀行 帯刀良信氏(2016年7月8日)

■ 概要

アジア開発銀行の役割や取り組みについて紹介していただきました。また、自身の生徒時代の体験を、懇談的にお話いただきました。

◆ 生徒感想

「帯刀さんの体験から、経営は法律的な観点だけでなく、現地の人に寄り添って行うべきだと学びました。また、帯刀さんが本校卒業生ということもあり、学園時代は、多様性を尊ぶ力、同苦できる心、負けじ魂など世界で働く上で必要になってくる勉学以外の様々な力もつけるべきだということをお話いただきました。」

■ 講義 北海道大学 山田智久准教授(2016年11月8日)

■ 概要

質問会形式の懇談会を行いました。生徒からはグローバル人材になるための語学への取り組み方や、人を惹きつけるプレゼンテーションのスキルなどについて多くの質問が寄せられました。山田准教授は語学の学習には自分にあった適切な目的と目標の設定、プレゼンテーションではストーリー性のある内容を、情熱を持って話すことが大切であると答えて下さいました。



◆ 生徒感想

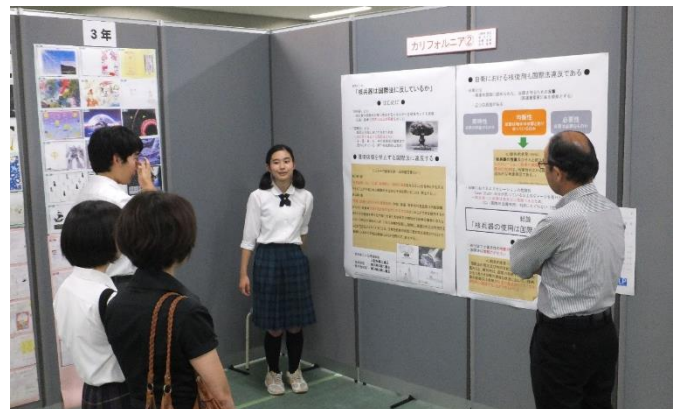
「私は今まで多くの懇談会やセミナーに参加してきましたが、山田先生の明快なご意見や具体的に大学で日本人教員が英語での授業を試みたために内容のレベルが落ちて留学生から抗議の声が起こった、などという教育現場での実際のエピソードを交えながらのお話は英語での授業が増えている現在の大学が直面している課題であると分かりました。」

D) プレゼンスキル(学園祭ポスターセッション・英語プレゼン)

学園祭ポスターセッション

■ 概要

学園祭において、夏にカリフォルニアと沖縄で実施したフィールドワークの研究内容を、ポスターセッション形式で発表しました。1日目は学園生を対象に、2日目は一般の来場者に発表を行いました。それぞれのグループが事前に立てた論題がどのように展開したのかをポスターにまとめ、声の大きさや速さなどの話し方、身振り、目線などの発表態度を意識しながら、学園生だけでなく一般の方々に向けてポスターセッションをすることができました。



(テーマ)沖縄県民に対する日本兵の異民族的な意識が、 沖縄戦での被害を深刻化させたのか

テーマの設定理由

- ・沖縄県民が、味方であるはずの日本兵から「集団自決」の強要、壕追い出し、食糧強奪などをされた背景には、「地上戦」という状況に加えて、他に何があったのか知りたかった
- ・今の沖縄に、米軍基地の約74%が集中している現状につながるのではないかと思った

沖縄戦の概要

- ・期間：1945年3月26日～6月23日
 - ・死者数：
沖縄出身の軍関係者約3万人十一般県民約9万人＝全県民約12万人
沖縄県民以外の日本兵約6万人、アメリカ兵約1万人
- (出典①)

根拠①日本兵の異民族に対する行為

事例 日本兵のアジアでの行為

日本兵による行為	説明
敵性華僑狩り	敵性華僑とみなした人々の虐殺
日本文化の押しつけ	例：日本時間の強要(「東京タイム」)、日本語教育、昭南神社への参拝
開拓地への強制移住	不慣れた農作業の強要
南京事件	兵士だけでなく、市民(2000～30万人)に対する、虐殺・略奪・放火・強姦・暴行などの行為
へいちようざんじけん 平頂山事件	敵が潜伏しているとみなし、日本兵が中国の部落に攻撃約3000人のうち、生き残ったのは10人前後とされる

※華僑…シンガポールやマレーシアに移住した中国系の住民

◎これらの行為があったという事実から、日本兵は異民族に対してひどい仕打ちをする傾向があると考えた

(出典②、③、④)

沖縄戦において軍事・皇民化教育が「集団自決」を促した 要因の一つであったのか

はじめに

〈基本知識〉

- 軍事教育 → 軍事要員への作戦遂行に必要な知識教育
例) 鉄血勳皇隊 ひめゆり学徒隊

住民の戦争参加

- 皇民化教育 → 満州事変～太平洋戦争
日本から占領地・沖縄県民への同化教育
例) 国旗掲揚・国歌斉唱
軍人への敬礼
学校の教育勅語の朗読

天皇への忠誠教育

- 「集団自決」→ 沖縄戦における住民の集団自殺
例) 布団に火を付けて窒息死
手榴弾での爆死

総数1000人以上

〈この論題に至った理由〉

自決にまで及んだ県民の心情は教育によって形成されたのではないか

〈皇民化前の考え方〉

- ・一族の血筋は絶やさない
- ・本土とは異なり、武士階級が成立しない

↓
自決を名譽としない



チビチリガマ

根拠1〈軍事・皇民化教育による滅私奉公の精神〉

- ・「お国のため、天皇のため」に死ぬという考え
→ 当時の学校で教えられていた
軍人になるのが目標

*個人を犠牲にして、国家や社会に尽くすこと

- 例) サイサイサクアラガサイタ
→ 日本、大和魂の象徴としての桜
→ 軍国主義と大きく結びついている
ススメスメヘイタイスメ
→ 後退することはない、前進するのみ

“桜花 散るべき時に散りてこそ 大和の民と褒めらるらん”

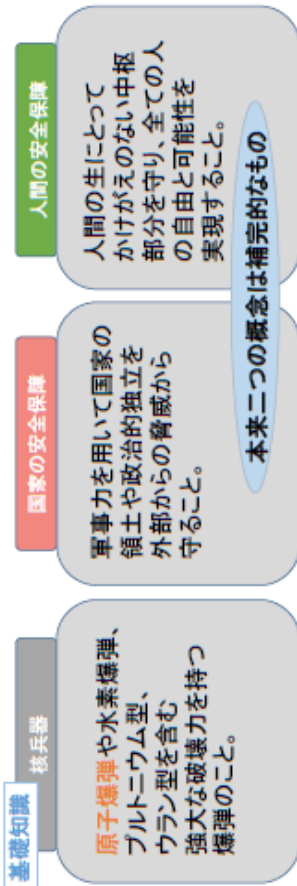
米軍が迫ってきた時

読谷村チビチリガマでの「集団自決」

80人も人が自決した際、「天皇陛下五歳」と叫んで死んでいった

* 日本民族固有の精神
ナニヨナリスズムの中核的要素、
天皇への忠誠として強調された

核兵器をめぐる安全保障の概念的対立 ～核廃絶への展望～



「国家の安全保障」概念から見た核兵器

● 原爆投下が生んだ利益 (アメリカ)

- ・第二次世界大戦終結の迅速化
- ・アジアでのプレゼンスを示す
- ・戦後の国際社会のパワーバランスで優位に立つ

● 核使用による根源的な利益

- ・敵を殲滅することによって脅威をなくす

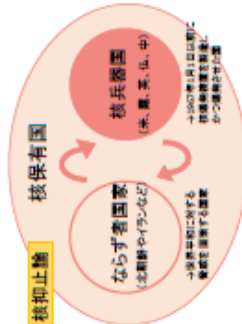
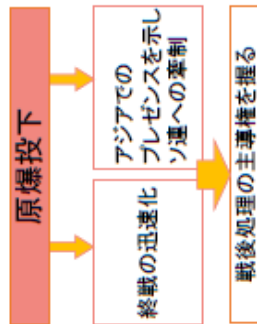
→核兵器の使用は妥当である

● 核の抑止力

- ・核兵器がもたらす絶対的負のイメージが対立国同士を武力衝突から遠ざける
- ・北朝鮮やイランのならず者国家が核開発をしている
- ・核兵器に対抗できる兵器は核兵器しかない
- ・現在の国際社会にも核兵器は必要

→核兵器の保持は妥当である

核兵器は有用である



カリフォルニアグループ 研究テーマ

「核兵器は国際法に反しているか」

● はじめに ●

- ・ 「核兵器」とは
…核分裂や核融合の際に発生するエネルギーを破壊力とする兵器。
…広島・長崎で20万人以上の死者を出した
- ・ 「国際法」とは
…国同士が話し合いで決めた約束
…核兵器を禁止する国際法はない
…米・露・英・仏・中 の核保有国が国際法で認められている (NPT=核拡散防止条約)



● 環境破壊を禁止する国際法に違反する ●

ジュネーヴ諸条約第一追加議定書(1977)

第35条3項

「自然環境に対して広範、長期的かつ深刻な損害を与えることを目的とする又は与えることが予測される戦闘の方法及び手段を用いることは、禁止する。」

第54条2項

「食糧、食糧生産のための農業地域、作物、家畜、飲料水の施設及び供給設備、かんがい設備等文民たる住民の生存に不可欠な物をこれらが生命を維持する手段としての価値を有するが故に文民たる住民又は敵対する紛争当事者に与えないという特定の目的のため、これらの物を攻撃し、破壊し、移動させ又は利用することができないようにすることは、文民を飢餓の状態に置き又は退去させるという動機によるかその他の動機によるかを問わず、禁止する。」



- ・ 放射線による環境破壊
- 上記全般に違反
- ・ 気候崩壊 - 第35条3項に違反
- ・ 農作物破壊 - 第54条2項に違反

伊藤雅也 (2014)「核兵器禁止条約」『核兵器禁止条約』(2014) 10-11頁。東京: 伊藤雅也。URL: http://www.ipsn.or.jp/kyokushin/kyokushin_01.html

プレゼンスキル(英語プレゼン)

■ 概要

12月3日、149校の大学や専門学校が参加して「第5回全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」(神田外語グループ・読売新聞社主催)が開催されました。このコンテスト史上初めて行われたゲスト高校生によるプレゼンテーションに本校 GLP メンバー4名が選ばれ、「日本の防災・減災ノウハウを世界にアピール」をテーマに英語でプレゼンテーションを行いました。

これに先立ち、メンバーは事前にネイティブスピーカーのプレゼンテーションスキルについてのレクチャーを受けました。その中で、ペアになって L と R の発音練習や、ジェスチャー、言葉の強調などの練習をしました。

当日のプレゼンテーションでは、法隆寺五重塔を例に、その特徴的な屋根・塔身・心柱による免震・対震構造について訴え、会場の参加者から大きな拍手が送られました。

◆ 生徒感想

「率直に、とても楽しかったです。場の雰囲気は緊張感たっぷりで、背筋が伸びるような感じもりましたが、広いステージにたった一人で立って、観客の人も含めたその場全体の注意を自分のほうに向けることができるという体験が非常に楽しいと感じました。高校生までの生活であのような改まった大きな場でプレゼンテーションを披露するような体験はなかなかできないことですが、それを体験することがこれから増えていくかもしれないので、早いうちから身をもって経験したということはとても心強いことだと思います。」



E) 英字新聞の取り組み

■ 概要

昨年度は学校全体で英字新聞作成に取り組みましたが、今年度はそれに加えて、GLP独自の英字新聞作成にも取り組みました。フィールドワークの成果や日頃の活動について、情報を整理し、的確に発信することを目指して作成しました。

この英字新聞作成を通して、GLPメンバーは、新聞を作成するときの英語の表現法や、情報を取捨選択する大切さなどを学ぶことができました。

また、ジャパンタイムズと一般社団法人グローバル教育情報センターが主催する第1回「全国中学校・高等学校英字新聞コンテスト」(英字新聞甲子園)では、第1位に相当する「英字新聞賞」を受賞しました(2016年11月27日実施)。「地球規模課題(グローバルイシュー)に対する高校生の視点は新鮮でした。なによりも、自分たちの意見を伝えたいという熱意を感じました」「内容も英語力も一つ抜きん出ていました」「彼らがグローバル・リーダーになり、皆を牽引してもらいたい」等の講評をいただきました。



■ 主なスケジュール

①2016年9月27日(火)

新聞の構成が書かれたダミーシートを配布し、担当する記事ごとに集まり、記事の内容やこれからの制作の見直しを確認しました。例えば、言語技術についてのコラムを担当するグループは、今までに学んだ言語技術を振り返りつつ、コラムの構成案を考えていました。

②2016年10月4日(火)

教員がプレゼンテーションを行い、英字新聞作成上の注意事項や、新聞記事ならではの客観性をもった文章の書き方について説明しました。

次にフィールドワークのグループごとに分かれて英字新聞の編集作業を行いました。生徒自らがフィールドワークや自分たちの研究の内容を英文にまとめました。

③2016年10月9日(金)

英字新聞の見出しの決め方について、教員が説明を行いました。見出しを決めるときは、過去の事柄も現在形で書くなど幾つかの規則があることや、内容を読んで重要な語句を見つけていることが大切であることを伝えました。その後はグループごとにわかれて英字新聞の制作を進めました。

フィールドワークの紀行文を担当する生徒は、主語をどうするか、どの情報が優先順位が高いのか、どこを一番強調したいのかなどに気を付け、一文を短く簡潔に、要点を明確にしようとしていました。主観的にならないよう事実のみ書くことを心がけ、読者に伝わりやすい文を書くようにしていました。

④2016年10月11日(火)

グループごとに、日本語で作成した記事の推敲や、それらを英文に翻訳する作業などを進めました。目標は、10月14日までに英字新聞の記事を、英文、入れる写真、キャプション(写真の説明)も含めて完成させることです。

今回はそれぞれのグループによって行ったことが違います。担当する記事としては「GLPとは何か」、「沖縄・カリフォルニアFW紀行文」、コラム「言語技術」などがあります。

「What Is International Human Rights Law?(国際人権法とは何か)」という解説記事を担当する生徒は、英文への翻訳に苦労していました。英文を翻訳するためには、日本語で作った内容を英語に直訳するだけでなく、出来る限り平易な英語にすることが求められ、自分の言葉に直して指定された語数内で書く必要があります。主語と目的語の関係に気を付けること、なぜその情報を入れるのか等を考え、作成に取り組みせました。

⑤2016年11月4日(金)

Japan timesの方に指摘していただいた箇所を中心に、記事の最終確認を行いました。

また、写真の角度、写真の生徒の目線などを考慮しつつ、GLPメンバー全員の意見を基にして、一面に載せる写真を決定し、一面の見出しについても決定しました。

⑥2017年1月20日(金)

最終稿の英字新聞についてチェックを行いました。

ドラフト版と最終稿を見比べて、内容が本当に自分たちが言いたいものになっているか、丁寧に確認しました。その結果、自分たちの言いたいこと違っている箇所が二箇所ほど見付き、訂正を依頼しました。

■ 完成した英字新聞は、関係資料(P.132)参照

◆ 生徒感想

「この英字新聞は、本当にたくさんの方に支えられながら作成したものであり、賞を頂くこともできて、感謝の思いでいっぱいです。実際に自分が得たこと、衝撃を受けたことを読者に分かりやすく伝えるために大変苦労しました。また、英語で表現することに挑戦する中で、心身共に本当に鍛えられました。でも、自分の夢である報道アナウンサーの仕事に近い体験をすることができて、とても楽しかったです。自分の夢に対する情熱もさらに増しました。これから、自分の体験を学校全体に今まで以上に還元していきたいと思います。」

F) 映像制作の取り組み

■ 目的

GLPの研究成果物として、これまでにGLPで学習した内容を表現する映像を制作しました。1グループ4人の4つのグループで、90秒程度の作品の後、最後の場面で英語でメッセージを提示することが条件「今年度の活動を通して学んだこと」というテーマで映像制作をしました。

■ 日程

①11月15日(火) 映像制作のためのイントロダクション「絵の分析」

絵に登場する人物が抱えている感情や、絵の中の季節や場所、時間帯などの設定を、絵の細部から分析する技術を学び、そして絵から読み取った情報を日本語または英語で説明する練習をしました。絵の説明の際には、大きな情報から小さな情報という順番で、一方向に説明しなければならないことがわかりました。

②11月22日(火) GIGAVISION による講義 2本の映像の分析

映像を感覚で捉えるのではなく細部を観察し論理的に考える力をつけることを目指して、映像鑑賞を行いました。2つの映像を鑑賞し、皆でその映像のテーマを推測し、考えたテーマを共有し合いました。その後、テーマの答え合わせをしました。

まず、「映像①:少女が横断歩道で踊っている映像」では、被写体などパッと見て分かるものから、音楽やカメラのアングルなど細部まで考慮しました。

次に、「映像②:ある男が皆を笑顔にしていくCM映像」では、①と同様に細部まで観察しテーマを推測しました。

最後に、私達が今後 GLP の企画として作成するビデオの作り方として、①テーマを決める、②映像でそれをどう表現するか具体的に案を出していく、③音楽や背景などの細かい部分をどうしていくか沢山アイデアを出すといった順序で作ると良いということを教わりました。

③12月17・18日 映像制作のための集中講義

ストーリーボードを作成し、GIGAVISION さんからアドバイスをもらい、13日の映像完成までの撮影の手順を確認した。

④1月10日(火) グループ内最終打ち合わせ

⑤1月13日(金) 各グループで撮影した映像の素材をギガビジョンに提出

⑥1月24日(火) GLP 内映像制作発表会

GLP で学んだことをテーマに制作した4つグループの作品を順番に見ていき、それぞれが最も伝えたいメッセージが何なのかを話し合いました。各チーム、メッセージを伝えるための表現方法に様々な工夫がこらされており、様々な意見が飛び交いました。

⑦1月27日(金) インドの Mahindra World High School の高校生と、Skype にて映像に対して意見交換

◆ 生徒感想

「私は今まで、映像を感覚で捉えていたので、今回の授業は映像を論理的に映像を見るためにとっても参考になりました。たとえば、1つの短い CM をとって、感覚的に見た時の映像だけでなく、音楽、起用する人物、背景など沢山の部分が工夫されていることがわかり、見る側もそれを意識しながら作った側の意図を汲み取れるようになれば、アピールされている商品の長が、何も意識せずに CM を見ているときよりわかるので良いなと感じました。私達 GLP メンバーはこれから映像制作に入っていくのですが、その際、今回教わった映像の作り方や、映像を通して私達が伝えたいこ

とを映像に込める方法を十分に活かしていけたら良いと思います。」

「私は、各グループの制作した映像を見て、世界の核問題の状況を自分たちの生活に身近な状況に置き換えて、伝えやすくするなど、それぞれが全く違った方法でGLPで学んだことを表現していたので、多くの視点や考えがあるということに改めて気づくことができました。そして私はできるだけ多くの視点から物事を考えたり判断する力をつけたいと思いました。そのためには、常に、自分のことだけで考えるのではなく、周りの人の気持ちなども考慮していかなければならないと思うので、それを可能にする想像力を鍛えていきたいと思います。」

- 完成した4つの作品は本校ホームページ・SGH特設サイトに、Youtubeへのリンクが掲載されています。

<http://www.tokyo.soka.ed.jp/senior/sgh2016/index.html>

G) 評価と分析

GLPの活動の評価方法として、プログラム終了後に、本校の考えるグローバル人材の資質・能力の個別能力の成長を自己評価および他人に評価させた。本校のSGH構想調書において定義された「グローバル人材」の要件をもとに、以下のような資質と能力を具体的に取り上げ、これをGLPの生徒に自己評価させた。この自己評価表については、以下の手順で進められた。

- 1、自分がこの1年間で向上したと考えられる能力に◎を、まあまあ伸びた物に○を、あまり伸びなかったものに△をつけること。どちらでもないものはそのまま無記入とすること。
- 2、但し、記入した場合は、その根拠となる具体的な例を記入すること（GLPの活動に関わらなくてもよい）。
- 3、終了後に映像制作を行ったグループに分かれて、他のメンバーが見た評価を別の色のペンで記入すること

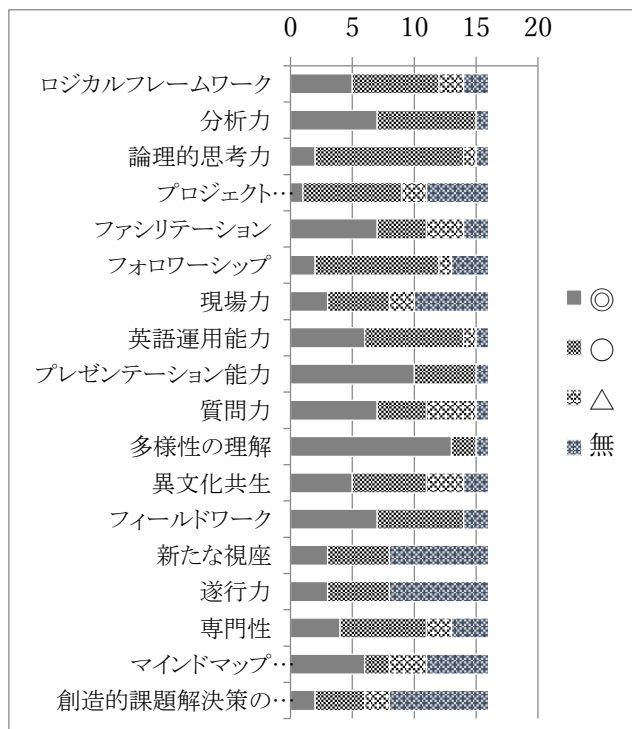
	項目	分野		項目	分野	
世界市民の能力	問題解決能力	ロジカルフレームワーク	世界市民の資質	多面的・多角的な視点と寛容の精神	多様性の理解	
		分析力			異文化共生	
		論理的思考力			フィールドワーク	
	協働的能力	プロジェクトマネジメント			新たな視座	
		ファシリテーション		遂行力		
		フォロワーシップ		専門性		
	対話力・コミュニケーション能力	現場力		教養と理解		マインドマップ・設計のプロセス
		英語運用能力				創造的課題解決策の考察と実践
		プレゼンテーション能力				
		質問力				

獲得させたいグローバル人材の資質・能力一覧

この評価の分析により、GLP生徒たちが「分析力」と「論理的思考」に対して向上したと考
 えている事がわかった。また、資質においては「多様性の理解」につながったことは、フィールド
 ワークの実施や映像制作による視点の変化などによるものが大きいことが、感想からも見て取
 ることができた。英語運用能力が向上したと実感したことや、リサーチスキルの中心となったマ
 インドマップに向上が多く見られたことは成果
 として大きい。

一方で、質問力や異文化理解で△が
 多いことは、積極性に欠けている本校生徒
 の性質を表しているものと考えられる。同時
 に外国人と英語で質疑応答する場面が多
 かったことも、コメントから見て取ることができ
 た。

さらに、「新たな視座」や「創造的課題解
 決力」といった、発展的な力に対して無印が
 多かったことは、生徒にそのような資質を問
 われる場面の設定が少なかったことを示して
 いると考えられる。同じく「遂行力」と「現場
 力」に無印が多かった事は、自分たちで自
 由に決められる場面が少なかったことの表れ
 であると推察する。今後のプログラムの開発
 に活かしていく点である。



分析結果 (◎、○、△、無の個数)

4. 言語技術

A) 概要と目的

「言語技術」とは、言葉を有効に使いこなすための技術のことです。言い換えれば、「話す・聞く・書く・読む・思考する」活動を有効に行うための技術とも言えます。世界の多くの国々では、国語教育(母語教育)として「言語技術」が教えられており、分かりやすく自分の考えを他者へ伝える方法、論理的に物事を思考する方法を、具体的なスキルとしてトレーニングしています。つまり、世界には発想・表現方法に共通的基盤があり、議論や交渉などは、それらに基づいて行われています。「言語技術」における具体的な技術の例は以下のようなものです。

- ・質問する
- ・意見を言う
- ・議論をする
- ・交渉する
- ・記録する
- ・意見文を書く
- ・論文を書く
- ・要約する
- ・説明する
- ・物語る
- ・報告する
- ・分析する
- ・アピールする
- ・論理的に思考する
- ・多面的に思考する
- ・批判的に思考する

本校ではグローバル人材像の資質を、「地球規模課題(Global Challenges)の解決に貢献する能力」と規定しています。「言語技術」を磨くことで、この能力の基盤となるコミュニケーション能力や論理的・批判的思考力を鍛えていきます。また、母国語による思考力の向上が、生徒一人ひとりの学習理解を促進し、実社会・実生活の営みも、より充実したものにしてくれるはずです。さらに、各言語に共通するものとしての「言語技術」の獲得は、外国語習得の効率化、及びその運用能力の向上をもたらします。

海外へ行かずに日本にしようとも、グローバル化の波は押し寄せてきています。多様性を尊重し、他者と協働しながら、問題を解決に導いていく過程において、言語の力はいやまして重要です。「言語技術」の授業を通し、グローバル人材となりゆくための資質・能力の育成を目指していきます。

B) 学習・トレーニング内容

本年度は1年生のみの実施でした。大きく3つの領域を学習・トレーニングしました。教材は、つくば言語技術教育研究所発行の「言語技術のレッスン」を使用しました。

①対話の技術のトレーニング

(1)「問答ゲーム」

「問答ゲーム」は対話の技術のトレーニングの最も基本となるものです。2人1組となり、簡単な質問と応答をゲーム形式で繰り返します。「好きか嫌いか」という簡単な質問から始まり、最後は「賛成か反対か」といった高度な質問まで行います。日本語で「問答ゲーム」を行ったら、中学導入レベルの簡単な英語による「問答ゲーム」を行います。1回の授業の中で何度か相手を変えて行います。また、「好き」「賛成」などあらかじめ立場を限定して答えさせることも行い、自分とは逆の立場に立って考えさせることも行います。

- 発言の際は、以下のルールを必ず守って行います。
- ・結論をまず先に述べ、その後に必ず根拠を言う。
- ・発言の最後に結論を繰り返す。
- ・主語・目的語を省略しないで話す。
- ・質問に対して直接的・具体的に答える。
- ・ナンバーリングを用い、内容を整理して話す。

対話の技術のトレーニング

★ 応答の基本形

「私は〇〇が好き(嫌い)です。
 なぜなら、……………だからです。
 だから私は〇〇が好き(嫌い)です。」

※ ナンバーリング

「私は〇〇のほうを選びます。
 理由は2つあります。1つめは…だからです。
 2つめは…だからです。よって私は…」

問答ゲーム

- ・あなたはゲームが好きですか？
- ・あなたは魔法使いになりたいですか？
- ・肉と魚とではあなたはどちらが好きですか？
- ・習うとしたら剣道と空手ではあなたはどちらを選びますか？
- ・授業参観があることにあなたは賛成ですか反対ですか？

1. Do you like mathematics?
2. Do you like chocolates?
3. Which do you like, ramen or soba-noodle?
4. Which do you want, Pokemon or Yo-kai watch?


・Yes, I like (No, I do not like) ... There are TWO reasons why I like ...

・Firstly,... Secondly,... . That's why (So) I like...

質問に対して、理由を2つ述べます。

MONDO-GAME: LIKE OR DISLIKE: NUMBERING

リアクションを忘れずに
Oh my goodness!



Training on dialogue

Response: agree, disagree

“I agree **to** your opinion / **with** you

There are 2 reasons.

Firstly, it is because

Secondly, it is because

That's why I agree **to** your opinion / **with** you.

(2) 説得や交渉

自分が欲しい理由や必要な理由をはっきりさせ、さらに、相手から返ってくるであろう反論を予想し、説得・交渉を試みます。

(3) 「事実」と「意見」の区別

話したり聞いたりするとき、「事実」と「意見」を区別することができれば、中身に振り回されることなく情報を得ることができ、正確な情報を発信できるようになります。まず、短文で「事実」か「意見」か区別するトレーニングを行いました。その後、「事実」と「意見」が混ざった長めの文を区別するトレーニングを行いました。

交渉・説得の実践

- 1、体育着を貸してほしい。
- 2、明日までにこの本を読んでほしい。

《応答の型》

「私は〇〇に〇〇してほしいです。」

なぜなら……だからです。

しかし、あなたは〇〇と思う(言う)かも

しれません。でも……なのです。

だから私は〇〇に〇〇してほしいです」

対話のトレーニング

☆次の1～8は「事実」ですか「意見」ですか？

- 1、バラは美しい。
- 2、今日は暖かい。
- 3、富士山は日本一高い山である。
- 4、富士山は美しい。
- 5、勉強はおもしろい。
- 6、ぶどうは果物だ。
- 7、リンカーンは偉い。
- 8、クリスマスは楽しい。

(4) 5W1Hを用いて応答の曖昧な部分を掘り下げる質問のブレイクダウン

内容の濃い対話のために、相手に情報を伝える時は5W1Hをもとに、落ちている情報がないかどうか常に意識して話を組み立てます。また、相手の話を理解するために5W1Hを軸に、不足している情報がないかどうか常に意識して聴き、質問を分解(ブレイク・ダウン)して聞き返します。

(5) 友人や外国人へのインタビュー

対話の技術のまとめとして、明確な目的のもと、具体的な質問を重ねながら相手の中身を掘り下げていきます。かみ合ったやり取りをするコミュニケーション・スキルも鍛えます。まず、隣の席に座るクラスメートにインタビューを行いました。次に、インターネットを通じて外国人にインタビューを行いました。

具体的な問答のトレーニング

例題1：5W1Hをもとに、不足している情報、不明な情報をチェックしてみましょう。

このあいだ買い物に行ったとき、うっかり置き忘れてきてしまったらしいのですが、不便だから取りに行こうと思っているようです。かわいそうだから一緒に行ってあげようかと思っているのですが、Bさんも行きませんか？

友達にインタビュー

○次に、プレ・インタビューで得た情報を活用して、**インタビューの流れ**を考えましょう。**7分間**の時間を取ります。

★どの内容についてなら掘り下げられそうか。

★最初の質問はどのような質問にすべきか。

★どのような返答が予想され、そこからどのように話を掘り下げるか。



② 作文の技術のトレーニング

(1) パラグラフという概念を知る

パラグラフと、日本でいうところの「段落」との違いに着目させ、パラグラフの構成要素を学びます。社会に出て求められる意見文や報告文の文章は、パラグラフ形式で書かれた文章であることを教えます。また、英語をはじめ欧米の言語は、基本的に文章をパラグラフで書くことが決まっており、外国語の文章を読み書きする時にとっても重要になることを伝えます。

● パラグラフの構成要素と作り方

・トピック・センテンス(TS)

→主張・話題を述べます。基本的に第1文目に置かれます。

・サポーティング・センテンス(SS)

→TSに対し根拠・例示などを付け加える複数の文です。

・コンクルーディング・センテンス(CS)

→再主張して締めくくる文です。基本はTSを繰り返します。

・TS、SS、CSを改行せずにひとつなぎで書く(=パラグラフ)

→対話の技術のルールに従った応答を、ひとつなぎで書けばパラグラフになります。

(2)トピック・センテンスの構成要素とその作り方を学ぶ

トピック・センテンスの2つの構成要素を知り、より良いトピック・センテンスを作る練習をします。トピック・センテンスを読んだときに、読み手が、その続きのサポーター・センテンスに興味を持ち、「おおよそこんな内容なのだろうか?」「このトピック・センテンスを支えるのはどのような内容なのだろうか?」「この続きを読みたい!」と考えるような文を作ります。逆に、単なる事実を示す文や、具体的に詳細を語りすぎる文は良いトピック・センテンスとは言えません。

●トピック・センテンスの構成要素

・トピック(話題)

・コントローリング・アイデア(話題を制御し、パラグラフの方向を決定する内容)

→トピック・センテンスの有効性は、コントローリング・アイデアの良し悪しに左右される。

(3)サポーター・センテンスの作り方を学ぶ

トピック・センテンスの内容が説得力を持つよう、定義・説明・事例・根拠などを記述してトピック・センテンスを支えます。トピック・センテンスの内容から絶対に逸脱しないようにしなければなりません。

(4)コンクルーディング・センテンスの作り方を学ぶ

トピック・センテンスの内容を再確認させるため、まとめ・警告・予言・話題に対する意見を記述して再主張します。基本的には、トピック・センテンスの文言の繰り返しです。

(5)実際にパラグラフ形式で文章を作成する

上記の(1)~(4)をしっかり意識し、守りながら、文章を書きます。授業で行った作文の課題テーマは以下の通りです。

- ・旅行に行くとしたら海と山とどちらを選ぶか
- ・学校で毎日朝読書をすることに賛成か反対か
- ・自分が通っていた中学校の特色を紹介する(例を3つ挙げて)
- ・1学期にトレーニングした言語技術の内容を紹介する
- ・「隣の人の意外な一面」というインタビュー記事を作成する



例示↓意見の流れを意識してよく書けています。

私の通っていた中学校は勉強環境が整っている学校です。まず、図書館にとってもたくさんの蔵書があり、そこで生徒が勉強することもできます。①ここにはない本も小学校や高校があれば借りることが可能です。また英語の授業ではiPadを使用し、ネイティブの外国人と会話するプログラムがあります。さらに教室の黒板は電子黒板が導入されています。②③それによって、授業中に先生が説明しながら動画を見て理解することや疑問に思ったことをすぐに調べることもできます。④このように、中学校は生徒が勉強に励めるような工夫がたくさん行われています。

一年三組

TS

私が一学期にトレーニングした言語技術の内容は大きく分けて、話すこと、書くこと、学習でした。話すことにおいてのトレーニングでは、実際に隣の席の友達と様々な点に気を付けてから話しました。私は、主語や述語をいれ、相手に話の内容がわかり伝わるように自分の頭の中で考えてから話すことを心がけました。また、相手が話した内容に対する質問について考えるようにしました。そのうえで友達との話を深めていくことができた。二つ目の書くことでは、授業中に与えられたテーマにそって作文を書きました。作文を書く上で、文章の構成を学びました。トピックセンテンス、サボイテイングセンテンス、コンタクトセンテンスの三つでした。このように私は一学期の言語技術の授業と様々な知識を学ぶことができた。

ハラグラフ①

大変よく書いています。ふふは、上手く接続詞を用いています。素晴らしいです。

コタロ ケー10 20X20

CS

TS

主語

物が一番好きであるという事です。これは、全科目の中で一番好きで、小学生の頃から様々な図鑑を読み、中学の頃に生物を学んできたことになりました。また、中学校二年生の頃から生物について学ぶ機会が増えて、より好きになりました。自然の成り立ちを知ることや、生物の授業でいろいろな生物の成り立ちを知ることや、自然の成り立ちを学べることで、彼は、この二つを学ぶことが一番発見が楽しくて、生物を好きになりました。最後に、彼は高校に入ってから生物を好きになるだけで、彼は、テストに向けて努力していることを教えてくれました。テスト前、生物のワークを三回は解きました。何度も繰り返して取り組むことにより、自分のわからないうところを見つけて、その解決に努めることができました。このように、私は、好きな教科の生物を勉強しています。

↓ 惜しい、意外な一面が、おまけに、テーマです。

ハラグラフ②

一文が短く、読みやすい文章になっています。その中の情報モラリングも使って整理できると、とても良くなります。

コタロ ケー10 20X20

③情報伝達の技術のトレーニング

(1) 情報を共通項でくくり、ラベル(見出し)を貼る

同じ内容を持つ情報は共通項でくくり、整理分類をして提示するようにします。(=ラベリング) そうすると説明は格段に分かりやすくなります。また、共通項でくくった情報にラベル(見出

し)を貼って先に示します。「この部分は何についての情報なのか」を先に明らかにしてから説明すると、聞き手はより理解しやすくなります。

「キャンプに持って行く持ち物を分かりやすく説明する」という例題を取り上げます。キャンプに持って行く持ち物を、ただ羅列して挙げるだけでは、聞き手は理解するのに手こずります。そこで、共通の性質を持つもの同士でカテゴリー化し、そのカテゴリーに見出しを付けます。今回の例題では、以下に示すように、「衣服」と「洗面道具」というカテゴリーに分けられます。

<h3>○キャンプの持ち物</h3> 	<h3>○キャンプの持ち物の説明</h3> <p>今度のキャンプの持ち物は、まず厚手の長ズボンとタオルを持ってきてください。Tシャツと靴下も必要です。トレーナーは2枚持ってきてください。やはり、Tシャツはもう1枚持ってきてください。ジャージのズボンをお願いします。歯ブラシと歯磨き粉も持ってきてください。</p>
<h3>○情報を共通項でくくり、ラベルを貼る</h3>  <p>衣類</p> <p>洗面道具</p>	<h3>○情報を共通項でくくり ラベルを貼る</h3> <p>今度のキャンプの持ち物は、衣類として、厚手の長ズボン1本、Tシャツ2枚、靴下1足、トレーナー2枚、ジャージのズボン1本を持ってきてください。また、洗面道具としてタオルと歯磨きセットを持ってきてください。</p>

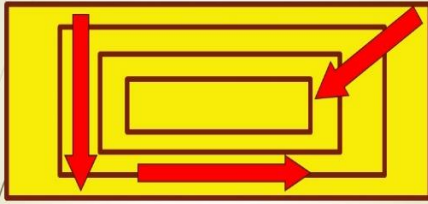
(2)空間的配列の秩序を守る

空間的配列の秩序とは、簡単に言うと一方向で説明をするということです。例えば、「上から下、あるいは下から上」「右から左、あるいは左から右」「手前から奥、あるいは奥から手前」「外から内、あるいは内から外」というように説明するということです。聞き手(読み手)の視点が行ったり来たりしないようにします。一方向の方が、覚えやすく理解しやすいのです。

先ほどの「キャンプに持って行く持ち物を分かりやすく説明する」の例題においては、ラベリングをした後、各持ち物を挙げる順番をよく考えます。そうすると、衣服に関しては、上半身の服、下半身の服、足に履く物の順番に挙げて、上から下へ1方向で説明するのが適切です。また、同じ枚数どうしの物でまとめると、説明はより分かりやすくなります。

○空間的配列の秩序

→ 一方向で説明をすること



- ①上から下、下から上
- ②右から左、左から右
- ③外から内、内から外

○空間的配列の秩序

今度のキャンプの持ち物は、衣類として、トレーナーとTシャツ(上)を2枚ずつ、厚手の長ズボンとジャージのズボン(中)を1本ずつ靴下(下)を1足持ってきてください。また、洗面道具としてタオルと歯磨きセットを持ってきてください。

(3) 時間的配列の秩序を守る

時間的配列の秩序とは、時間の経過に従い、時間の早いことから順を追って説明していくことです。物の作り方や実験の手順などを説明・報告する時には、時間が逆行しないように、この時間的配列の秩序を守ります。また、聞き手(読み手)が分かりやすいように、順序を表現する副詞(まず、最初に、はじめに、次に、それから、その後、最後に、終わりに等)を有効に使うようにします。

例えば、「ピザトーストの作り方を説明する」という課題では、作業過程が止まったり、時間が逆行したりしないように、使用する道具や食材を先に言います。それから、下ごしらえをする必要のあるものがあれば、それも先に説明しておき、その後に実際の調理過程を説明していきます。

「説明の技術」のトレーニング

まず具を適当に切るのよ。それでパンにソースを塗ったら、具をのせて、チーズものせて、焼いて終わりよ。 秀美

課題: 秀美さんのおやつ作り方の説明で分からないところは何ですか? 分からないところを質問の形で書き出してみましょう。

説明の技術のトレーニング

★物の作り方の説明手順(時間的配列)

- ①自分が何について説明をするか
- ②必要な道具
- ③必要な材料
- ④下ごしらえ
- ⑤作り方



(4) 概要の説明から詳細の説明へ

相手に情報の全体像(見通し)を与えてから、部分の詳しい説明をします。道案内をするときや、探している物の外観を相手に伝える時など、最初に概要を伝えてから、詳細な部分を伝えます。最初に全体像や見通しが与えられると、情報の受け手は情報の内容をイメージ(理解)しやすくなります。

<h3 style="color: green;">説明の技術のトレーニング</h3> <p>「道案内」</p> <p>課題1:「道案内」における「概要(全体・見通し)」の情報は何でしょうか。</p> <p>課題2: 「道案内」で押さえるべき「詳細(部分)」を考えましょう。</p> <p>課題3: A駅からS大学までの道案内を文章にしてみましょう。</p>	<h3 style="color: green;">説明の技術のトレーニング</h3> <p>「道案内」</p> <p>課題1:「道案内」における「概要(全体・見通し)」の情報 ○出発地点から目的地までの距離 ○交通手段とおおよその所要時間 ○方角</p> <p>課題2: 駅からの道案内で押さえるべき「詳細(部分)」 1、駅の出口 2、通りの名前(名前がついている場合) 3、目印となる建物(通りのどちら側か) 4、交差点(角の建物) 5、進む方向、曲がる方向 6、信号 7、川や橋</p>
--	--

「説明の技術」のトレーニング NO. 5


1年 | 組

課題1 全体の情報
距離、時間、方角
① スタート地点から目的地までの距離 ② スタート地点から目的地までかかる時間(どの交通手段で)
③ スタート地点から目的地までの方角

課題2 詳細な情報
① 曲がる回数 ・スタートから目的地までの道のりにどんな建物があるか、道の形状(Y字路とか)があるもの
② 目的地の近くに ④ 区切りの時間、距離(目印となる建物までかかる時間、距離)
③ 目印となる建物 ⑤ 道の形状(交差点) ⑥ 道の名前(ある場合) ⑦ 距離
課題3 ⑧ 信号 ⑨ 川・橋 ⑩ 駅の出口

私はこれから、山手線A駅からS大学までの道案内をします。山手線A駅からS大学までは約1500mの距離があり、徒歩で約20分かかります。S大学は、山手線A駅の北側にあります。まず、山手線A駅の西口に出ます。すると、横断歩道が右手側と左手側にあるので、左手側の横断歩道を渡ります。次に、西口デパートの右側にある自水通りを、交番まで直進します。西口デパートから交番まではおおよそ1000mで徒歩約10分です。交番に着くまでに、自水堂とホテルが右側に見えます。交番に着いたら、左に曲がり直進すると、S大学が左側にあります。交番からS大学まではおおよそ500mで徒歩約5分です。S大学の近くに、レストランリンデンバウムが右側にあります。これで、山手線A駅からS大学までの道案内を終わります。

○今日の授業で学んだ「説明の技術」
★ 概要から詳細へ(全体から部分へ)
→ 相手に情報の全体像(見通し)を与えてから、部分の詳しい説明をすること。
★ 最初に全体像や見通しが与えられると、情報の受け手は情報の内容をイメージしやすくなる。



C) 評価

①対話の技術の評価

生徒を2人1組にし、口頭試験を全員に実施しました。

所要時間：7分以内（オーバーしたら減点）

課題：1人が質問して、もう1人が応答する「問答ゲーム」を交互に1回ずつ

1人が質問して、もう1人が応答し、その応答の内容に関して、もう1度質問をして応答する「問答ゲーム」を交互に1回ずつ

質問文：当日、カードの中から引く

カードを見てからのシンキングタイム：15秒

基準は以下に示す「技術点」と「構成点」に分け、4段階で評価しました。先に示した発言のルールのうち、「①主語・目的語を入れて文で話す②結論を先に言う③理由を必ずつける④結論を最後に繰り返して言う」を「対話の技術の4項目」として重点化しました。

基準を事前に生徒に示し、その基準に従って、教員が評価をしました。

評価	技術点 Technical Element Score (TES)	構成点 Program Component Score (PCS)
S	対話の技術4項目ができています 5W1Hの質問ができています 相手の目を見ています	5W1Hの質問に答えている 理由が簡潔に答えられている 理由に対する質問ができています テンポよく質疑応答できています
A	対話の技術4項目ができています 5W1Hの質問ができています 相手の目を見て <u>いない</u>	5W1Hの質問に答えている 理由に対する質問ができています すこし間が空いてしまう
B	対話の技術4項目のうち1項目が欠けている 5W1Hの質問ができています 相手の目を見て <u>いない</u>	5W1Hの質問に答えている 理由に関係なく質問ができています すこし間が空いてしまう
C	対話の技術4項目のうち2項目以上欠けている なにかしら質問ができています 相手の目を見て <u>いない</u>	質問に答えていない 理由が簡潔でない しばらく間が空いてしまう

②作文の技術の評価

作文の技術においては、先に示したとおり、

- ・「旅行に行くとしたら海と山とどちらを選ぶか」
- ・「学校で毎日朝読書をすることに賛成か反対か」
- ・「自分が通っていた中学校の特色」を紹介する(例を3つ挙げて)

- ・「1学期にトレーニングした言語技術の内容」を紹介する
 - ・『隣の人の意外な一面』というインタビュー記事」を作成する
- とのテーマで生徒に作文を書かせました。それらの作文は、教員が一人ひとり添削・コメントをし、フィードバックしました。以下に各作文の評価基準を示します。

課題	評価		
	A	B	C
作文1 「海山」/「読書」	①一マスあける。 ②改行してない。 ③TS/SS/CSがある。 ④山と海とを選ぶなら。 ⑤型がちゃんとできている。	①一つ目と二つ目が同じ理由。 ②「読書」は理由一つ。	①一問しか書けてない。 ②理由ひとつしかない。 ③TS/SS/CSいずれかが欠ける。
作文2「通っていた中学の特色」	①TS/SS/CSがある。 ②理由を三つ挙げられている。 ③三つの理由が重複していない。 ④一マスあける。 ⑤改行してない。 ⑥主語の有無。 ⑦適切なTSを設定できている。	①三つの例が挙げられている。 ②内容は適切だが、途中で改行している。 ③適切なTSを設定できていない。(抽象的) ④TSとCSの内容が完全に一致しない。	①二つ以下の例 ②パラグラフの要素のいずれかを欠く。

課題	評価	S	A	B	C	D
1学期にトレーニングした言語技術の内容	全体	内容:◎ 形式:○	内容:○ 形式:○	内容:△ 形式:○	内容:不問 形式:×	内容:× 形式:不問
	形式	構造化されたパラグラフ。接続詞・ナンバリングを適切に用いている。	パラグラフ形式が出来ている。接続詞・ナンバリングを適切に用いている。	パラグラフ形式が出来ている。接続詞・ナンバリングを用いようとしている。	パラグラフに不備あり	
	内容	対話の技術・作文の技術にどちらに言及し、大きな概念と小さな概念を構造化して書いている。	対話の技術・作文の技術の両方がある。構造化されていないが、話す技術・書く技術について1つずつ具体例を挙げている。	対話の技術・作文の技術どちらか一個しか挙げられていない。または例示のみにとどまり、内容がない。情報の並べ方が作文→対話→作文となっている。		課題に答えていない。トレーニング内容ではなく、自分の感想を書いている。
	付帯事項 (2段階落ち)	課題とずれているTS	パラグラフに不備			

③説明の技術の評価

説明の技術においては、

- ・「キャンプの持ち物」を分かりやすい説明に書き換える。(空間的配列)
- ・イラストを見て2泊3日の旅行の持ち物を説明する。(空間的配列)
- ・ピザトーストの作り方を説明する。(時間的配列)
- ・糸電話の作り方を説明する。(時間的配列)
- ・駅から目的地までの道案内をする。(概要から詳細)
- ・新しく変えた教室の机の配置を説明する。(概要から詳細)

を課題としてトレーニングしました。どのような説明が分かりやすいか、教わった説明の技術をもとに、ペアもしくはグループで話し合います。そこで確認・決定したことを各個人で文章にまとめさせました。

「糸電話の作り方を説明する」の授業の流れを以下に示します。

1

説明の技術のトレーニング

今日の授業は、「ある物」の作り方について、その説明の文章を書いてもらいます。

手順① 4人1グループとなり、その作り方について、よりよい説明をみんなで考えます。(15分)

※ これまで学んだ説明の技術をしっかり活かすこと。

手順② 個人に分かれ、それぞれで説明の文章を書く。(15分)

※ ここでは周りの人と相談はできません。

2

説明の技術のトレーニング

話し合い始める前に、**「説明の技術」として学んだことをまず確認しましょう。**

3

★では、まず4人1グループとなります。

①眠ったり、違うことをする人が出ないように声をかけあう。

②発言する際は、結論を先に言い、理由を必ずつける。
→「対話の技術」を意識する

③話し合いの中での発言や、皆で考えたこと・確認したことを、NO. 4のプリントにどんどん書く。疑問等は必ず聞くこと！

※ 文章を書く際は、周囲と相談できません！

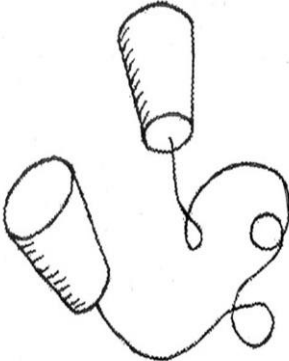
④説明の技術を必ず活用する。
→時間的秩序・空間的秩序・共通項でくる・ラベリング…

★どのグループよりも分かりやすい説明を目指そう！

4

説明してもらった「ある物」とはこれです！

大ききの比率は、スライドに映している通りとします。



実際の大きさは、各班にこれから渡す物を参考にしてください。

5

説明の技術のトレーニング

それではグループの話し合いは終了です。皆の健闘を称え、お互いにお礼を述べてください。

では、各自で説明の文章を書いてもらいます。(15分)

NO. 3のプリント裏の原稿用紙に、1パラグラフで書いてください。この時間で完成させてください。

※ このタイミングで周りの人と相談することは一切できません。

話し合い中は、それぞれの発言を所定のプリントにどんどんメモをさせます。説明しなければならぬ情報は何か、どのような表現をしたらより分かりやすいか、どの順番で説明するのがよいか等を複数的人数で考えさせます。そのプリントは、主体的に話し合いに参加しようとしているか、説明の技術を活かそうとしているか等を評価する材料にしました。

書かせた作文は、作文の技術における評価と同じように、教員で一人ひとり添削・コメントをし、フィードバックしました。以下に生徒の作文例と評価基準を示します。

「説明の技術」グループワーク 20.4

一年大組 XXXXXXXXXX

◎グループで確認をしたら、話し合いの内容を漏れなく書き取り、その後書く作り方の文章に絞って書いていきます。

(糸電話)

① 材料

- 紙コップ 2つ
- 糸 1m
- テープ 適量

② 道具

- きり 1本
- はし 1本


③

1. 紙コップの底の中央(きり)で穴を空ける
2. 糸をはしで1mに切る
3. 糸の一端を紙コップの底の穴に外から通す
4. もう一つの紙コップの底の穴にも糸の端(糸の端)を内側から通す
5. 糸の両端が糸コップの底に通ると、糸を糸コップの外側同士に通す
6. 糸コップの内側から糸をテープで固定する

3

糸コップの底の穴(糸の端)を内側から通す

糸コップの底の穴(糸の端)を外側から通す



D) 1年間の総括、及びその成果と今後の課題

■ 総括

最初に、「言語技術」の授業を1年間行ってきての総括を述べさせていただきます。

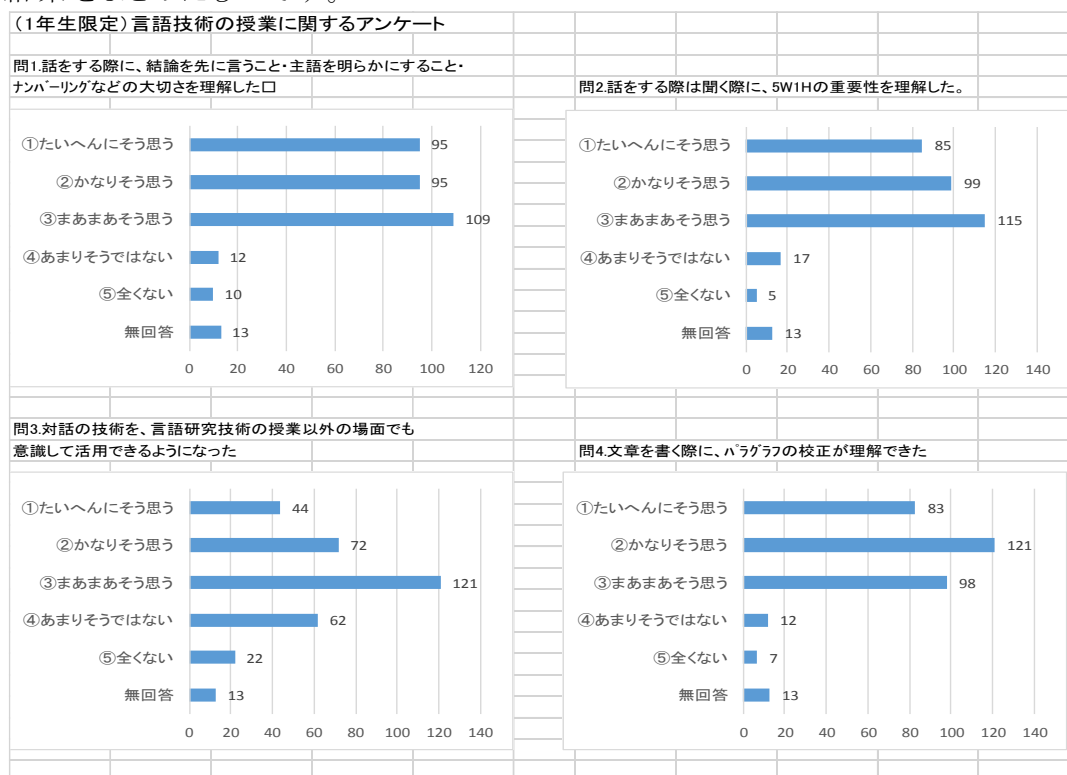
1つめは、資質・能力、特に「何ができるか」という点を高めるためには、基本の徹底した反復練習が重要であるということです。「言語技術」はスキルですので、運動と同じで何度も繰り返し練習をすればするほど向上します。生徒たちのスキルが日を追って伸びてくるのを実感しました。これは他の教科においても言えることだと思います。高校においては学習すべき内容が多い分、学習の進行も速く、次々と新しい内容に移っていきます。ゆえに、身につけるべきこと・能力を定着させるための反復トレーニングはなかなか実施できていないケースが多いのではないかと思います。

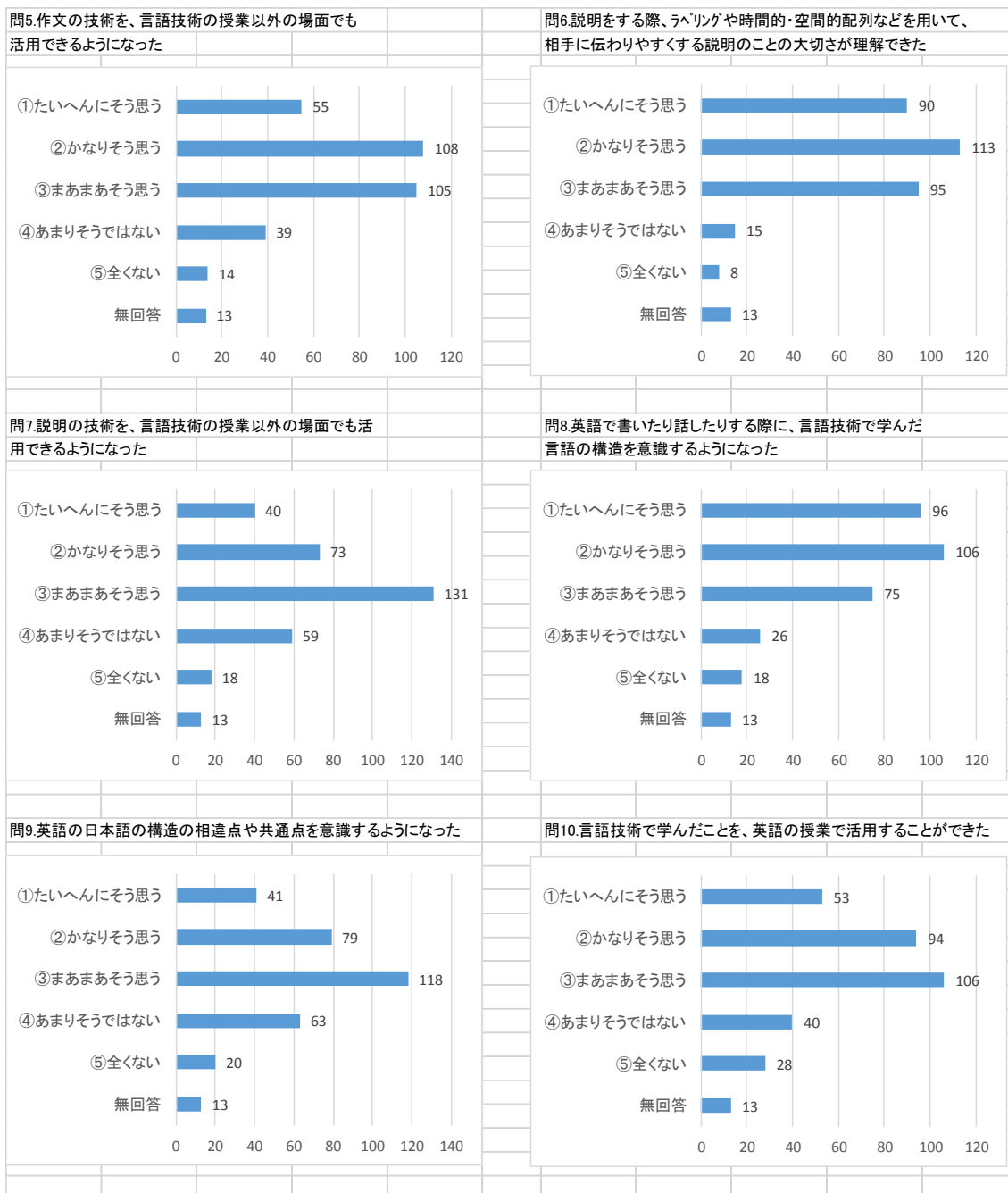
2つめは、言語能力の育成には、ストラクチャー(型・構造)をまず教えることが効果的であるということです。ストラクチャーを理解し、身につけた生徒たちは、抵抗なく話すようになりまし、文章も勢いよく書きます。思考や表現においては、基本となる型を身につけた後に、創造性や独創性も生まれるように思います。

3つめは、対話の技術をトレーニングしてから、書く技術のトレーニングに移る方が効果的であるということです。いきなり書くという作業になると、手が止まり固まってしまう生徒も多くいます。相手がいる即時的な対話の中で、結論一理由という論理的思考のトレーニングを繰り返していった方が、書くトレーニングの時よりも思考の整理の仕方が早く身につきます。また、対話の中で相手にうまく伝わらない場面になった時、不足の情報を自ら補うようになります。こうした他者の存在が、言語能力の獲得に寄与しているということを強く実感しています。

■ 成果

学年末の2月に、1年生全員を対象に、「言語技術」に関するアンケートをとりました。以下がその結果をまとめたものです。





対話・作文・説明の各技術の重要性・有効性を感じたかという質問に対して、60%前後の生徒が「大変そう思う」「かなりそう思う」と回答しています。「まあまあそう思う」という回答まで含めると、全体の95%を占めるほどでした。多くの生徒が、「言語技術」の重要性・有効性を実感したようです。

また、同じアンケートにおいて、日本語と英語の構造における相違点や共通点を意識するようになったと回答した生徒は75%おり、日本語で学んだ「言語技術」を英語の授業で活用できたと回答した生徒は79%いました。英語の学習・習得にも「言語技術」の授業が寄与していることが分かります。

2016年度から算出されるようになった英検のCSEスコアにおいて、第1回から第3回まで通しての Writing のスコアを見てみると、2級では1年生 506.80、2年生 500.02、3年生

499.86、準1級では1年生 562.31、2年生 548.35、3年生 549.32 と、どちらも1年生が高い結果となりました。パラグラフ・ライティングの学習は、本校のカリキュラムでは本来、2年生の英語で行っていますが、「言語技術」の授業で、日本語→英語の順でパラグラフ・ライティングを学んだ1年生の方のスコアが高いことから、「言語技術」教育の1つの成果と考えられます。

各教科の授業やクラスでの話し合いの場面では、生徒たちが結論・理由の順番で発言し、ナンバーリングを用いるようになりました。その結果、議論の進行がスムーズになり、議論の中身も今までより濃いものになっていると、1学年担当の教員全員が感想を寄せてくれています。

英会話の授業や英作文の課題において、これまでの生徒たちに比べ、とても積極的に話し、書いていると外国人講師が語っていました。これは、発言する際や文章を書く際の「型」を学んだ結果であると考えられます。

■ 今後の課題および改善点

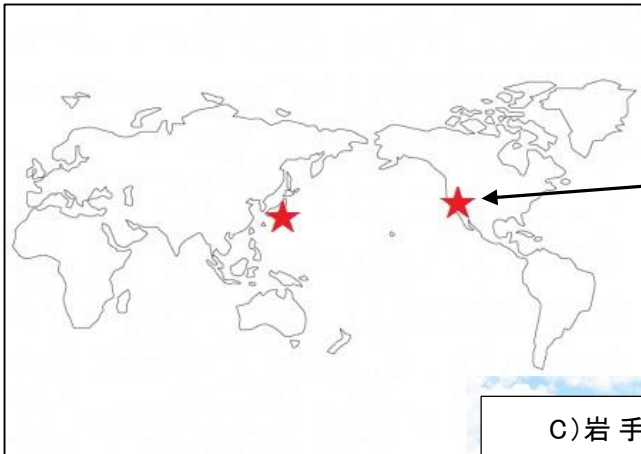
今年度はゼロからのカリキュラム作成で、試行錯誤をしながらの実施でした。特に、英語による「言語技術」のトレーニングをどのように織り交ぜていくかに苦心しました。今年度の反省をもとに、よりよいカリキュラム作りをしてまいります。また、次年度は取り扱う内容を精選し、授業を進める速さも少し上げるようにしようと思います。そして、生徒たちが1年間通して飽きないように、授業内課題の難易度を少し難しめに設定しようと思います。

2月のアンケートでは、95%の生徒が「言語技術」の重要性・有効性を実感しているものの、「言語技術」を他の場面で活用できるようになったかという質問に対して、「そう思う」と回答した生徒が、対話の技術で74%、作文の技術で84%、説明の技術で76%と、割合が少し下がっています。「言語技術」の授業内だけで活用できる力を向上させるには限界があるので、他の教科と連携し、学校全体としても、「言語技術」を活用する場面を増やしていく努力が必要だと感じています。そのためにも、全教員に対する「言語技術」の研修会の実施を計画していきたいと考えています。

1年生約350人の生徒に書かせた作文の添削を、正教員1名と非常勤講師2名の体制で行ったが、かなりの負担でした。大学院生、もしくは学部生のTAを配置し、さらにきめ細やかな文章指導を行っていけるような体制を整えていきたいと思っています。合わせて、今年度作成した評価のためのルーブリックや、自己・相互による評価方法の改訂・開発もさらに推進してまいります。

5. フィールドワーク

A) 1年間でやってきたところ

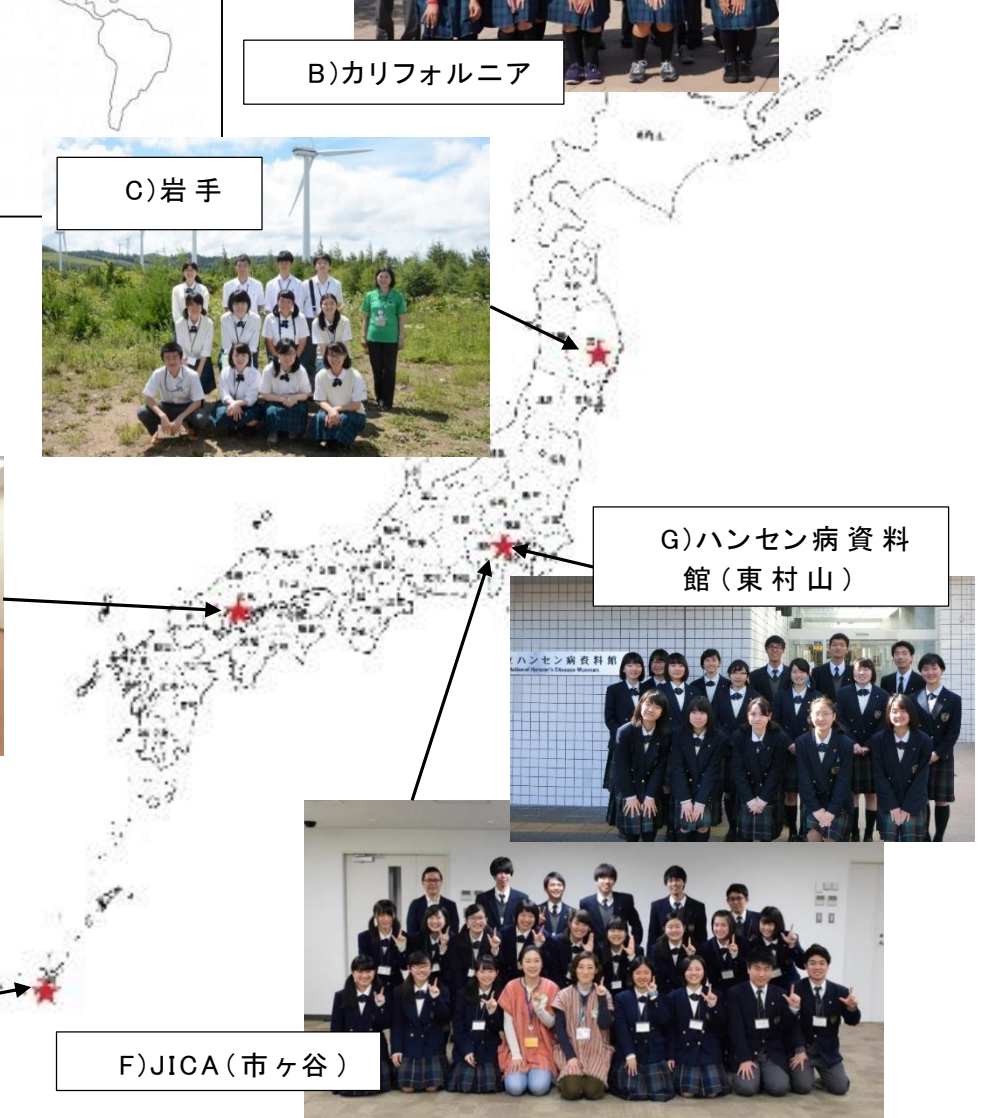


B)カリフォルニア

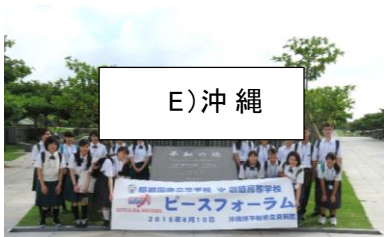


C)岩手

D)広島



G)ハンセン病資料館(東村山)



E)沖縄

F)JICA(市ヶ谷)



B) カリフォルニア

■ 期間：8月 20 日（土）～8月 27 日

■ 場所：アメリカ・カリフォルニア州

■ 主な訪問地：カリフォルニア大学アーバイン校、アメリカ創価大学、サイモン・ヴィーゼンタール寛容博物館、全米日系人博物館

■ 目的

国際人権法の観点から核問題についての、アメリカ人の高校生・大学生・一流識者との意見交換を行う。

■ 事前学習

創価大学飯田順三法学部教授をお招きし、国際人権法の基礎について学ぶ連続講座を実施。

2016.5.13 ①「人権とはどういうものか」の意見定義作り

②映像「人権のための連合」の視聴

2016. 6.21 7 つの項目(国際社会、国際連合、国際法、条約、世界人権宣言、権利、人権)の講義。動画「The 30 Articles of Human Rights (英語)」を使用しての、国際人権法全 30 条を英語と和訳の照合。

2017.7.12 飯田教授著『国際法への誘い』の第 18・19 話を「United Nations Human Rights office of the high commissioner」を学習。

● 1日目

雨および混雑のため、離陸が30分遅れたJL62便は、天候の不順もあり、予定時刻より40分程度遅れて到着。さらに入国審査に時間がかかりましたが、全員が無事入国しました。

● 2日目

2日目は、朝からサイモン・ヴィーゼンタール寛容博物館を見学。ボランティアのステイーブさんの案内で、ホロコーストがいかにして「普通の人」の心で生まれ、殺し、殺されるようになってしまうのかを学びました。また、同時に「普通の人」がナチズムの狂気の中で犠牲を払って人を救おうとしたことも学びました。そしてそのいずれにもなりうる可能性が私達の心にあることを教訓としました。

昼食の後、ガイドのトム中込さんが車で UCLA キャンパス内をガイドして下さいました。街自体が大学という光景に圧倒されました。世界の一流の知性が交流する空気を感じることが出来ました。

午後は全米日系人博物館を訪問。日系人がアメリカ社会においてどのように、人種差別の対象となったのかをしっかりと学ぶことが出来ました。ここでも自分たちの心にある「偏見」に気づくことの大切さをガイドさんに語っていただきました。

夕方にカリフォルニア大学アーバイン校に到着しました。



● 3日目

午前中はカリフォルニア大学アーバイン校についてオリエンテーションを受けた後、早速2人のゲストスピーカーによるレクチャーがありました。

文化人類学部の博士課程研究生のミンディ・タウベルグさんより、アメリカにおけるユダヤ人とムスリムの問題についての講義がありました。非常に高度で難解な内容の社会問題でしたが、生徒の理解と反応に合わせて、単語レベルまで丁寧に解説をしてくれました。よく理解できた生徒は自信をもち、あまり理解できなかった生徒も、タウベルグさんの情熱を感じて、より深く勉強しようという決意をしました。また私自身、教育者としても大変に勉強になりました。

続けてオレンジ・カウンティのグループ間問題交渉のためのNPOである、OCヒューマン・リレーションズの紛争仲介人ペコ・ゴミス氏が、オレンジ・カウンティ内におけるグループ間や個人間における紛争解決の際について講義がありました。紛争解決人には忍耐強く聞く姿勢をもつことと、高いコミュニケーション能力が必要であるとお話を頂きました。またアフリカ出身のゴミス氏は9カ国語を操ることができ、語学ができることで交渉の際により良い人間関係を作る利点にも繋がるというお話でした。

午後は、4日間お世話になるコンバセーション・パートナーと4つのグループに分かれてUCIの巨大なキャンパスを散策しました。ゲームなどを通じ、会話をする中で、終了する頃には自信を持って英語を使用する姿に、感心しました。

夕方には図書館や自習室など大学の施設を利用しながら、明後日のプレゼンテーションの準備を進めていました。一流大学の図書館と自習室の雰囲気圧倒され、本物の学びの雰囲気を感じることが出来ました。

◆ 3日目 生徒感想

「はじめのオリエンテーション、またユダヤ人のムスリムの話についてのレクチャーは、きちんと聞き取って理解することもできましたし、質問もできました。英語力という点でまず安心できるやりとりができてよかったです。ユダヤ人とムスリムに関して、そんなにもアメリカでヘイトがあったのだということ知らなくて、とにかく驚きましたし、残念でした。質問でも言ったように、怖いことを考えるような人はごく一部ののに、偏見は恐ろしいと思います。その後のレクチャーは、突然の話題の始まりや英語の訛りなどあって、正直半分くらいしか聞き取れませんでした。話す人によってまだまだこのようなことがある状

況なので、もっと勉強しなければならないなど改めて感じました。その後のパートナーとの学内散策では、スムーズに話すこともできましたし、大学の様々なところを回り、写真も撮り、お土産も買えて、すごく充実した散策となりました。」

● 4日目

本日の午前中は UCI エクステンションセンターのジェフ・デービス氏より、「アメリカの大学進学のために」という内容で、UCI エクステンションセンターがどのようなプログラムを用意しているのかの説明を受けました。日本とアメリカの大学とのシステムとしての違いを丁寧に説明していただき、留学を考えている生徒のみならず、高等教育で学ぶためのビジョンをより具体的にすすめるための大切な機会となりました。

午後は、著名な国際人権法の研究者であられる、デビッド・ケイ教授による特別講義がありました。授業と会議のお忙しい合間をぬって、学園生のために1時間を割いてくださいました。生徒たちはこの日まで、創価大学飯田教授の講義を受けるなど、国際人権法について基本的な学習を行ってきました。それに加え、ケイ教授のわかりやすく、親しみやすい講義に引き込まれ、生徒たちは大変に満足して、楽しく授業をうけることが出来ました。質疑応答の時間にも誠実に応えてくれる姿は大変に感動しました。

コンバセーション・パートナーとの交流も深まり、日を追うごとに自信を持って英語を使うようになってきました。その成果は、リサーチのためキャンパス内でアンケートを取る姿にも現れています。

◆ 4日目 生徒感想

「最初のプレゼンでは自分の知らない事が色々知れて物の見方が広がったような気がします。また 87 も UCI には学部があると知っている色々な事が学べる、自分の将来を選択するチャンスが増えるんじゃないかとすごく魅力的に感じました。」

「国際法の話は自分が将来のために理解しておくべき事が詳しく学べて本当に良かったです。質問への回答も的確で自分がぼんやりとしか理解していなかったことを明確に答えてくださっていたので新たな発見が沢山あり、とても面白かったです。分からなかったところも後で、みんなで情報をシェアして理解できました。それでも聞き取れなかったりしたのは悔しく、英語を勉強する際のモチベーションにつなげていきます。とても貴重な機会になりました。」

「今日のプレゼンテーションはどちらも、内容、お話(冗談なども)ともに理解でき、今回の研修の中で最も有意義な時間を過ごせたのではないかと思います。1 つ目のジェフさんのプレゼンでは、UCI だけでなく、僕が進もうと思っているアメリカ創価大学(リベラルアーツカレッジ)についてもさらなる情報が得られ、自分の進路についての考えがさらに深まりました。UCI についての情報の中で驚いたことは、聞いたことのない学部があったことです。2 つめのケイ教授のプレゼンでは、前から準備していたこともあり、教授のバックグラウンドについてのお話も含めて理解できました。質問もすることができ、聞く側の態度もこれまででもっともよくできたと思います。」

● 5日目

5日目は、この日まで準備を重ねてきた研究内容を、地元のタスティン高校の模擬国連部の3名のメンバーと UCI 生スタッフの前で、プレゼンテーションを行いました。それぞれのテーマ

は、1、全米日系人博物館報告 2、サイモン・ヴィーゼンタール寛容博物館報告 3、「人間の安全保障」概念における核兵器に関する一考察 4、「核兵器の存在は国際法に反しているか」となりました。4人ずつ4つのグループに別れて発表するごとに、現地の高校生からの質問と意見が飛び込んできます。日本語でもなかなか行わない、白熱した授業となりましたので、当然思うように表現できず、悔しい思いをする事もありましたが、それでも必死になって伝える姿は大変に立派でした。現地高校生と一緒に発表をしてくれたカールさんも、UCIに語学研修に来る日本の大学生よりもレベルが高く、立派な発表だと感心していました。

2時間に及ぶ発表と討議の後は、高校生・UCI 学生スタッフとともに昼食。同じ高校生としての生活の違いなどをじっくりと歓談していました。

午後にはコンバセーション・パートナーとともに、GLP で使用する、沖縄・東京・カリフォルニアの同世代の意識調査のためのアンケート調査をキャンパスおよび近隣施設で実施。すべて英語での声掛けにもかかわらず、1日で100人から回答をもらっていました。



◆ 5 日目 生徒感想

「今日は午前プレゼンがあり、とても緊張しました。ですが、ディスカッションや質疑応答は、予想に反して楽しかったです。4グループすべてのプレゼンが、確実に最初よりも良くなったと感じました。タスティン高校の生徒さんの会話のスピードは速く、質問の内容のレベルが高いと思いました。また、アメリカの高校生は、今日来てくださったタスティン高校の生徒さんのように、核兵器に対してしっかりと自分の意見を持っているのを知りたくなりました。日本の高校生は核兵器についてどのような意見を持っているのか、英字新聞で行うサンプリングが楽しみです。私は核廃絶に向けて、平和の創造に向けて何ができるか、プレゼンを聞く中で改めて考えていました。ただ論理的に自分たちの立てた仮説を証明するだけでなく、核廃絶に対してできることを提案して行動していくことが重要だと思いました。核兵器の問題は地球に住む人間すべてにとっての問題なので、人類が共通して持っているものや当てはまるもので核廃絶を行っていきたいと思いました。また、核を生み出したのも人間であり平和を創っていくのも人間なので、私は大学で人間について学びます。その人間の人格を育む教育についてももっと学んでいきます。」

「私の班はサイモン・ヴィーゼンタール寛容博物館についてだったこともあり、ホロコーストの話が多く、たくさん質問ももらいました。しかし、発表の際には他の人が全部答えてくれて自分だけ発言することがなくそれがとても悔しかったです。その後のディスカッションではちゃんと話のできたので良かったです。」

す。私が話をしたアメリカの高校生はみんな私より年下でしたが、自分の考えというものをしっかり持っていて本当にたくさんのことを学んでいるんだなと衝撃を受けました。それに対して日本はホロコーストの話など教科書でもたったの数行程度しか載ってなく、自然とそういうことを学ぶ機会は少なくなっていると思います。そういった負の歴史をしっかり学んで同じ過ちを繰り返さないための教育を日本はもっと展開して行くべきではないか、そう思いました。同じ年代のしかも国が違う人たちとこう言ったとても濃い話ができとても刺激を受けましたし、もっとたくさん自分は学ばなければならないと感じました。また、日本に帰ってこの話を周りの友達にも伝え同じように自分たちの学びの必要性を共に再認識していきたい、そしてその役割をしっかり果たさなければならないと強く思いました。」

● 最終日

早朝に UCI を出発し、JAL61 便に搭乗し、日付変更線を越えて、翌朝帰国しました。



C) 岩手

■ 期 間 7月25日～27日の3日間

■ 参加者 高校1年生3名 高校2年生3名 高校3年生6名 計12名

■ 目 的

私たちは「環境」をテーマに岩手県で大きく二つの行程を行いました。一つは、エネルギー自給率160%とも言われる町、くずまき町を訪れ、体験的に環境への取り組みについて学ぶこと、そしてもう一つは、3.11の東日本大震災の津波で甚大な被害を受けた町、陸前高田市を訪れ復興の様子を学ぶことです。出発前には、創立者が「新・人間革命」清新の章で、東日本大震災について書き綴ってくださり、その中でFW先となる陸前高田についても触れてくださりFWに大きな意味を感じての出発となりました。

■ 事前学習・準備

● ジグソー法を用いた環境問題に関する基礎学習

● 現地での Interview のための Question Sheet の作成

■ 行程

● 1日目

一日目、クリーンエネルギーの町、「葛巻町」を訪れました。私たちは、目の前に広がる草原や山々に、大自然の力を全身で感じました。くずまき高原牧場では、乳牛への餌やり体験も行い、ここで私たちは「命」の尊さに直面することになりました。牛の寿命は通常13年と言われています。でも私たちが柔らかくて美味しいお肉を食べるために、この牛たちは産まれて2年で

その命を奪われます。夜ご飯には牧場で育った牛の焼肉をいただき、私たちは生きるために、経済動物の「命」をいただいているのだということを強く突きつけられました。そして、酪農家さんたちは、毎日、「命」と接し、その「命」を受けて生きている消費者の「命」を預かり、生半可ではない覚悟をもって仕事をされていることを、直接、学びました。また、牧場内で出た牛の糞や生ごみなど本来廃棄するものを使った“バイオガス発電施設”や、町で最大の風力発電所を見学しました。こうした施設は町の産業とも密接に関わっていて、地球環境問題に取り組みながら、地域も活性化させていくための工夫がたくさんありました。そしてまた、葛巻町の皆さんは、この小さな町で、真剣に地球のことを考え、また地域のために行動される情熱にあふれて、とても感動しました。



◆ 生徒感想

「今日を目指して皆で事前学習を重ねてきましたが、実際に訪れてみて、得るものが本当に沢山ありました。他の酪農家なら捨ててしまう家畜の糞尿や林業の中で出た木屑などの産業廃棄物を最大限に利用するなど、30年、100年先を見据え、環境問題のために行動されていることに感動しました。」



「晴天の中、畜産体験や原木シイタケの収穫など貴重な経験をすることができました。循環型農業では、地球環境のために徹底的に無駄をなくそうとされる執念に感動しました。そして何より、自分たちの利益だけでなく地球環境のためにという、携わる人たちの情熱が葛巻町を発展させているのだと感じました。」

● 2日目

二日目午後からは、陸前高田市に向かいました。まず私たちは、追悼施設に向かいました。そして私たちは、当時の津波による被害の様子がそのまま残されている道の駅、「TAPIC45」を特別に見学させていただきました。本来なら海にあるはずの養殖用の網やホタテの貝殻が、高さ15メートルもの階段に打ち上げられていました。グニャグニャに曲がって垂れ下がっている鉄筋や、打ち砕かれたコンクリートの壁など、



被害の大きさは私たちの想像をはるかに超えていました。これは、津波が15.1メートルの高さまで到達したことを表す看板です。津波が来て、引いていくまでのたった8分間で何もかもが無くなってしまった町を見下ろし、ショックで、誰も言葉を発することができませんでした。自然の恐ろしさと、それに一瞬で呑み込まれてしまったたくさんの人々の尊い命を想い、一人ひとり

がその現実をどう受け止めればいいのか、どう言葉に表せばいいかわからなかったのです。しかしその夜の、陸前高田の同志の皆様との懇談では、「亡くなった人の分まで、生かされた私たちは人生をかけていくのです。」「大悪起これば大善きたる。こんな大悪が、とっていたけれど、池田先生との原点をつくらせていただき、大善でした。」と皆さん、笑顔で被災体験を語って下さいました。その強さに、その明るさに、逆に私たちの方が励まされ、言葉に尽くせぬ涙であふれました。

◆ 生徒感想

「午前は葛巻町で風力発電について学びました。間近で見た風力発電施設は想像より遙かに大きく圧倒されました。どこまでも根底には「環境のため」との思いがあり、一つ一つの工夫にとても感動しました。」



「陸前高田市の被災者の皆様との懇談会では、3・11 当時の詳しいお話や苦労を伺うことができました。誰もが、大切な知り合いを亡くされていて、ご自身が生き残った事の意味を考え、また支えてくれた人々への感謝の気持ちを持って、今を生きていました。僕たちに今できることは“忘れないこと”そして“伝えること”です。しっかりと心に刻み、周囲に語り、進んでいきます。」

● 3日目

最終日には、プレハブのままの陸前高田市役所で復興局の局長や、教育長との懇談をしていただきました。皆さん、口々に「津波で全てを流されたが、新しい街をつくるチャンスだと感じている。」と語られていました。教育長もまた、お母さまを津波で亡くされておりました。陸前高田市の皆さんは誰もが大切な人を亡くされ、大きな悲しみを抱えながらも、町のため、亡くなった大切な人の分まで、自らの人生と向き合い、行動されておりました。私たちはこの岩手 FW でくずまき町と陸前高田市を訪れ、それぞれ違う角度での、「自然の力」と、「命の尊さ」を学ぶことができました。そこで学び得た財産を胸に、また新たな気持ちで学び抜いていきます。

◆ 生徒感想

「復興の槌音が響く陸前高田の町を視察し、かさ上げ現場や災害公営住宅など、一歩ずつ着実に復興が進んでいる様子に感動しました。また同時に、教育長や復興局長のお話で、まだまだ課題があることも学び、その難しさを痛感しました。次の時代を担う私たちが学び力をつけることが復興のためにできることなのだと感じました。」

「被災された方が、皆さん「津波てんでんこ」の話しをされました。まず自分で自分の命を守る事がどれだけ大切か、実際に経験された方々の言葉には重みがありました。震災から五年。一年また一年と変化する町の写真を見て、復興へ進む陸前高田の皆さんに負けないように、自分ももっと前進していこうと決意しました。」

D) 広島

■ 期間 7/21(木)～23(土)の3日間

■ 参加者 12名(1年生5名 2年生4名 3年生3名)(希望者抽選)

■ 目的

地球規模課題の一つである「核兵器」をテーマに、原爆投下より71年を迎える広島県広島市を訪れ、広島平和記念資料館(原爆資料館)・平和記念公園の見学、広島平和文化センター小溝泰義理事長、被爆者の方との懇談会を通して、戦争と平和、そして核廃絶へ向けた取り組みを学ぶ。

■ 事前学習

被爆体験や原爆被害の概要、オバマ大統領の広島演説等、多くの資料がおさめられた学習冊子を読み、ディスカッションを通して深め合った。

■ 行程

● 1日目

広島到着後、午後からは広島池田平和記念会館にて被爆体験の語り部・竹岡智佐子さんと語り継ぎ部・東野真里子さん母娘との懇談会及び、会館内の常設展示を見学しました。懇談会では、ご高齢の竹岡さんが命をけずる思いで、壮絶な被爆体験とともに「自分と同じ地獄を、誰にも味わわせてなるものか」との強い誓いを語ってくださいました。常設展示では創立者の平和運動とそれを後継する青年の取り組みを学びました。原爆の残酷さを学ぶとともに、平和とは何か、その実現の為に自分に何ができるかを、参加生徒一人ひとりが必死に考え始めた一日となりました。



◆ 生徒感想

「今まで原爆というものが悲惨だということは分かってはいたものの、詳しくは知らず漠然としたイメージしかありませんでした。本日のお話を通して原爆というものがいかに悪なのかを詳細に知ることができました。そしてこんなことをもう二度と引き起こしたくない、と心の底から強く思いました。二度と引き起こさないためには東野さんのように語り継いでいく存在が大切だと感じました。私たちもまた周りの人に語り継いでいきたいと思います。これからの研修でもっと平和について学んでいきます。」



● 2日目

午前中は、広島平和記念資料館を見学後、ボランティアガイドの品川さんに案内していただきながら広島平和記念公園内を巡り、慰霊碑で黙祷を捧げました。午後は、放射能影響研究所を訪問し、長年にわたる放射能研究の目的と研究成果について学びました。夜には広島平和文化センターの小溝理事長との懇談会を持ちました。外交官として平和運動の第一線を走り続けて来た理事長の生き方に大きな触発を受けました。

◆ 生徒感想

「資料館で自分の目で直接被害を見たことで、言葉に表せないほどの悲惨を実感しました。また、平和記念公園を歩き、公園を設計するとき平和の思いを込めて真剣に考えられたこと、沢山の国や人によって様々な木が贈られたことからなんて平和の決意があふれている公園なんだろう、ここに世界中の人々全員が訪れたら世界平和は実現するんじゃないかと感じました。小溝理事長のお話からは一人の行動の大切さ、相手を尊重することの大切さを改めて学びました。どんなにくじけそうになっても何度も立ち上がっていきます。」

● 3日目

最終日は、朝からSGH校の先輩である広島女学院高等学校を訪問し、施設の見学とともにテーマを設定したグループディスカッションを行いました。高校生として核廃絶のために何ができるのか、真剣に広島原爆投下という歴史について学び、考え、行動してきた女学院生との交流は生徒たちにとって宝の出会いとなりました。

◆ 生徒感想

「原子爆弾投下の地である広島の高校生は、他人事に思われがち原子爆弾から目をそらさずに、真剣に歴史と向き合っていました。一番印象に残ったのは、『どちらが悪いのかを考えるのは時間の無駄』という意見です。責任の押し付け合いをしても平和が実現できないばかりでなく、かえって争いを生み、犠牲者を出すだけです。大切なのは、対話によってお互いが納得できる結論を導き出すことだと思います。そためには事実をしっかりと知る必要があります。3日間で吸収したものを他の人にも伝え、平和の波動をここから起こしていきます。」

目的
地球規模課題の一つである「核兵器」をテーマに、原爆投下より71年を迎える広島市を訪れ、戦争と平和、そして核廃絶へ向けた取り組みを学ぶ。

1日目 (7月21日)
～語り部の竹岡智佐子さんと語り継ぎ部の東野真里子さんとの懇談会～

竹岡さんのお話
私は、爆心地から3キロメートルの自宅で被爆しました。しばらくすると、被爆によって焼けた人達が逃げてきましたが、体から皮がぶら下がって男女の区別すらつかず、ほとんどの人が声も出さずに名前すら言えませんでした。また、その翌日母を探しに市内に入ると、川に水が見えないほど死体が浮かび、爆心地近くの病院ではほとんどの人が口や鼻、耳からも血をふいて亡くなっていました。

東野さんのお話
たとえ自分が経験していても、被爆体験を聞いて感じたことを自分の言葉で話すことが大切です。また、頼みだけだと言えは出ます。

今度は私たちが伝えていかなくてはならない!

家族・友人をはじめ、周りの人に平和の大切さを伝える!

2日目 (7月22日)
～広島平和記念公園・広島平和記念資料館～

慰霊碑から原爆ドームがまっすぐ見えるように設計

原爆ドーム、平和の灯、原爆死没者慰霊碑、平和記念資料館(本館)

原爆ドームの爆撃の姿を忘れないために残された原爆ドーム、世界から平和のために建設された平和の灯、平和の灯は核兵器が地球上から消滅する日まで燃え続ける、慰霊碑は原爆死没者の方向を向いて立っている、多くの若者が死した学生被爆者慰霊堂

被爆者の思いを決して忘れてはならない!!

～放射能影響研究所の見学・広島平和文化センター小溝理事長との懇談会～

放射能影響研究所の見学
被爆者の方の身体検査を通じて、放射能が人体に及ぼす影響についてデータを取り、記録し続けています。被爆者の方から、最初は「データを取られるだけのモットモットの不快感」との声がありましたが、このデータがあったことが福島第一原発事故の際などに役に立っています。

広島平和文化センター 小溝理事長との懇談会
ご自身の外交官としての経験や核兵器を巡る国際社会の動向についてレクチャーをしてくださり、一人一人がかけがえのない存在であり、いろいろな人がそれぞれの立場で行動を起こしていくことが大切なのだと教えていただきました。

平和に必要な2つの方向性

① 障害の除去
└ 憎しみの連鎖、相互不信、核兵器

② 共通価値の創出
└ 日常生活の中で互いの良さを探し、理解・尊重

3日目 (7月23日)
～広島女学院の生徒の皆さんとの交流会～

ディスカッションテーマ
・オバマ大統領が広島を訪れた際(5月27日)の演説内容について
・アメリカと日本での若者の核への意識の違いについて
・高校生が私たちができることは何か

広島女学院の活動紹介
・中高6年間の体系的な平和学習
・核廃絶への署名活動
・ターゲットアースを掲げ、被爆体験を知ることが出来るシステム作り など

高校生の私たちにできること
→ 繰り返してはならない過去の過ちを知る
→ 現状を見つめ、考えを深める
→ 身近な人に平和の尊さを伝える

まとめ
核兵器の恐ろしさや、出会った方々の平和への思いを強く感じました。私たち高校生にできることに取り組み、身近な場所から、平和を創造していきます!

E) 沖縄

- 期間 8月10日～12日の3日間
- 参加者 高校2年生4名 高校3年生4名 計8名(いずれもGLP生)
- 目的

唯一の地上戦であった沖縄戦の事実と当時の人権問題について、博物館見学や壕内部の見学、戦争体験聴講を通して学ぶ。また、那覇国際高校の生徒と、現在の沖縄が抱える基地問題や東京都沖縄での平和学習の違いなどについてディスカッションするとともに、交流を深める。

■ 事前学習・準備

- ・書籍やインターネットを活用して沖縄戦について学びました。
- ・4人ごとのグループに分かれ、以下の研究テーマを設定しました。

研究テーマ

「沖縄県民に対する日本兵の異民族意識が沖縄戦の被害を深刻化させたのか」

「沖縄戦において皇民化教育が当時の沖縄住民の集団自決を助長したのではないか」

- ・現地で言うインタビューに備え、質問項目を作成しました。

■ 行程

● 1日目

到着後、沖縄県立那覇国際高等学校生徒9名と共に、ひめゆり平和祈念資料館を見学しました。当時の壕の内部を再現したジオラマや戦争体験がまとまった資料を食い入るようにながめ、ひめゆり学徒隊について学びました。



沖縄平和祈念資料館に移動して常設展示を見学し、沖縄戦前後の沖縄の状況や当時の教育について学びました。その後、同館会議室にて那覇国際高校と交流会(ピースフォーラム)を開催しました。短時間ではありましたが、今の沖縄の教育や生活についてなど、有意義な語りとなりました。

終了後には平和祈念公園に移動し、園内の平和の礎にて記念撮影と平和祈念公園の見学を行いました。園内には平和の礎という国籍や軍人・民間人の区別なく沖縄戦で亡くなったすべての人々の氏名を刻んだ祈念碑があり、それらを両校生徒が丹念に見て回りました。また、公園一帯は沖縄戦の終結の地である摩文仁の丘でもあり、激戦中、この崖から多くの日本兵や住民が身を投げたとの話を聞き、当時の凄惨な状況に思いをはせる一日となりました。



◆ 生徒感想

「特に印象に残ったのは、2つの資料館の見学です。沖縄県平和祈念資料館のガマのジオラマに入って爆撃の音を聞くと、現

代にいる私の胸にも不安感が迫ってきました。この恐怖を大戦当時、日夜味わっていた人々がいたのだと想像しただけでも恐ろしく、戦争の『悲惨さ』を痛感しました。」

「沖縄に着くまで、楽しみとともに不安もありましたが、那覇空港で地元の方々が盛大に歓迎してくださったので、とても嬉しかったです。また、那覇国際高校の生徒さんとの交流では、基地問題についての意見交換や将来の夢など、様々話すことができ大変に刺激的でした。同年代の高校生と、友情を深めることができた貴重な一日でした。」



● 2日目

午前中は、沖縄戦戦没者の遺骨収集事業に取り組まれている NPO 法人「ガマフヤー」遺骨発掘現場の視察を行いました。喜屋武岬付近の壕の中にも入れていただき、兵士の靴の一部や銃弾、戦時中に使われていた薬の瓶などを実際に目にしました。いかに過酷な状況下で生活した人々の追体験をさせていただきました。また、遺骨収集現場にも立ち会い、戦没者の頭蓋骨の一部を触らせていただきました。ガマフヤーの代表・具志堅隆松さんは「戦争を過去の歴史としてではなく、自分のこととして考え、若い方々が戦争の犠牲にならない平和な世界を築いてほしい」と語られました。



午後には嘉手納基地周辺を視察。基地では、訓練中の飛行機が飛んでいくようすを間近に見ました。飛行機の騒音を体験し、基地問題の現実を確かめました。

夕刻からは、コンソーシアム沖縄の事務局長・日笠誠先生に、グローバル人材の要件について講演を行っていただきました。日笠先生は、グローバル人材になるための条件としてコミュニケーション能力、主体性、積極性、チャレンジ精神、協調性、柔軟性、責任感、使命感、といったものが重要だと語られていました。

その後、沖縄戦を体験された仲程シゲ子さんから戦争体験を伺いました。仲程さんは空襲、地上戦のなかを生き延び、まさに筆舌に尽くしがたいような体験を語っていただきました。

◆ 生徒感想

「一日の活動の中で特に印象に残ったのは、実際に使用されていた壕の中に入れて頂いたこと

です。壕は狭く暗く、じめじめとしていて今にも崩れそうでした。壕内部には靴底や、ろうそく立ての痕が残っており、このような環境で生活していたことの壮絶さを、身をもって知りました。」

「遺骨収集の現場で代表の方が遺骨を掘り出す際に『掘り上げさせていただきます』とおっしゃっていた姿をみて、身も心も引き締まる思いでした。戦争を自分のこととして想像でき、その悲惨さをより鮮明に感じました。」



「戦争体験を聴講させて頂きましたが、お話から状況を想像するだけで怖くなりました。今日の経験を通じて、戦争の恐ろしさを、身をもって知ることができました。今日感じたこの恐怖を決して忘れることなく、戦争のない平和な世界を作るために学び抜いてまいります。」

● 3日目

沖縄県恩納村にある沖縄研修道場を訪問しました。沖縄研修道場は、かつての米軍「核ミサイルメース B 基地」跡地に、1977年に創立者が建設された施設です。沖縄研修道場では、地元の小中学生が朝早くから歓迎してくださいました。

まず、沖縄研修道場内付属の展示室を見学し、沖縄戦体験者が描いた絵や写真を通して沖縄戦の悲惨さを実感すると共に、冷戦当時の核兵器配備の実態などについて学びました。



続いて、コンソーシアム沖縄 代表理事、名桜大学名誉学長の瀬名波榮喜先生から「沖縄の過去・現在・未来」と題して、沖縄の歴史とこれからのグローバル社会について、約 90 分間講演していただきました。

◆ 生徒感想

「沖縄研修道場を見学し、ここが確かに核ミサイルの発射基地であったことを感じ取ることができました。しかし創立者はあえてそこから『平和を創り出そう』と決意し、訴えられたことを思うと、その偉大さを肌で感じました。」

「研修道場では、沖縄の地域の方に大歓迎していただき感謝の気持ちでいっぱいです。最後には全員でカチャーシーを踊ることができ、とても楽しく、感動しました。3日間を通し、ただの観光とは違う、大切なものを溢れるほど学ぶことができました。」

「瀬名波先生のお話から、学ぶ青年の力が沖縄の復興に大きく貢献したことを実感させられました。私たちが学んだ分だけ世界が平和になるということは確かなのだと感じました。」

F) JICA(市ヶ谷)

■ 期間 2/5(日)

■ 参加者 21名(高校1年生9名 高校2年生4名 高校3年生8名)

■ 目的

「国際理解」をテーマに、JICA 地球ひろばを訪れ、青年海外協力隊の経験者による施設案内や、レクチャーを通して、世界の実情を体験的に学び、その解決の方途を探る。また、テーマディスカッションを通して、世界の諸問題に対する関心・理解を深め、国際協力のあり方を見つめ、また将来の進路選択の一助とする。

■ 事前学習

出発前は主に二つのことを学習しました。一つ目はSDGs についてです。SDGs とは Sustainable Development Goals の略で、「持続可能な開発目標」という意味です。これは、2030年を目指して国際社会が目指すゴールを定めた提言です。貧困、環境問題や平等などの17の項目で構成されています。もう1つは、SGI 提言の読み合わせです。SGI 提言とは私たち創価学園の創立者池田大作先生が毎年1月に発表されている「地球的問題群についての考察と具体的な対処の方法」を発表しているものです。

■ 行程

フィールドワーク当日、市ヶ谷駅に集合し、10分程度歩いて、JICA 地球ひろばに行きました。合計4つある研修のうち、最初は、青年海外協力隊としてザンビアで理科教師をしていた方の体験談でした。体験談では、イントロダクションとして、JICA そのものや、日本がなぜ開発援助をしているのか、また、青年海外協力隊の活動内容を説明して頂きました。その後、実体験を踏まえた途上国の教育状況や活動を通しての感想をお聞きし、途上国の教育には課題が山積みであることを深く認識しました。

体験談を聞いた後は、2つ目の研修である展示施設の見学を行いました。ここでは、世界の挨拶、貧困、水、保険・医療、教育、子供、紛争、相互依存の8つのブースがあり、それぞれのブースではテーマに沿った内容を体験的に知ることができました。

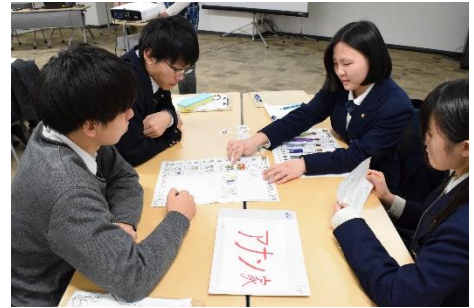
昼食を挟み3つ目の研修は、経済格差をテーマにしたワークショップでした。日本のチョコレート工場で働く人の家族と、ガーナのカカオ農家一家にわかれて、各国の経済格差と、チョコレート原料であるカカオに価格変動が起きたときの影響の違いを体験しました。

そして、最後の研修として、現役の JICA 職員の方から、「SDGs の実現に向けた JICA の活動」と題した講演を聞きました。講演では、国連が掲げる2030 アジェンダにある「持続可能な開発目標(SDGs)」の達成に向けて、JICA が具体的に取り組んでいる事業について紹介がありました。



◆ 生徒感想

「私は、今回のワークショップで、発展途上国の中でも一番貧しい家庭を担当しました。お金の使い道を決めるときは、想像以上に苦しく辛い思いをし、先進国の人々の利益のために、開発途上国の生産者が満足に生活を送れないという現状を知りました。このワークショップで体験した感情を絶対に忘れずに、今後も周りの立場や心情を知ることが大切になっていきたいと思います。」



「私はフィールドワークに参加して、展示施設見学が一番印象に残りました。展示では、少年兵が実際に使っている中と同じ重さの銃や、水汲みの時に持つバケツを持ちました。少年兵や幼い子ども達が水汲みをしている現状は知っていましたが、それらの余りの重さに、自分の知識が甘いものだと知ることができました。今後も世界の問題を勉強するときは、現状を知って終わるのではなく、その実際の苦勞に目を向けていきたいと思います。」

G) ハンセン病資料館（東村山）

■ 期間 2/11(土)

■ 参加者 16名（高校1年生9名 高校2年生5名 高校3年生2名）

■ 目的

国立ハンセン病資料館を訪れ、ハンセン病回復者の方との交流を通して、ハンセン病の歴史的背景を学ぶとともに、人権を踏みにじられてきた体験者の痛みに触れ、自身の生き方や人権について考え、深める機会とする。

■ 事前学習

ハンセン病に関する映像を視聴するとともにハンセン病の概要や日本における差別の歴史がおさめられた学習冊子を読み、ディスカッションを通して学び合った。

ハンセン病に関する基礎知識を踏まえ、一人ひとりが現地でハンセン病回復者さんにうかがう質問を考えて当日を迎えた。

■ 行程

当日の朝、国立ハンセン病資料館に到着すると、はじめに語り部さんの映像資料を視聴しました。日本におけるハンセン病の差別の歴史を、実体験を通じて知りました。その後、資料館の学芸員さんに解説していただきながら、館内の展示を見学しました。療養所で実際に使われていた生活道具や患者さんがつくった詩や陶芸作品を目の当たりし、出口の見えない隔離生活の厳しさとその中で生きる希望を持ち続けた患者さんたちの力強さに心が震えました。

午後「ハンセン病回復者と話す会」に参加し、懇談会を持ちました。お話を伺った三人の回復者さんは学生の時にハンセン病を発症し、家族が差別を受けないように自分の故郷を離れ、名前を捨てて療養所に入ったといいます。一人ひとりかけがえのない人生があったこと、それを踏みにじった差別が現実にもここ日本で存在したのだということに大きな衝撃を受けま



した。と同時に、自分に何ができるのか、現在も世界に存在し続けている人権問題とどう向き合って生きていくべきなのかを、参加生徒一人ひとりが真剣に考え始める大きなきっかけをつくった研修になりました。

◆ 生徒感想

「実際にハンセン病になったことがなく、とても患われた時代に生まれた私には、元患者さん方の苦しみを完全に理解することはできません。でも、後世を生き、創っていく私たち青年は『知る』ことが大切だと思います。元患者さんは『こういう病気があったことを伝えていきたい。』とおっしゃっていました。ハンセン病は『過去』ではなく『現在』。そのような認識ができ、未来につなげていくことができたなら、ハンセン病の痛ましい歴史を意味のあるものとして重ねることができると考えます。資料館の方々、命を削って話して下さった元患者さん、お世話になった全ての方々に感謝しています。私は今回のことを必ず活かしていきます。」

「私は最初、『ハンセン病回復者さん』と『お話を聞きにきた自分』というように、何か1本の線を引いていたような気がします。しかし懇談を通して、私も回復者さんも全く同じ人間なのだと強く感じました。そして自然と涙が出てきました。『習い事や友達と話したことが楽しかった』『家族が幸せになることが嬉しい』など、自分と同じだと感じるものがたくさんありました。と同時に、自分が体験したことのない苦しみ、悲しみ、怒りを知っていることも痛いほど感じました。お話を聞きながら胸が張り裂ける思いがしました。まずは、人に何かを『してあげる』ではなく、同じ人間として自分が変わる、学ぶ大切さを心から実感しています。」



6. グローバルセミナー

■ 対象： 全校生徒（希望者参加）

全校生徒対象のグローバルセミナーは、昨年度のSGHAより開始し、通算して12回行いました。本年度は第7回から第12回と行い、回を重ねました。

○第7回グローバルセミナー 4月26日（火） 会場：栄冠ホール

講師： ケビン・クレメンツ ニューージーランド国立平和紛争研究所所長



ニューージーランド国立平和紛争研究所所長であるケビン・クレメンツ博士夫妻をお迎えし、栄冠ホールにて「平和を学ぶ意義」をテーマにグローバルセミナーを開催しました。クレメンツ博士は、「平和な社会を築くために、自分をよく知り、世界市民としてのビジョンをもち、パートナーシップを結んでいこう」と学園生に語りかけ、質疑応答も活発に行なわれました。セミナーには約180名の生徒が参加しました。

その後、GLPメンバーを対象に、「なぜ今、global issues に『慈悲の精神』によるエンパワーメントが必要なのか？」と題して、最新の平和学の知見に基づいて通訳をはさまず全て英語で講義をしていただきました。

◆ 生徒感想

「文化や人種は異なっても、同じ人間だということを念頭において、怖いと思う相手にも手を差しのべられるような世界市民を目指していきたい。」

「『自分は変革を起こせるということを信じる』『相手の立場に立って考える』『自分にできることを考える』この3つを胸に刻み、学園生活をすばらしいものにします。」

○第8回グローバルセミナー 5月23日(月) 会場:栄冠ホール

講師:ウィリアム・ゴ德里博士 コロンビア大学ティーチャーズカレッジ芸術・人文学科長

アメリカよりコロンビア大学ティーチャーズカレッジ芸術・人文学科長であるウィリアム・ゴ德里



博士をお迎えしました。校内見学後、栄冠ホールにて「世界市民教育とは」をテーマに第8回グローバルセミナーを開催しました。ゴ德里博士は、「Who」「Where」「When」とのシンプルな質問を通して世界市民とは何かということ、わかりやすく語ってくださいました。その後の質疑応答では、学園生の一つひとつの質問に深くうなずかれながら真剣に答えてくださいました。セミナーには約150名の生徒が参加しました。

◆ 生徒感想

「博士が最初に話してくださった『あなたは誰ですか』との質問から、自分は誰のために今何ができて、またこれから何をすることができるのかを深く考えさせられました。私たちのこれからの生き方次第で世界は良い方向にも悪い方向にも進んでいくのだと改めて思いました。その責任を忘れずに、高校生活で更に勉学に励み、将来世界の貧困問題の解決に貢献できる人材に成長していきます。」

「本日の講演会では、世界市民について深く知ることができました。『まず自分が変わる』『自分が周囲の模範となる』という言葉が印象に残りました。世界の諸問題を解決することも、まず自分一人から始まるのだと思いました。『世界市民』といっても自分をどう創っていくのかが重要だと学ぶことができました。」

○第9回グローバルセミナー 5月27日(金) 会場:栄冠ホール

講師: 山本栄二 東ティモール特命全権大使



在東ティモール特命全権大使の山本栄二氏をお迎えして、「日本から外交の第一線へ 真の国際人とは」とのテーマで第9回グローバルセミナーを開催しました。110名を超える生徒が参加し、山本大使による講演の後、20分程の質疑応答をしていただきました。

外交官の仕事、高校時代の語学と読書、友情、そして、真の国際人とはどのような人なのかなどについて、ご自身の体験を通してお話してくださいました。

◆ 生徒感想

「外交官という仕事が国と国を交渉でつなぐ重要な仕事で、時には命がけであるということが分かった。」

「高校で築いた友情は一生涯のもので一番の心の支えになる、国際人になる必要は全員にある、英語はできるのが当たり前、その上で専門性を持つ必要があるといったお話が印象的だった。これから、より一層勉学に励んでいこうと奮起した。」

「異文化の人々と交流するには、自分の育った環境、ルーツに対して誇りを持ち、語れるようになることだ、どうせやるなら一番大変なことにチャレンジしよう、との言葉に勇気をいただいた。」

○第 10 回グローバルセミナー 7月8日(金) 会場:栄冠ホール

講師: 帯刀良信 アジア開発銀行・上級ポートフォリオ管理専門官職員



アジア開発銀行 Bangladesh 駐在事務所・上級ポートフォリオ管理専門官の帯刀良信氏をお迎えして、「貧困と戦うのはなぜか」とのテーマで第 10 回グローバルセミナーを開催しました。140 名を超える生徒が参加し、帯刀氏による講演の後、20 分程の質疑応答をしていただきました。

貧困とは何か、Bangladesh 駐在事務所での仕事、7・1 Bangladesh テロ事件、学園時代の創立者との出会いと栄光寮での生活、そして、世界市民とは、などご自身の体験を通してお話してくださいました。

◆ 生徒感想

「智慧と慈悲と勇気についてのお話が最も心に残りました。特に勇気について、多様性を喜び守り合うことの大切さに強く共感しました。」

「アジアの絶対的貧困と日本の相対的貧困では立場も課題も違いますが、慈悲の心を持つことがすべての解決の一步になると思いました。」

○第 11 回グローバルセミナー 11月8日(火) 会場:栄冠ホール

講師: 山田智久 北海道大学准教授

北海道大学の山田智久准教授をお迎えして、「グローバルな人ってどんな人～北大・留学生 1800 人の教育現場から～」とのテーマで第 11 回グローバルセミナーを開催しました。約 100 名の生徒が参加し、山田准教授による講演の後、質疑応答をしていただきました。山田准教授は自身の経験を通して、グローバルな人の資質として一番大事なのは、自分の信念を、周囲の納得と理解を図りながら貫き広げることだと語ってくださいました。



◆ 生徒感想

「グローバルという言葉の意味を深く考えずに使っていたことに気が付きました。また、自分自身の信念とは何か、改めて考えるきっかけとなりました。」

「山田先生の読書の話聞いて、私も小説や古典作品、新書などさまざまな分野の本を読んで、たくさん知識を増やしていきたいと思いました。」

「場所や言葉に縛られず、異なる国に住む人との違いを認めることや世界中を飛び回るための知力、体力を鍛えることが大切だとわかった。このセミナーで学んだことを、これから実行していきたい。」

○第12回グローバルセミナー 11月17日(木) 会場:池田講堂

講師: 星野康二 スタジオジブリ代表取締役社長

11月18日の創立記念日を前にした17日午前、全校生徒が池田講堂に集い第12回グローバルセミナーを開催しました。創価大学6期で株式会社スタジオジブリ代表取締役社長である星野康二さんが「グローバル社会で活躍する『世界市民』とは」と題して講演を行ってくださいました。星野さんはグローバル社会で活躍するために、「情熱を持ち続けること」「力のある人になること」「運を自分でつかむこと」の3つについて、自身の経験を通して語ってくださいました。最後には学園生との質問会をもっていただき、代表生徒の質問に対して丁寧に回答してくださいました。



◆ 生徒感想

「しっかりとした信念を持ち、何があっても揺らぐことのない強い自分を作り上げ、柔軟な心と寛大な心を持ち、世界に通じる力をつけていくことの大切さを学びました。」

「お話を伺い、いつでも大情熱を燃やし続けられるよう更に勉学に挑戦していこうと決意しました。」

7. 語学活動

A) 英字新聞(GCP)

■ 期間 11月下旬～3月中旬

参加者 30名 (1年生9名 2年生10名 3年生11名) (希望者)

■ 目的

本格的な英字新聞の作成を通し、生徒の英語力・発信力を高めるとともに、取材や新聞

作成を通じ、社会や世界との関わり方、情報活用能力、チームによる計画実行能力等を涵養する。

■ 事前準備

参加者を4～5名ずつの7グループに編成するとともに、グループ全体を見る編集長を1人決めました。学校紹介の英字新聞となることを説明し、各グループが一つの記事を担当することを伝え、生徒各自が記事にしたいことを考えて講義に臨みました。

■ 講義内容

1回目 11月30日(水)

ジャパントイムズ報道部次長の小竹朝子氏をお迎えし、日本の新聞と英字新聞の違いや、記事の作成について、そのための情報の集め方などの講義を受けました。生徒からは「英字新聞を作成するイメージが具体的になったので良かった」との声が上がりました。



2・3回目 12月12日(月)

元朝日新聞記者の鈴木和枝氏を講師としてお迎えし、各自の取り組みたいテーマを共有し、グループで担当する記事を決めました。各グループのテーマは「言語教育」「愛唱歌」「平和シンポジウム」「生徒の生活調査」「アピールグループ」「GCPフィールドワーク」「イングリッシュキャンプ」となりました。この講義の後、各グループで役割を分担し、アポイント取り、取材、記事作成に取りかかりました。



4回目 1月23日(月)

2週間ほど前に提出した英文原稿について、どのように修正すべきかの提案を受け、各グループで確認しました。全グループに共通して間違いが多かったものについては、全体で取り上げて説明をしていただきました。また、記事の分量が多いグループには unnecessary 英文を削るアドバイスをいただきました。



5回目 2月6日(月)

前回の講義で修正の提案を受けた英文を各グループで直し、提出したものを紙面にしていただき、この日の講義で写真やそのキャプション、レイアウト等を含めて確認しました。講師や編集長が各グループに回ってアドバイスをし、記事を再度修正したり、写真をもっとインパクトがあるものに差し替えたりして、プロのチェックが入る前のα版を完成させました。

6回目 3月9日(木)

α版とプロのチェックを入れて完成したβ版を比較し、英文がどのように修正されたのか、各グループで確認しました。かなり修正されている箇所もありましたが、比較をしてみるとやはり自分の書いた文よりも簡潔にわかりやすい文に変わっていることが確認でき、「なるほど、こう書くのか」と生徒は感心している様子でした。

◆ 生徒感想

「最初の英語から、進めるにつれて変化していき、新聞に使う表現や伝わりやすい言い方、新聞の構成など、沢山のことを学ぶことができ、とても良い機会となりました。この新聞を今ここにいる皆で作ったんだなと思うと感動しました。各班の記事が生かされたいい新聞だと思います。もっと英語ができるように、先生が見せてくださった動画や冊子、配布された新聞を見直し、来年また一歩成長した自分で英字新聞に関わりたいなと思いました。」

「英字新聞は単に英語で記事を書くだけではなく、構成力や説明力など、普段使わないような力を英語で使わなければならないのでとても大変でした。(中略)記事が完成して読み返してみると、長かった文章をここまで端的にわかりやすくまとめられたという達成感があり、とても楽しかったです。今回のように、英語を勉強として使わないのは初めての経験だったので、大変でしたが、とても良い経験になりました。」

「新聞記事のつくりが作成を通してよくわかった。日本語と英語の違いが新聞作りにも大きく影響していることが良くわかりました。文法の知識も大切だということも感じることができました。」

■ 完成した英字新聞は、関係資料(P.136)参照

B) イングリッシュキャンプ

■ 期間 11/12(土)~13(日)の2日間

■ 参加者 30名(1年生11名 2年生8名 3年生11名)(希望者)

■ 目的

創価大学にて1泊2日を英語のみで過ごし、最新の施設を使用しながら、英語コミュニケーション能力の向上を図る。また、留学生との交流・共同作業を体験する。

■ 事前学習

参加者を2~3名ずつの11グループに編成しました。「日本の文化」について留学生にインタビューを行うための下準備として、テーマ設定とそれに基づいた質問を作成。テーマは「四季」「コンビニ」「スナック菓子」「お祭り」「敬語」「クリスマス」など多彩でした。

■ 研修内容

● 1日目

午前10時に創価大学中央教育棟に集合。創価中出身者が学年全体で参加した「創価大学研修」ではゆっくり訪れることのできなかつた SPACe などの施設を見学。開講式の後、ワールドランゲージセンターのボリック先生による「ポスタープレゼンテーション作成と評価のポイント」を講義していただきました。



午後からは9カ国から来日中の11名の交換留学生と交流をスタート。3～4名で、各留学生の出身国の文化についてなど語ってもらいました。そして、準備をしてきた質問リストにそってインタビューを行い、「留学生から見た日本の文化」を浮かび上がらせるべくデータを集めました。

各グループには、ポスタープレゼンテーションをまとめるための“指南役”となる留学生1名ずつに、担当についてもらいました。夕方からのセッションは、発見・考察したことをA2サイズのポスターにまとめる時間とし、担当留学生と熱心に相談しながら、マーカーで用紙を埋めていきました。



● 2日目

ほとんどのグループが朝食をとりながらポスターの仕上げや発表練習のために作業を行いました。そして、何人かの留学生も集合時間より早く来て、学園生を応援してくれました。グループ内でのリハーサルを経て、午後、いよいよ SPACe に集合。広い空間にかっこよくポスターを掲示しました。学園卒業生を含む国際教養学部の学部生などもプレゼンを聞くために駆けつけてくれました。約1時間強、たくさんの方にポスターを説明するのみならず、その場での質疑応答にも応じました。閉講式では代表生徒の感謝の言葉の後、全員で We are the World を合唱。担当した留学生からも「素晴らしい機会をくれて、本当にありがとうございました」と、学園生との交流・学習を心から喜ぶ声が多数寄せられました。



◆ 生徒感想

「二日間英語のみの生活はとても新鮮で、普段鍛えられない英語力を磨くことができました。私たちのグループでは『敬語』をテーマに発表をしました。『敬語を使うことで相手との間に壁ができてしまうのではないか』という意見もありましたが、見えない壁があったとしても相手に真心を持って接することが大切だと思いました。さらに語学力を磨き、世界中に友情を広げていけるように頑張っていきます。」

「今回のイングリッシュキャンプを通して、相手にわかりやすく話そう、伝えようとする心が大切だということ、そして、積極的に話そうとすることで自分の殻を破ることが大切だと気づきました。これからも学園で学ばせていただけていることへの感謝を持ち続け、恩返しの人生を送っていきたいと思いました。」

「自信を持って英語で話せない自分を変えたい思いから、昨年に引き続き参加しました。二日間を通して、普段の授業での実践が確実に力になっていることを実感し、自信を持つことができました。また、終盤には自ら積極的に堂々と留学生に話しかけることができました。この経験を糧にさらに自身の語学力を磨いていきます。」



C) スカイプ英会話

SGHAより、選抜クラスGLPの生徒を対象に、週1回程度のオンライン英会話の課題として実施しました。これにより、英語4技能の中でも、訓練の時間が最も短いスピーキングの時間を確保することができました。さらに異文化との理解を促す時間が増えました。

■ GLPクラス

SGH採択1年目のGLP2期生も、引き続き週1回程度のオンライン英会話を実施しました。とくにフィールドワーク前に戦争や核問題に関する意識調査として、オンライン英会話の講師であるフィリピン人の若い世代の人々にインタビューをおこないました。集約した情報はGoogle Classroomを活用して生徒間で共有し、その後の最終報告会などで使用しました。また、英語での発表が実施される期間には、自分の作成した原稿をプレゼンテーションし、意見をもらう期間を集中的に設けるなどしました。



■ 全校生徒

本年度から、全校生徒に対しても、学期に2回程度のウェブリオ英会話を実施しました。1年生は英語コミュニケーション、2・3年生は英語表現Ⅱの時間を活用し、それぞれCALL教室にてiPadを使用して、クラスを23名程度、約20分ずつを2回行いました。これにより英語のスピーキングの機会が増えました。当初は話すことに抵抗していましたが、2、3学期となると、ほとんどの生徒がある程度の会話は抵抗なく話すことができました。各学年でト英語の授業内容と関連するトピックを設定しました。2学期後半以降はさらに、トピックの内容をもとにパラ

グラフ・ライティングにつなげて、授業との相関性を高めました。

本年度全校対象であつかわれた主なトピック

実施時期	対象	トピック
1学期	全学年	英字新聞に基づく学校紹介・フリートーク
2学期	1年生	①夏休みの思い出について、②好きな映画と音楽について
	2年生	学校の制服着用は是か非か
3学期	1年生	行ってみたい国について(言語技術のナンバリングを使用して)
	3年生	GCPファイナルプロジェクトでの地球規模課題について
	全学年	スピーキングテスト(英検2級レベル)

D) クリティカル・ライティング・センター

■ 概要

創価高等学校(以下「本校」とする)では、スーパーグローバルハイスクール・アソシエイト(SGHA)の取り組みにて、校内独立機関としての「クリティカル・ライティング・センター(以下「CWC」とする)」「(2014年度:英語、2015年度:日本語)」を設置しています。高等学校でのライティング・センターは、日本国内において2校目の実践例となります。CWCでは「書くこと」を主軸に、ロジカル・ラテラルな思考を育む「クリティカル・ライティング」の対話型支援を行なっています。本項目では、そのうちSGH実践校における母語(日本語)ライティング支援の取り組みについて報告します。

本年度は、SGHの取り組みの中でも「言語技術(高校1年)」「GCPファイナルプロジェクト(高校3年・現代社会)」「GLP(選抜生徒)」に対し、CWCによる重点的な支援を行ないました。また、放課後のCWC支援では大学受験関連の相談を主に支援しました。これらの結果、高大接続としてのライティング能力向上のみならず、キャリア支援を通じたメタ認知能力・多角的な思考力の向上が明らかとなりました。そして、CWCの実践報告を日本リメディアル教育学会第12回全国大会(2016年8月開催)にて報告しました。最終的には、次年度に向け①教科を超えたライティングの取り組み拡大、②生徒・教員向けの広報活動、③CWC利用者のライティング能力評価、④ライティング支援そのものの評価の4点が課題として明らかとなりました。

■ 本校におけるライティング支援

教員によるライティング支援と支援方針

CWCでは平日週5日16:00-18:00にライティング支援を行なっています。英語はネイティブ講師1名・日本人講師1名が常駐し、日本語は常勤講師2名が常駐して対応しています。セッションは個別対応を原則とし、対話型のライティング支援を行います。

高等学校におけるライティング・センターで、教員が実際のチュータリングを担当するのは本校のみです。これにより、CWC と教科との連携が柔軟に可能となり、言語・思考力の向上を意識する機会づくりに成功しています。

また、CWC では思考力向上のためにも、「添削を目的としない」「対話による」ライティング支援を方針としています。よって、CWC では添削は行わず、ライティング支援の中では書かれたものの「評価」は基本的に行いません。ただし、「言語技術」や「GCP ファイナルプロジェクト」のように「授業」と連携して支援を行う場合には、指導的側面を考慮し、評価基準の策定などに関与します。

このように、本校では全校生徒が誰でも利用できる CWC を設置し、ライティングを通した言語・思考力の向上に取り組んできました。

■ CWC による取り組み実践

CWC と SGH 活動との連携：

- ① 言語技術（高校1年）
- ② GCP ファイナルプロジェクト（高校3年・現代社会）
- ③ GLP（選抜生徒）

まず、本年度が初年度の取り組みとなる「言語技術」では、高校1年生履修者全員のライティング（5～6本／年、400字以内）について添削を中心としたフィードバックを行いました。また、1学期には履修者全員に口頭（ペアワーク）での「問答ゲーム」実技試験を課し、それらをルーブリック評価しました。これらは、初学者が技術を実践的に習得していく機会を増加させました。

さらに、高校3年生の現代社会では、1学期の NIE (Newspaper In Education) 課題作成を担当教員と連携して行い、2学期には 2030 アジェンダを題材としたレポート課題やポスタープレゼンテーションの支援をスポット授業によって行ないました。高大接続を意識したレポートやポスター作成の授業では、構成の論理的説得力を意識するように働きかけました。

そして、選抜生徒を対象とする GLP では、毎回の活動で輪番による報告書作成を課しました。報告書は、「事実」と「意見」を区別することを前提とし、活動から学んだこと・得られたことを掘り下げるための課題としました。書かれた報告書には、Google Docs のコメント機能を活用して CWC から不明点や課題点を「質問」形式でコメントし、報告者本人によるリライトを課しました（リライトは1回のみ）。

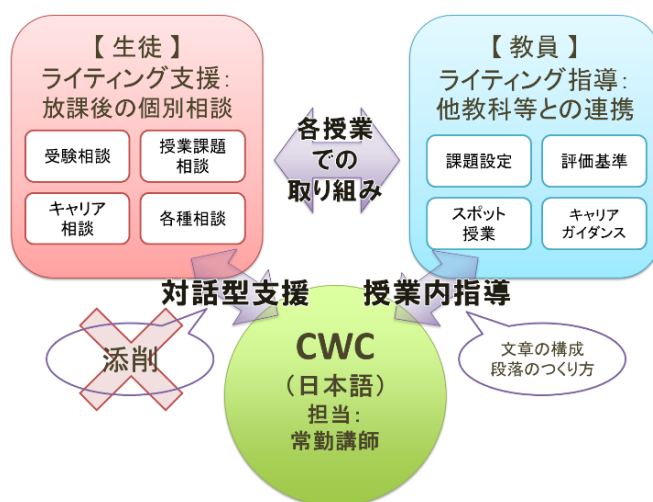
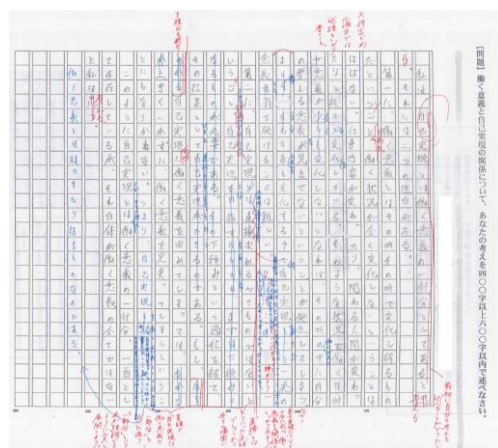


図 1 CWC の支援システム



3年生現代文の論述課題に対する指導

現代文ライティング指導

本校では CWC のチューターを常勤講師が担うため、担当講師1名ずつがティーム・ティーチングとして現代文の授業に入り、ライティング指導を行いました(週1時間、高校2・3年生、各2クラス)。毎授業内の「振り返りシート」を通し、表現することを習慣化したうえで、各定期考査に論述課題を課しました。3年次最後の論述課題では、対象者全員が論述課題を提出し、自らの考えを深めること、その考えを発信することと向き合いました。

放課後の CWC によるライティング支援

利用者の意識変化と利用者による支援評価

放課後の CWC では、主に大学受験関連のライティング支援およびキャリア支援を行ないました。CWC 利用者の利用目的は、5割が受験関連となります。志望理由書を中心に、小論文対策や奨学金申請書なども取り扱いました。また、その他のライティング支援として、授業課題や部活動等、文章の種類を問わず相談に応じました。利用者の実態を追うべく、CWC 利用後にはアンケートをとり、書くことに対する意識の変化を追いました。



ライティング・センターでの支援の様子

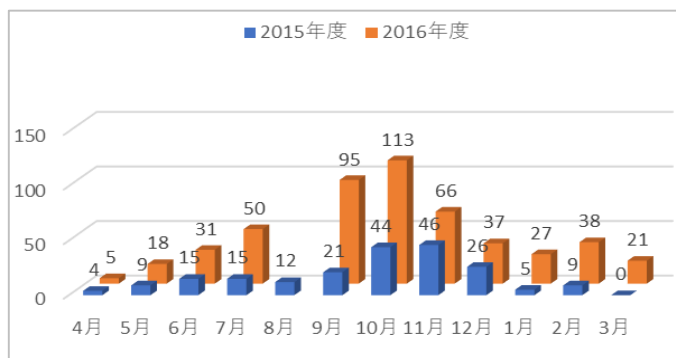
利用者実態の昨年度からの推移

2年間の CWC 運営の結果、全校生徒の利用は 69 人(昨年度)から102 人(本年度)に約 1.5 倍増になりました。要因は、教員内での CWC に対する認知度が高まったことと、利用した生徒から口コミが広まったことです。この利用人数は、全生徒の1割程度が CWC を主体的に利用したこととなります。

総相談件数では、205 件から 500 件へ 2.4 倍増となり、一人の生徒が複数回にわたって利用する傾向が増加しています。つまり、ひとつの課題に対し、生徒が時間をかけて CWC を活用しながら取り組んでいることを示しています。

昨年度および本年度の利用実態(学年別)

	1年	2年	3年	合計
2016年度	9	66	426	501
2015年度	4	35	167	206

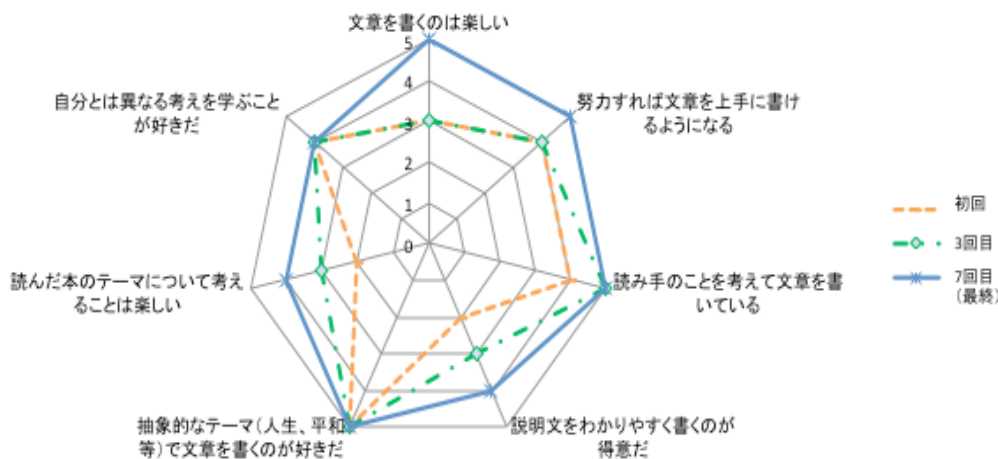


昨年度および本年度の利用実態(月別)

利用者の自己評価(アンケート結果)

CWC 利用者には毎回のセッション終了後に、アンケートを行い、利用者の変化を追っています。これは、支援効果を測定するための利用者自身による自己評価アンケートとなります。

ここでは、本年度に CWC を利用したある高校3年生 A の相談初回時から最終（第7回）時点での自己評価の変化を示しています。授業課題で訪れた初回時の時点では「説明文をわかりやすく書くのは得意だ」「読んだ本のテーマについて考えることは楽しい」の2項目について「2.たぶん当てはまらない」と自らを評価しています。しかし、相談最終時には、2項目とも「4.当てはまる」と利用者の意識の変化を確認することができます。



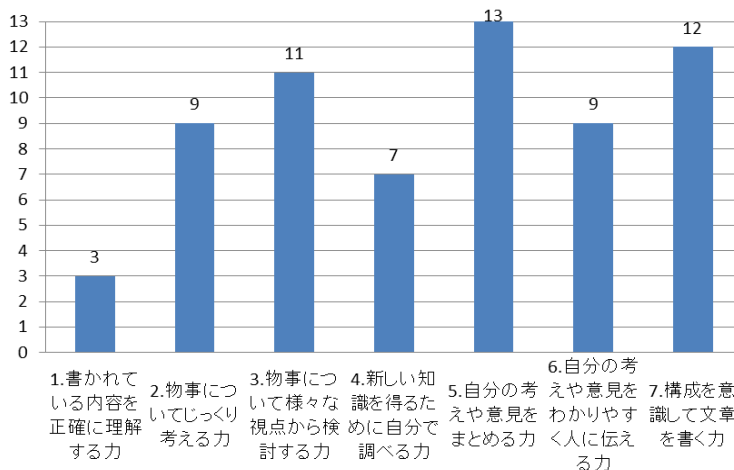
セッション終了後のアンケート結果

支援効果(卒業生アンケートの結果)

各回のアンケートとは別に、昨年度および本年度に CWC を利用した生徒13名に対し、CWC 利用による効果についてアンケートを依頼しました。

CWCを利用して得られた力(全7択、複数選択可)は、「自分の考えや意見をまとめる力」(100%)、「構成を意識して文章を書く力」(92.3%)、「物事について様々な視点から検討する力」(84.6%)が上位の3項目となっています。

また、「CWC を利用して、変化したことは何か」との問いに対する回答(自由記述)は、「自分の考えをまとめて相手に伝わりやすく書くことができるようになった」(生徒B)「自分の価値観を見直したり、文章を論理的に考える力が付いた」(生徒C)「新しいものの捉え方を知った。文にまとまりができた」(生徒D)「書くことへの抵抗感が和らいだ。アイデアがたくさん出た」(生徒E)というように、生徒自らがCWCの支援を活用し、考えること・書くことと積極的に向き合ったことが読み取れます。



CWCを利用して得られた力(アンケート結果から)

次年度以降の課題

2年間の CWC(日本語)実践によって、国語科だけではない、教科を超えたライティングの

取り組みが拡大しました。また、CWC による放課後の個別相談では、利用者の書くことに対する意識が前向きに向上し、CWC を利用することによる支援効果を確認することができました。これらをふまえて、SGH2年目となる次年度は、以下のことを課題とします。

まず、次年度においても教科を超えたライティングの取り組みに力を入れていく。その際、高大接続を意識した「教科から学問へ」の質的充実も図っていきます。また、CWC がどのような機関、どのような支援を受けられる場所なのか生徒・教員に対して一層の広報活動に力を入れていきます。そのうえで、CWC 利用者のライティング能力がどのように向上していくか、それを測定できる評価軸の策定を目指します。さらに、ライティング支援そのものの質向上に向け、どのような評価軸で評価すべきか、その検証も含めて課題とします。

SGH の取り組みをとおり、地球規模課題の解決に貢献するための言語運用能力の向上を目指します。その点を目標とした CWC 運営を行っていくこととします。

8. スコラ

■ 目的

時間管理能力育成(タイムマネジメントの指導法開発)

■ 実施

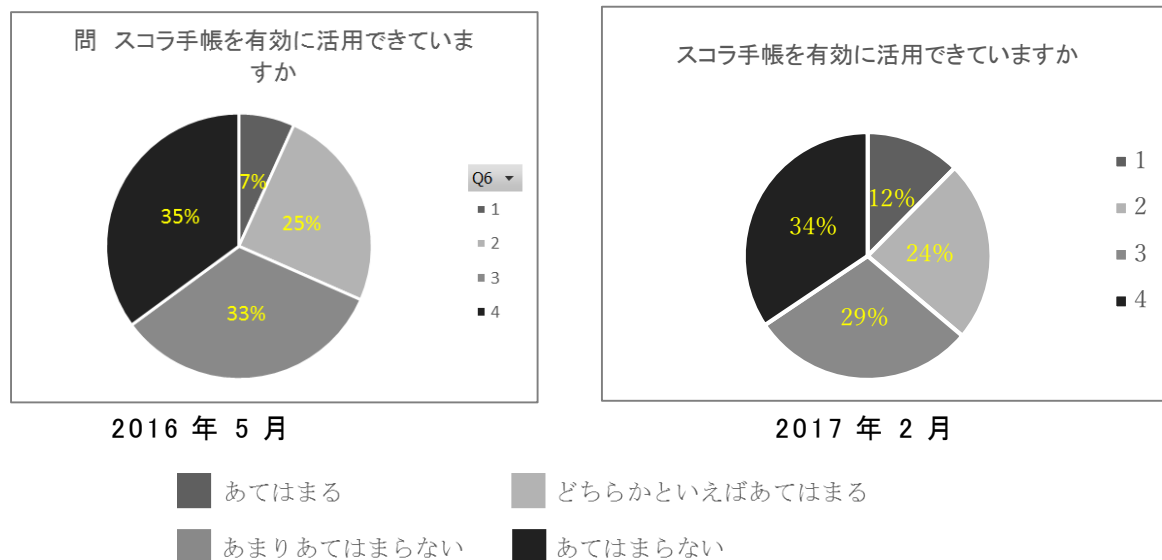
SGH の取り組みのひとつとして、生徒の時間管理能力を育成し、PDCA サイクルを習得させるため、時間管理手帳「スコラ」を全生徒に配布して活用しています。学園祭では校内手帳甲子園を実施し、公開掲示。もっとも評価の高かったものを、全国大会である「手帳甲子園」に応募しています。今回は「第5回手帳甲子園」(主催:NOLTY プランナーズ)において、本校生徒4名が各賞を受賞しました。全国より798点の応募があった手帳活用術部門では、竹内大瑛君(3年)が「優秀賞」(5名)を受賞し、宮下清美さん(3年)、大山将明君(2年)が「佳作」(14名)を受賞しました。また370点の応募があった表紙デザイン部門では、山老美桜さん(3年)が「佳作」(10名)を受賞しました。

12月17日(土)には事例発表研修会が行われ、5名の「優秀賞」受賞者のひとりとして、竹内大瑛君が手帳を活用した事例と自身の発見についてプレゼンテーションを行いました。



● アンケートより

週1回の振り返りの時間を用いて、生徒はよりよい活用を自主的に学んでいった。スケジュールは難しいものであるが、2016年5月と2017年2月に取ったアンケートでは、とても活用できているが7%→12%と増加しました。あまり活用できていないが33%→29%と、底上げもあった。



9. 評価と分析

A) 評価

1. 2016年度 主な全国大会出場

- ジャパンタイムズ主催の第1回全国中学校・高等学校英字新聞コンテストで英字新聞賞(優勝)
- 第11回英語ディベート大会で都大会優勝し全国大会出場
- 第21回全国中学・高校ディベート選手権大会に出場し全国3位
- NRI学生小論文コンテスト2016で優秀賞
- 第5回手帳甲子園で優秀賞1名、佳作2名、表紙デザイン部門佳作1名
- 人間の安全保障学会ポスターセッションで奨励賞
- 全国学生英語プレゼンテーションコンテストにゲスト高校生として初出場
- 日本リメディアル教育学会全国大会にて、日本語ライティングセンターの実践を報告
- 「第7回一緒に読もう!新聞コンクール」(主催:日本新聞協会) 優秀賞
- 「Panda杯全日本青年作文コンクール」(主催:中国大使館他) 優秀賞
- 「Travel×ITコンテスト(主催:JTBパブリッシング他) ファイナル出場
- 「第25回外国人ハングル作文大会」(主催:韓国文化院) 銅賞
- 「第60回全国学芸サイエンスコンクール」(主催:旺文社) 文芸小説部門入選

2. 英語能力検定試験合格者数

現在取得している人数

	1年	2年	3年	合計
英検1級	1	1	2	4
英検準1級	7	8	14	29
英検2級	104	136	163	403
英検準2級	182	174	205	561
英検3級	183	182	196	561
総計	477	501	580	1558

今年度取得した人数

	1年	2年	3年	合計
英検1級	1	1	1	3
英検準1級	7	4	10	21
英検2級	74	66	57	197
英検準2級	81	10	8	99
英検3級	7			7
総計	170	81	76	327

※今年度合格は、1級で4名中3名、準1級で29名中21名など、成果を出しています。

3. 2016年度 高3卒業生海外大学進学者数

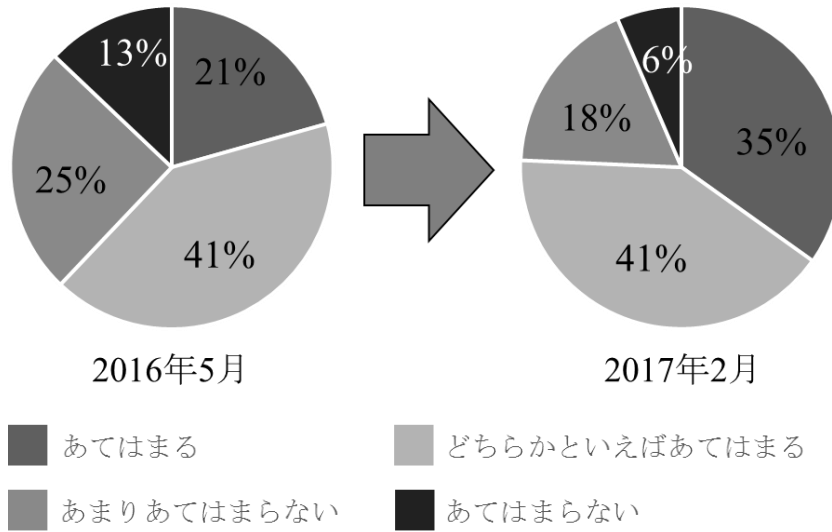
アメリカ創価大学	11名
イギリス・ハルトインターナショナルビジネススクール	1名
デンバー大学	1名
ウースター大学	1名

B) アンケートと分析

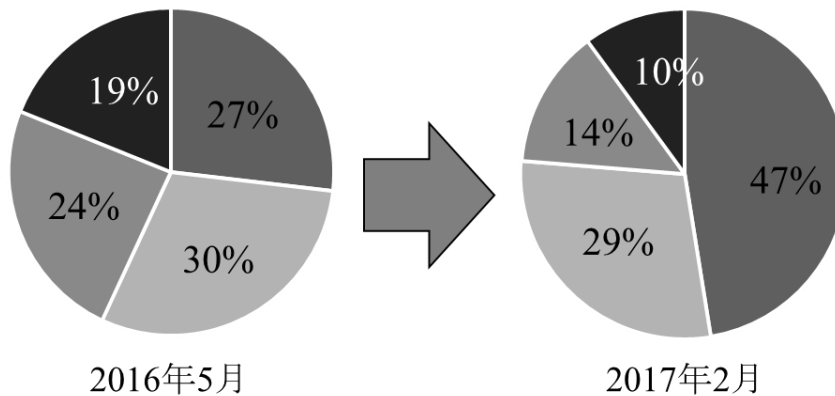
2016年5月と2017年2月の2回、SGH活動に対するアンケートを全校生徒対象に行ったところ、以下のような結果が得られました。

「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」という肯定的な回答の割合が、いずれの項目においても1年間で増加したことがわかります。

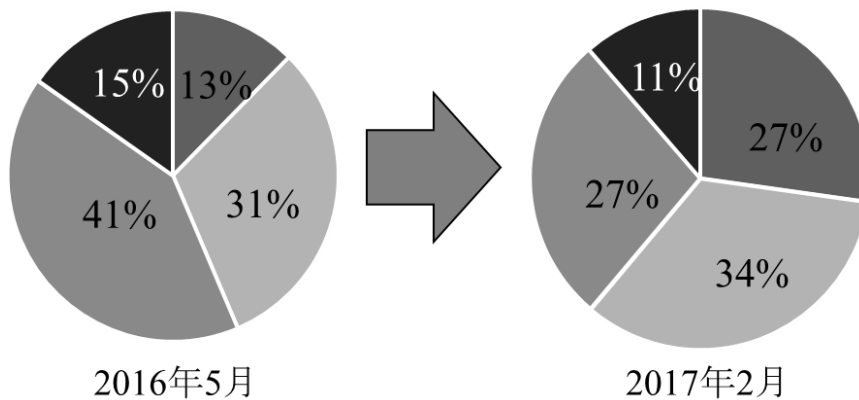
○あなたはSGHの活動に積極的に取り組みたいと思いますか



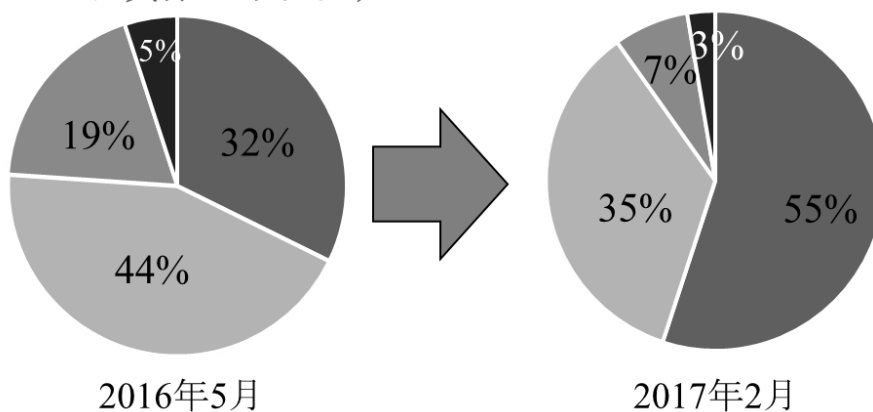
○将来、留学をしたいですか



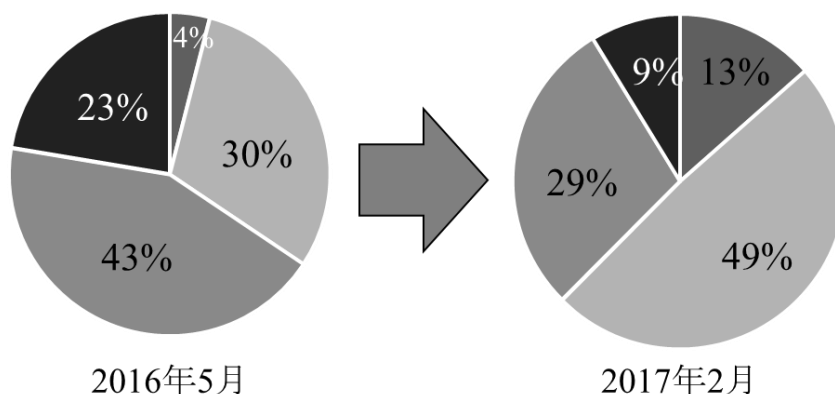
○将来、海外で活躍する仕事につきたいですか



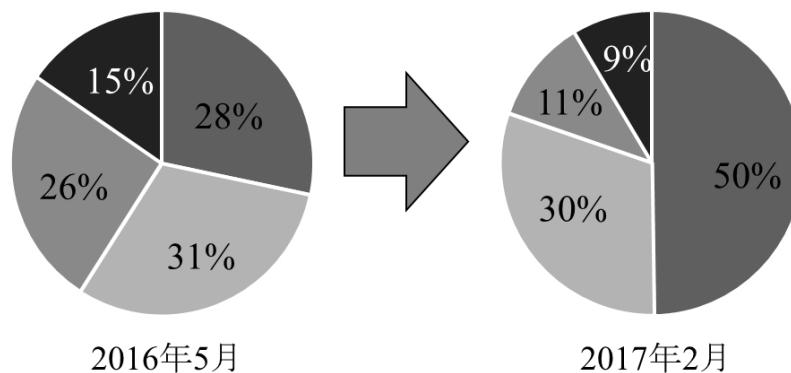
○地球的問題・課題（紛争・人権・環境・貧困等）についてのニュースに興味がありますか



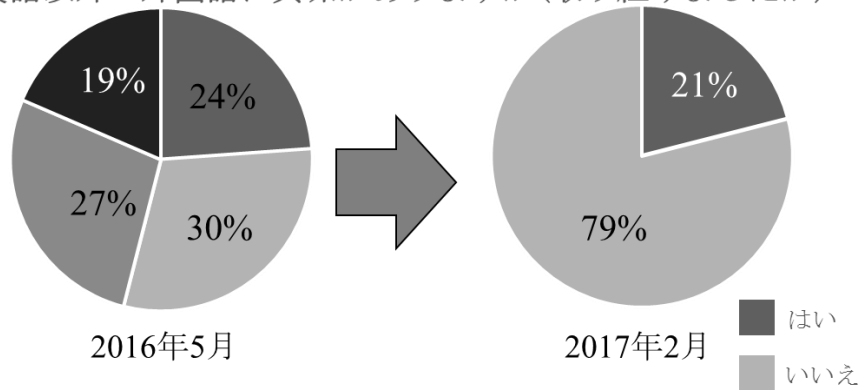
○クリティカルシンキング・論理的思考力は身につきましたか



○英検をはじめ、外部の語学試験に挑戦してみたいですか

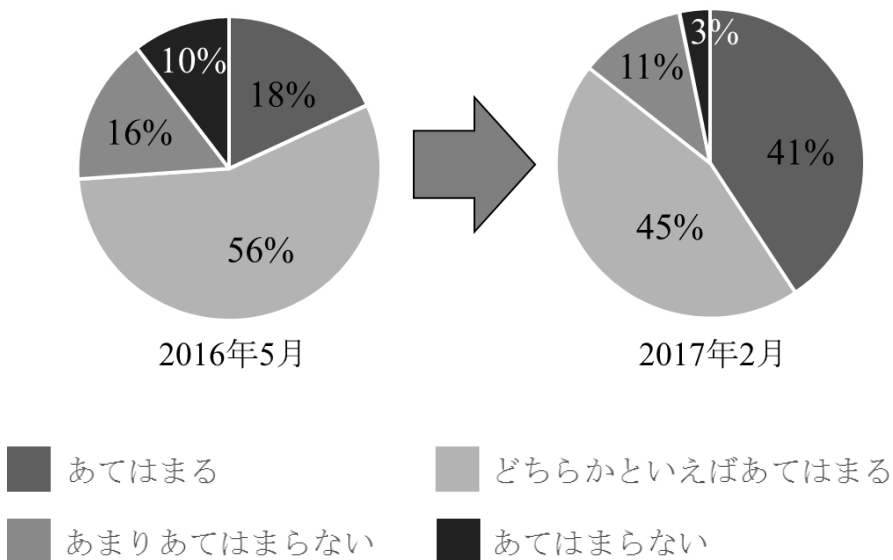


○英語以外の外国語に興味がありますか(取り組みましたか)



※ 5月では興味を、2月では実際に取り組んだかを調査。

○さまざまなワーキング(授業中の活動を含む)において、友達と協働して話し合って回答を出すことができましたか



C) 中間報告会・活動報告会・評価(声)

SGH 中間報告会

■ 10月29日(土)10時30分 会場:創価高校 栄冠ホール

■ 式次第

- 一、校長挨拶 木下校長
- 一、授業公開

1年・・・貿易ゲーム 2年・・・地域紛争学習 3年・・・模擬国連

一、昼食(コスモホール)

一、言語技術について 永嶋教諭

一、GCP FW 報告 生徒代表

広島・岩手・カリフォルニアフィールドワーク報告

一、GLP 活動報告 生徒代表

沖縄・カリフォルニアフィールドワーク報告他、スキル諸活動

一、講評・挨拶 遠藤教授

一、質疑応答

■ 講評 遠藤誠治 成蹊大学法学部教授

<全体を通して>

・素晴らしい時間を過ごすことができた。準備に要した時間的エネルギー、苦勞の成果が大変素晴らしい形で表現されていた。

・昨今の社会で要求されている「グローバル人材」では、英語、頭の回転の速さなどを要求している。これは大学のやるべき事ではない。創価高校は、「グローバルシティズンシップ」を育てようとしている点が大きな違い。

・「シティズンシップ」・・・生きていく人間自体に価値があるという考え方。その人間同士が紛争を起こす理由は、それぞれが「よりよい生き方」を求める結果である。「よりよい生き方」を求めて起こった紛争を、どうすれば解決できるのかが、今後、若い世代が向き合わなければならない大きな問題。創価高校の取り組みでは、これらの課題の現状と、それを解決するためにはどうすればよいのかがよく学ばれていた。

・創価高校の取り組みでは、精神論だけでなく思考・表現技術を身につけることを重視している。言語技術の報告が中間報告会の冒頭にきているのは、深い意味があると感じた。

<学習・経験の時空間的立体化>

・創価高校の取り組みの中で重要だと感じたのは、経験を「自覚化」し、言語で表現する力を高めようとしている点。経験を通して知識を深めること(deepen)、拡張していく(enlarged; 時空間的)ことに、言語技術的方法論が組み合わせれば、非常に良い成果を生み出すことができるだろうと考えられる。創価高校の取り組みはこれら3つを有機的につなげている。

・時間軸・・・歴史の学習。様々な体験を有効にするための事前学習。単に歴史的事実を学ぶだけでなく、現代社会とのつながりを意識した学習が重要。

・空間軸・・・フィールドワーク。同世代の生徒との交流、インタビューなどを通し、自分と異なる文化・年代の方と自分とを対峙させることで、知識が深まっていく。

・経験によって、事前に学習した内容が時空間的に立体化していき、これらが言語技術を通して他者に表現可能になるとともに、自分の中で新たな問いにつながる。

・こうした学習と経験を繰り返すことで、累積的、蓄積的、相互促進的に経験・知識が蓄積していき、人間としての器が広がっていく。

<問いを組み立てる力の重要性:大学との教育との関連>

・「学ぶ」ということは、問いを立てる力を身につけること。断片的な知識をどのように命題にしていくのかが、今後社会で求められる力である。

・大学の進学先として、経済系の学部への志願者が多い。就職には経済学部が有利との意識が保護者にも強い。就職という大きなスクリーニングのタイミングを前にして、短期的な解決方法を求めて、目の前の課題を解決するための「テクニック」を手に入れることができそうな経済学部を目指すことが多い傾向にある。しかし、目の前の課題にのみ対応できる解決策は持続しない。諸問題はますます複雑になり、一国だけでは解決できない課題が多い(一国の経済

開発が全地球的な地球温暖化問題につながる、など)。今の問題に対する解決策を授けても、すぐに応用できなくなる。永続性のある大学教育は、目の前の課題に対するテクニックだけでなく、問いをたてるために「調べる力」、「課題を発見し命題の形に整える力」を育てることである。課題を発見する力を若いうちから育てる必要がある。こうした能力をもつ人材を、「グローバル人材」と呼ぶべきではないか。学習を通して生徒の中に新たに生じてくる疑問を深めていけるような教員の関わり方ができれば、より面白い結果が得られるのでは。

例) 沖縄戦と日本兵の差別意識→現在の基地問題との関わり
核兵器と国際法→核兵器廃絶につながる道はどう描けるか。

< 協調的問題解決能力の重要性: 高校3年生模擬国連 >

・現代社会では、高い課題解決能力が求められている。特に、他者との協力ができるかどうか重要。今日取り上げたテーマはいずれも、人々の協力なくては解決できない「グローバルイシュー」ばかりだった。

・人間と人間の間には対立的関係も多い。何かの解決策を見いだしていくには「技術」が必要。「テクノロジー」「お金」といった解決策もあるが、法、政治、技術などを導入して相手を説得すること、人を組織化していく力が重要だが、通常の高校生活では得られない。

・午前のGCPで行われた高校3年生の模擬国連では、多くの生徒が交渉力を発揮していた。特に、良い案を提示しながらも、納得してもらえないという経験ができたことが重要である。お金、技術力の提供を提示しても同意してもらえないこともある。なぜ納得してもらえなかったのかという問いにぶつかり、自身を省みることができる。こういった場を教員と生徒が努力して作り出していることが素晴らしい。

< 言語技術の取り組みについて >

・言語技術の授業のみだけでなく、他教科とも連携し、様々な場面で言語技術が応用されている。日本語と英語で鍛えていくことも連動しており、生徒によく定着している。今後よい結果が得られるだろう。

・大学生の多くは、直感的・断片的に良い情報を得ているが、それらをつなげて体系的な「命題」とすることができない。これは、情報取得の方法に問題がある。映像やインターネットなど、刺激の多さに対し、情報のスクリーニングができていない。知識がどこに、どのように蓄えられているか、自覚しないままに吸収している。したがって、問いに対して断片的な情報を取り出すことはできるが、自分の意見を述べるまでにいたらない。

生徒に言語技術的な方法論を与えることで、探求すべき命題を自身の中に位置づけることが可能になる。現在、大学でも行っているが、できるだけ早い段階で行うにこしたことはない。創価高校の言語技術の取り組みはそれらに値するものであると考える。

「自分にとっての常識」は「他人にとっての常識」ではない。どこまでさかのぼれば同じ土俵に立って話ができるか、考えながら話すことが大切。話をする中で、共通基盤が作られていく。そういった意味で、会話を通して土台を共通化していくテクニックも重要である。

・異文化理解の重要性。国だけでなく、世代、育ちの違いも異文化である。そういった人たちに対する「想像力」を育てていくことが重要。

< 高校2年生 ルワンダ内戦について >

・「このようなことが二度と起こらないためにはどのようにすればいいのか」という最後の問いは、

非常に難しい、深刻なテーマ。

・人間の持っている能力は、悪い方向にも活用できる。現実社会において普通の人間では想像できないことが起こる可能性がある。ルワンダ内戦も、人を組織化する力（共犯者を増やす）、強いリーダーシップが悪用されて、あのような虐殺が可能になった。力の活用の方向をどのように制御していくのか、この答えはまだみつからない。ルワンダ内戦については、外からの大きな力をもっていか解決方法はなかったのではないか。少数の人を殺し、大多数の人を救うという決断も時には必要。大きな心の痛みを伴うが、それを覚悟してことにあたらなければならないこともある。この痛みを感じられることも人間の器の大きさ。

<生徒プレゼンについて>

・「できすぎている」と思うほどすばらしかった。これだけ準備されているのなら、原稿を捨ててもよかったのでは。

・相手を見て、話しかけるように説明することでより伝わる。双方向のやりとりを大切に。

◆ 【中間報告会アンケートより】

1, 授業公開の取組みについて

- ・どの学年も活発に話し、書き、本当に真剣に取り組んでいることがわかった。
- ・運営が生徒であることが素晴らしい。

2, 言語技術のとりくみについて

- ・グローバルシズンとして必要な言語技術を身につけさせる取組みは参考になった。
- ・スキルの部分を充実させることで、学校活動の満足度にもつながるという発想がよい。

3, GCP の取組み、生徒発表について

- ・生徒の姿を見て、グローバル市民を育てる画期的な教育だと思った。
- ・学びを共に実際に運営することでリーダーシップの育成になっていると思った。

4, GLP の取組み、生徒発表について

- ・よく一般に「グローバル人材の育成」というが何を以てグローバルと思うかがはっきりしない。貴校の掲げる「世界市民」という言葉は個人的には非常にしっくりくるものがある。
- ・全文英語のスピーチに感動した。堂々として立派だ。

SGH(最終)活動報告会

■ 2月18日(土)13時00分 会場:創価高校 栄冠ホール

■ 式次第

- 一、「言語技術」模擬授業 永嶋・石野教諭
- 一、校長挨拶 木下校長
- 一、言語技術模擬授業報告 永嶋教諭
- 一、GCP 報告 生徒代表
 - 1年間の振り返り、FW実施報告(JICA、ハンセン病)
 - ファイナル・プロジェクトを終えて
 - 3年ポスターセッション代表者発表(日本語2、英語2)
- 一、GLP 活動報告 生徒代表(3年生)
 - 英字新聞作成以降、映像制作、インタビュー(インド、フィリピン)、CIF

- 一、挨拶
- 一、講評

村上清 運営指導員
無藤隆 白梅大学教授

◆【講評】 無藤隆 白梅学園大学教授

・先日、小学校・中学校学習指導要領が発表された。その一つのキーワードはグローバル化である。グローバルの中身とはいったい何か。英語を上手になることだけにとらわれがちだが、英語は一つのスキルにすぎない。今後の日本、世界情勢を考えると、

①世界中で、同じような課題が同時発生している。いずれの課題も、人類がこれまで出会ったこともないようなものばかりである。(例：高齢化問題は各国で同時に進行している)→その解決方法を、海外の人たちとともに考えていかなければならない。

②1年後、10年後の社会情勢が読めない(例：イギリスのEU離脱、トランプ大統領就任他。これらを1年前に予測できたか?)

③AIの急速な進歩と台頭(携帯電話の進化)

④働き方が急速に変化する。今の高校生は、70才頃まで働かざるをえなくなるだろう(人生50年間は働く時代)。同じ仕事が存続することはほとんどない。同じ職種でも、仕事内容は変わっていく(学校教師等)・・・こういった時代を迎える中で、今後の大きな課題は学校では何を教えるのか、生徒たちに身につけさせるべきものはなにか、明確にすること。グローバル化とは、生徒、学校にとってどのような意味をもつのか、生徒と教師が一緒になって考える必要がある。

<グローバル化で重要なもの>

1. どんなグローバル化が起こっているのか知ること

日本国内のグローバル化・・・電車の中など。様々な国籍の人が周囲に当たり前のようにいる。

暮らしのグローバル化 例)青森のリンゴの輸出(中国方面)→人気によって作る品種が変化

世界中で行われる活発な貿易。東京オリンピックが一つの大きな転機に。

2. 多様な価値観や、文化、習慣を持っている人になじみ、そういった人とのやりとりの仕方を学ぶ。

3. 「将来、世界をよりよくするために自分も資したい」との意識。

今回の発表で、そういった言葉がたくさん聞かれた。大変に頼もしく思う。昨今の風潮では、自分のことばかりに意識をとられがち。世界的にみれば、困難な課題はたくさんあるが、それに寄与できる技術や知恵を日本人は持っている。それを海外に展開していこうとする熱意を持ってほしい

4. コミュニケーションツールとしての英語を使えるようになること

様々な仕事・発表の場面で重要なスキル。入試英語に目をおきがちだが、「英語の使い道は大学に通ってから考える」では遅い。高校時代、感受性が豊かな時に、学ぶ意味や何を学ぶのかを考えておくことが大切。

5. 表現の論理性

英語でロジカルに話せないということは、日本語でロジカルに話せないということの意味する。日本人は、内容の要約は得意だが、諸課題に対してどう思ったのか、どうするのかといった意見を言葉にできない。→言語技術をSGHのポイントとしたのは、プロジェクトのあ

り方として正しい。論理性の根幹が作られる。今後は、人類が共通に持つ諸課題を、英語を使って論理的に議論する能力が重要である。

6. 学ぶことの目的観

今後の学習指導要領のポイントは、いかに生徒を能動的にするかという点である。その際、ただ知識だけを詰め込むのではなく、その知識を使って何をしたいのか、将来何に役立てていきたいのかを生徒・教師が共に考えることが重要である。

教科で学んだことをいかに活かすのかは、学び手の責任である。入試に活かすというのはあくまでも短期的目標であって、もっと長期的に見たときにどうするか、学んだこと同士をどうつなぎあわせるか、将来の自身とどう結びつけていくかを考えなければならない。アメリカでは、何かを学び述べた際に“*So what?*”と問われることが多い。学んだ知識を活かして何をしたいのか、社会の営みとどう関連づけるのかを問いながら、学ぶ姿勢が重要である。

それを生徒一人に任せるのではなく、生徒同士の対話や、教師の導きによって共に考えていくのが、教育の今後あるべき姿であろう。

どの大学に入るのか以上に、「どう世界と関わるか」「いかに世界をよりよくしていくか」という意識が大切。それを、このプロジェクトを通して学んでほしい。

<全体を通して>

1. 創価高校の現在のプロジェクトのあり方は、今後の学習指導要領改訂のあり方につながっていくだろう。若い人たち、一人一人が人生を切り開こうとする努力が、日本の未来を切り開いていく。今日の発表から、そういった努力をしようとしている生徒が、この学校で数十名生まれていることがわかった。
2. 他のSGH校や他の学校と共鳴し、学びあっていくことで、さらによりよい取り組みになるだろう。

◆ 【活動報告会アンケートより】

- 1, 言語技術の取組みについて
 - ・先進的な授業で、このような科目がどの学校でも普通に行われると良いと思った。
 - ・英語と国語という教科の壁を越えた取組みの可能性を認識した。
- 2, GCPの取組み、生徒発表について
 - ・高校生のうちにこのような視点を持てたこと将来必ず役に立つと思う。
 - ・生徒たちが自ら活動していく発表をみて、指示待ちでなく自ら考える力が育つと思った。
- 3, GLPの取組み、生徒発表について
 - ・全文英語のスピーチに感動した。実践的英語力が高く、堂々として立派だ。
 - ・かなり高度なテーマに、語学力のみならず、人種・国境を越えて社会性等を学んでいる。
 - ・英字新聞制作は具体的でとてもよい学びである。



中間発表会 高3模擬国連



活動報告会 GLP 報告

D) 運営指導委員会

○第1回SGH運営指導委員会

日時:2016年6月4日(土)

参加者:無藤 隆 白梅学園大学教授 / 村上 清 岩手大学学長特別補佐
(学園)中川・太田・狩野・木下・江間・谷・石野・永嶋・前田(記録:今野)

式次第

- 一、DVD 鑑賞
- 一、運営指導委員紹介並びに挨拶 (木下校長)
- 一、SGH 担当教員自己紹介
- 一、取組の内容発表
- 一、言語技術について (永嶋教諭)

(指導委員)週に何回の授業ですか? 生徒にとってのきっかけにしたいのか日常的な練習にしたいのか?

○生徒にはトレーニングを意識して生活してほしいと訴えている。教員に対しても研修を行い日常の授業でも意識していくように取り組んでいる。

(指導委員)そもそも話したくない生徒もいるのではないかと押し付けにならないように工夫している点はありますか。

○日本は察する文化のため、細かく話す必要がない。しかし、英語圏では通じないという現実を伝えている。

○生徒は技術、ゲーム的な感覚で授業を楽しんでいる。

○ほとんどの生徒が楽しんでいる。

○言語技術は英語の勉強に役立つということを実感させることができている。日本語と英語の往還作業は効果があると感じている。

・GCP 企画(前田教諭)

(指導委員)GCPリーダーズの役割は?

○当日の企画運営をすべて担っている。

(指導委員)課題内容を調べる時間は確保していますか?

○とくに時間は確保せず、宿題にしている。調べ方も、キーワードを提示しているのでそれを

元に調べてくるように指示している。

○1、3年の違いはありますか？

○感想の内容の深さが違う。

(指導委員)1、3年で同じ内容にしたのはなぜですか？

○同じテーマで始めて3年で計画を完成させたい。

(指導委員)外務省でも地球規模的課題審議官室という部署がある。そこと連携が取れたら素晴らしいと思う。高校生が行っていることを知ったら喜んで様々な示唆を提供してもらえと思う。

・GLP 企画(石野教諭)

(指導委員)国連などの国際的な会議の場は、トイレとかで行われるロビー活動が多いところ。GLPの選抜はどのようにしていますか？

○エッセイで論理的な思考力を見ている。

(指導委員)選ばれなかった生徒の敗者復活があるといいですね。

○GLPの生徒がエリート意識を持たないように、全校に還元できるようにしています。

○カリフォルニアフィールドワークに行ける枠を全校に設け門戸を開けている。

○英字新聞の取組も希望者です。

(指導委員)カリフォルニアフィールドワークの内容は？

○国際人権に関する講義を受けます。

(指導委員)モンレーには行きませんか。

○今回は行きません。

(指導委員)国際人権に関してはモンレーが先進的に取り組んでいる。創価大学の卒業生もいるので連携してはどうか。また、アメリカの高校生が日本に来るので高校生どうしで交流するのもよいと思います。

(指導委員)英字新聞の取組は素晴らしいですね。

ご挨拶

村上先生

SGHの取組は関西高校に続いて東京校が指定されてうれしく思っています。世界に向けた視点とともに一人一人を大切に作る人材を育成していくことが大切です。

私自身は学園を受験して合格できませんでした。そのことをばねに頑張ってきました。創価学園の発展する姿が外の人たちの励みにもなります。その取組に関われることを光栄に思っています。

無藤先生

文部科学省のもとで学習指導要領の中身と課外活動の改革に関わっている。

国語教育の変化の中には、論理的な思考を追加する内容が含まれている。また、歴史について近現代史を追加し平和について学んでいく。そして、英語については「英語を学ぶ」のではなく「英語で学ぶ」方向に転換していこうと考えています。

これらの視点に創価高校のSGH企画は合致していると思います。

課題として、1つ申し上げれば、一部の生徒ではなく全体の生徒の力を伸ばすにはどうすればよいか考えてほしいと思います。

○第2回運営指導委員会

日時：2016年10月29日(土)

参加者：無藤 隆 白梅学園大学教授 / 村上 清 岩手大学学長特別補佐
(学園)中川・太田・狩野・木下・江間・谷・石野・江添(記録：今野)

(指導委員)報告会では、生徒一人一人の発表の様子が清々しかった。普段から努力しているようすがよく分かった。今日のGCP企画では、高校2年生のルワンダ内戦の学習を見せてもらったが、映像を盛り込み、全員が課題に対して真剣に考えていて素晴らしかった。ルワンダ内戦については、大学生でも「映像を見たくない」等と学習を拒否する学生もいる中で、よく学んでいた。

—— 最後の問い「二度とジェノサイドを起こさないために、必要なことは何か」というのは、広すぎる問いだったのではないかと思っている。

(指導委員)最後の問いには、「地球上のどこでも起こらないように」「ルワンダで起こらないように」という2つの視点がある。逆にこれ以上問いの幅を狭くすると意見が出づらくなる恐れがある。ある程度広いほうが、生徒自身が発想して意見をまとめることができるので、今回の問いは適切だったのではないか。また、他の虐殺の例を資料として配付したことで、その資料を活用して意見をまとめようとする生徒もおり、素晴らしかった。高校時代にこういったテーマを議論できたことは、生徒の中にインパクトとして残る。今後の進路や大学での研究テーマ選択に関わることも多いだろう。今回、GCPの授業を参観して、実施するまでの先生方のご苦勞が偲ばれた。SGHを運営する上では、教職員での協力体制の確立が欠かせない。教員に求められる資質・能力も、今後幅広くなってくるだろう。

—— SGH担当教員は現在14名程度。学校全体の取り組みにしていきたい。

(指導委員)昨今の学生を見ていると、課題を与えた時にもう一踏ん張りできる粘り強さを持った学生が少なく感じる。これは、「厳しい困難に立ち向かう経験の少なさ」が影響しているのではないだろうか。先生方も苦勞は大きいだろうが、この五年間の取り組みは間違いなく生徒の人生にとって重要な経験となるだろう。グローバル人材とよく言うが、英語力はあって当たり前前の時代が来ている。英語を使って何を発信できるか、人間力ある人がグローバル人材として要求される時代となっていくだろう。ところで、文科省からの助成は十分足りているか。

—— 現状は十分足りている。フィールドワークにおいては、生徒負担を食費のみに抑えることができている。

(指導委員)SGHは年限五年間の取り組みである。これからの五年間をきっかけとして、学校としてその先どうしていくのかを考えないといけない。創価高校の強みは、関西創価高校、創価大学との連携があること。相互の連携と情報共有を強固にしていくことが今後ますます重要になってくるだろう。

○第3回運営指導委員会

日時:2017年2月18日(土)

参加者:無藤 隆 白梅学園大学教授 / 村上 清 岩手大学学長特別補佐
中川・太田・狩野・木下・江間・谷・石野・永嶋・前田(記録:長谷川)

〈言語技術について〉

(指導委員)つくば言語技術教育研究所のメソッドを取り入れた「言語」の授業を、週1回学べるというのは非常に良いと思う。創価高校では英語との往還を取り入れており、興味深い。英語はどの程度取り入れているのか?

○英語を取り入れているのは、主に問答ゲームなど。日本語が中心ではあるが、英語を取り入れることは刺激になっているように感じる。つくば言語技術教育研究所のメソッドそのものを導入している学校は何校かあるが、それだけだと飽きてしまうという声を耳にした。途中で目的意識を見失ってしまうようだ。本校は比較的英語に関心が高い生徒が多いので、そういったことも英語を取り入れた経緯の一つ。

(指導委員)「言語」の授業を一年間やってみて、一番大変だったことと良かったと感じる点は何か。

○採点が大変だった。日本語添削をするアシスタント教員が現在2名いるが、それでも採点作業には膨大な時間がかかる。英語のパラグラフについては担当が私一人なので、提出させたものをフィードバックできていない状況。

良かった点は、「言語技術を使いなさい」というと、高校1年生はすぐに意識を変えられるようになっていること。職員室やアンケート記入の場面で、人に何かを伝えるということを意識できるようになっている。英検の記述問題等でも、「言語」の授業を受けている高校1年生は、他学年と比べて高得点をとった。

(指導委員)これまでのメソッドや取り組みをすべて蓄積することが大切。そして、これから来年再来年と積み重ねた膨大なものを、きちんとフィードバックする機会が必要だろうと思われる。それはそのまま、文科省にとっても価値のある研究資料になると思われる。

(指導委員)「言語技術」を担当の教員以外に、あるいは他科目にどう広げるかが重要。たとえば今日の模擬授業(永嶋教諭による「言語」模擬授業)にあった「ピザトーストの作り方」の説明スキルが活かされるのは、主に理科の分野なのだろうと思われる。理科の実験の過程や方法、考察などに「言語技術」が取り入れられた学習作りができれば、さらにその学習効果や可能性は広がるのではないか。

(指導委員)「ピザトーストの作り方」等に見られる、題材の優しさは高校生にとっては飽きるのではないか。しかし、レベルを上げると複雑でこれまた難しい。どうしても言語技術研究所のメソッドのままでは小学生向けなので高校生には適さないように感じる。反復が大切という話があったが、基礎編として研究所メソッドを使って、応用として高校の理科実験などを教材にしてもよいのではないか。

(指導委員)生徒が書いた文章の添削方法について、教員が添削するだけでなく、生徒同士で添削し合う機会があってもよいのではないか。生徒が相互に添削し合い、直し合うこと

を通して、学び合いが生まれる。

〈SGH 全体の取り組みについて〉

(指導委員)生徒の活動時の机・いすの並び方について、改善の余地があるように感じた。対面式で話すのは面接のようで、話しにくい。横並びの感覚を持たせると話し合いがしやすいかもしれない。たとえばコーヒーテーブルのようなイメージ。

(指導委員)スキルや学力が上の子、能力がアップした子、いわゆる「できる子」はそれでいい。では全校レベルで見たときにそこについていけない生徒はどれくらいいるのか。その層の生徒を対象に SIGH の取り組みとしてどのようなことができるのかは今後考える必要がある。○GCPはすべての生徒が対象。FWはどうしても全校では行けないので、全生徒から募集をして一部が参加するかたちをとっている。

○高校3年生のファイナルプロジェクトについては受験生をのぞいて高3全員が取り組んだ。

○ファイナルプロジェクトは、まず20のカテゴリーを教員の側から提示。そのカテゴリーの中から自分でテーマを選び、まず調べたものをレポートとしてまとめる。そのカテゴリーからさらに生徒一人ひとりが小テーマを設定して研究に取り組んでいくかたちをとった。

(指導委員)今年が SGH 初年度だが、どのような展望を持っているか。

○現在高1が言語技術の授業を受けているが、彼らが高3になって取り組むファイナルプロジェクトが現在目指している完成形。今年の3年生には、テーマの設定の仕方やプレゼンの方法を基礎から教える必要があったが、2年後実施する際には「言語技術」を学んだ生徒たちがどのような姿になっているかが楽しみ。

(指導委員)ファイナルプロジェクトはもっと発展できるのではないかと感じた。たとえばルワンダの研究について、これは現地の人が、あるいは専門家が聞いたらどのように感じ、考えるのだろうか。いろいろ情報を収集して、まとめた上で、さらに次の段階としてそれを社会に発信できる取り組み——いふならば、生徒個々の学びを本物の現実はどうつなげていくかが重要。科目に閉じないで、外に広げていくというのは、学問研究の共通の課題ではないか。

○外への発信が重要だということを痛感する。

○報告会でも話題になったが、やはり先生方のスキルというのがとても重要になってくる。先生方の研修等をさらに充実させていく必要があるようだ。

○本校では授業改革推進室を置いている。議題の一つとして教科会を変えていこうと取り組んでいる。もっと授業づくりについて教員同士で議論できる場に変えていこうという気風がだんだん定着してきたという感触を持っている。

10. 関係資料

① 2016年度カリキュラム表

教科	科目	標準単位	1年 (49期)	2年(48期)			3年(47期)		
				総合	文系	理系	総合	文系	理系
国語	国語総合	4	4						
	国語表現	3							
	現代文A	2							
	現代文B	4		4	2	2	3	2	2
	古典A	2							
地理歴史	古典B	4		2	3	3	2	3	2
	世界史A	2				2			
	世界史B	4		5	4			3	
	日本史A	2							
	日本史B	4			3		4	3	
公民	地理A	2							
	地理B	4	3					3	
数学	現代社会	2					2	2	
	倫理	2							2
	政治・経済	2							2
	数学I	3	3						
	数学II	4		4	4	4		2	
	数学III	5							7
理科	数学A	2	2						
	数学B	2			3	3	3		
	数学活用	2							
	科学と人間生活	2							
	物理基礎	2				2	2		
	物理	4				3			3
	化学基礎	2	2						
	化学	4				2			4
	生物基礎	2	2						
	生物	4				3			3
保体	地学基礎	2		2	2				
	地学	4					3		
芸術	理科課題研究	1							
	体育	7~8	2	2	2	2	3	3	3
	保健	2	1	1	1	1			
	音楽I	2	2						
	音楽II	2							
	音楽III	2							
	美術I	2	2						
	美術II	2							
	美術III	2							
	工芸I	2							
	工芸II	2							
	工芸III	2							
	書道I	2	2						
外国語	書道II	2							
	書道III	2							
	コミュニケーション基礎	2							
	コミュニケーション英語I	3	3						
	コミュニケーション英語II	4		4	4	4			
	コミュニケーション英語III	4					4	4	4
	英語表現I	2	2						
英語表現II	4		2	2	2	2	2	2	
家庭	英語会話	2							
	家庭基礎	2		2	2	2			
	家庭総合	4							
情報	生活デザイン	4							
	社会と情報	2	2						
総合	情報の科学	2							
	総合的な学習	3-6	1	1	1	1	1	1	1
LHR	LHR	3	1	1	1	1	1	1	1
学校設定	学校設定科目		1~5	1~5	0~4	0~4	4	4	
計	計		31~35	31~35	34~38	34~38	31	33	33

学校設定科目
 ※入学年度によって開講される科目が異なります

国語基礎演習、国語表現、国語演習、日本文学、外国文学、中国文学、世界史演習
 国際理解、環境と開発、平和と人権、宇宙と生命、総合数学、基礎数学、文系数学、総合解析
 総合代数、総合幾何、情報基礎、教養数学、現代物理、現代生物、現代地学、理科実習
 総合英語、リーディング応用、英語演習、中級英語、上級英語、リスニング中級、リスニング上級
 スピーキング中級、スピーキング上級、総合体育、生活と文化
 総合音楽、総合書道、総合美術、上級音楽、上級書道、上級美術
 公民演習、地歴演習、理科基礎演習
 言語表現Ⅰ、言語表現Ⅱ、言語表現Ⅲ
 世界市民探求Ⅰ、世界市民探求Ⅱ、世界市民探求Ⅲ

② 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）								
	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度	目標値(32年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
a	SGH対象生徒:		296人	人	人	人	人	700人
	SGH対象生徒以外:		250人	250人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 本校においては、他者への貢献に喜びを見いだすという価値観がある。このため自主的な地域清掃や、ボランティア活動への意識は高い。そこで自主的な社会奉仕ができる生徒を6年間で一層拡大していきたい。								
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
b	SGH対象生徒:		28人	人	人	人	人	70人
	SGH対象生徒以外:		25人	25人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 現在、学校が主催しているマレーシア公開大学への短期研修をはじめ、SGHA事業への取り組みによって海外への意識が向上している。さらに、グローバルな視野を広げるために自らすすんで海外での研修体験を希望する生徒が増加することが十分期待できる。								
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
c	SGH対象生徒:		61%	%	%	%	%	80%
	SGH対象生徒以外:		25%	30%	%	%	%	%
目標設定の考え方: 元来海外志向の強い生徒が多いが、SGHAのプログラムを通じ、より具体的な進路設計が行われ、将来海外に進出したいと考える生徒が増加している。また70%の生徒が進学する創価大学はスーパーグローバルユニバーシティであり、大学在学中の留学経験者が増加し、その後の海外進出者数も増加すると見込まれる。								
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
d	SGH対象生徒:		40人	人	人	人	人	40人
	SGH対象生徒以外:		15人	15人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 現在は日本語ディベート、英語ディベートが中心であるが、今後文系・理系の各種オリンピック、さらには各種言語のスピーチコンテスト・国連などで公募されている論文に積極的に参加することを奨励して拡大を図る。								
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
e	SGH対象生徒:		45%	%	%	%	%	80%
	SGH対象生徒以外:		25%	25%	%	%	%	%
目標設定の考え方: 3年生355人に対して、現在100名程度の該当生徒がおり、今後英検に加えてTOEIC、TOEFL、SATを受験することを積極的に推進し、英語力の向上を目指す。								
英語以外の外国語に取り組む生徒数								
f	SGH対象生徒:		87人	人	人	人	人	100人
	SGH対象生徒以外:		80人	80人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 現在3年生対象にスペイン語、ドイツ語、ハンガール語、中国語、フランス語、ロシア語の授業を選択科目として提供している。世界への興味が具体化するにつれて、英語以外の言語に対する関心がさらに高まると考えられる。								

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度	目標値(32年度)
課題研究に関する国外の研修参加者数								
a	6人	8人	18人	人	人	人	人	40人
目標設定の考え方: SGHプログラムの効果により、国外の研修に参加する生徒数は増加と思われる。学校責任の下で行われるプログラムとして現在マレーシア公開大学への研修があるが、今後もアメリカ・カリフォルニア研修をはじめ、さらに拡大していく予定である。								
課題研究に関する国内の研修参加者数								
b	100人	100人	110人	人	人	人	人	500人
目標設定の考え方: SGHAで今年度実施したフィールドワークを更に拡大・増強し、創価大学をはじめ近隣大学や博物館等の研究機関との連携をすすめ、研修にも参加することを推奨していく。								
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数								
c	2校	3校	5校	校	校	校	校	8校
目標設定の考え方: 現在、本校と連携を行っている海外大学は、アメリカ創価大学とマレーシア公開大学の2大学であるが、今年度インド・ブルーベルインターナショナル高校と連携を開始した。今後は、これまでも交流実績のある中国、韓国等の国際交流連携校を増やしていく予定である。								
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
d	100人	125人	142人	人	人	人	人	300人
目標設定の考え方: 学校設定科目「平和と人権」等で大学教員による講義が提供されている。また、イングリッシュキャンプでは多くの留学生と交流している。今後はスカイプを活用しての英語による連続講座等、外部人材参画の機会を増やす。								
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
e	50人	60人	76人	人	人	人	人	100人
目標設定の考え方: 年に1度のキャリアガイダンスおよび不定期に開催されるOBOG懇談会により現在50名程度の参加がある。今年はSGHAの取り組みの一つとして映像制作のために外部講師を招聘した。今後は、企業で活躍する卒業生などによるガイダンスおよび講演を定期的に行うなど、拡大・拡充を進める。								
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数								
f	150人	150人	155人	人	人	人	人	200人
目標設定の考え方: 現在は日本語ディベート、英語ディベートが中心に、今後文系・理系の各種オリンピック、さらには各種言語のスピーチコンテスト・国連などに公募されている論文に積極的に参加していく。								
帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)								
g	2人	3人	7人	人	人	人	人	12人
目標設定の考え方: 本校として、帰国・外国人生徒の受け入れを昨年より募集要項に明記した。これにより毎年数名程度の海外現地校出身者が入学している。SGHプログラムの導入に伴い、現地校に滞在経験のある子女の受験者数がさらに増加することが期待できる。								
先進校としての研究発表回数								
h	回	1回	3回	回	回	回	回	3回
目標設定の考え方: 年2回を基本として、SGHプログラムの研究成果を順次発表していく。								
外国語によるホームページの整備状況 ○整備されている △一部整備されている ×整備されていない								
i		○	△					○
目標設定の考え方: 外国語によるホームページは、英語・韓国語・中国語で整備されており、日本語版と共に随時更新している。								
CEFRのB1～B2レベルの教職員の割合								
j	25%	25%	42%	%	%	%	%	70%
目標設定の考え方: 自己研鑽の意識の高い教員が多く、グローバル人材育成のための環境整備を目指し、学校として語学検定の受検を強く推進し資金面でも補助する制度を開始した。								

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
全校生徒数(人)	1,077	1,063	1,056				
SGH対象生徒数			1,056				
SGH対象外生徒数			0	0	0	0	0



SOKA GAKUEN TIMES

Special Edition

FEBRUARY 2017

Fostering global leaders of the 21st century

Soka Senior High School in Tokyo was designated a Super Global High School (SGH) by the Ministry of Education, Culture, Sports and Technology in 2016.

The Global Leaders Program (GLP) is attended by 16 students at the Keisetsu Library in Soka Senior High School every Tuesday and Friday. The program is based on GLP's theme for 2016, "Our suggestions for the global issues in the viewpoint of nuclear disarmament, human rights and sustainable development."

In one of the main program activities, students did fieldwork in Okinawa and California.

In addition to other activities, GLP members try to acquire language arts, which includes the analysis of texts or pictures and conversation in a Q&A format. Also, they study about theoretical studies of nuclear weapons through many discussions



GLP members stand on the stage of the U Thant International Conference Hall at UNU.

FUJIE KONNO PHOTO

and lectures by experts.

GLP hosted eight lectures by 10 guests. Kevin Clements, the foundation chair of peace and conflict studies and director of the New Zealand National Cen-

ter for Peace and Conflict Studies (NCPACS) at the University of Otago, Dunedin, New Zealand, visited Soka Gakuen in May. In his lecture to GLP students, he talked about the poli-

tics of compassion in a world of ruthless power. Soka University professor Junzo Iida has taught GLP students about international human law three times since May.

GLP students went to United Nations University (UNU), a graduate school located in Tokyo that is contributing to solving global issues via cooperative research and education on May 26. There, Natsuko Imai, who works for the UNU Institute on the Advanced Study of Sustainability gave a lecture regarding Sustainable Development Goals.

Okinawa fieldwork toward a peaceful world

Eight GLP members visited Okinawa Prefecture for fieldwork from Aug. 10 to 12, 2016.

In this fieldwork, they learned about the Battle of Okinawa and interacted with local high school students to learn the tragedies of the war. The Battle of Okinawa was fought between the U.S. and Japan during the last part of World War II. It was the only ground war in Japan. In the battle, a quarter of Okinawa residents were killed.

Himeyuri Peace Museum

GLP members visited Himeyuri Peace Museum and Himeyuri Monument in Itoman, Okinawa. They listened to a story told by a war storyteller and a successor of war storytellers and learned about the Himeyuri students. They were a group that

consisted of 222 female students. They engaged in nursing injured soldiers during the battle. They did a variety of dangerous work such as performing first aid for the injured soldiers, helping doctors and digging air-raid shelters. As a result of this dangerous work, about a half of them — 123 students — were killed in the battle.

GLP members looked at the displays showing the photographs of each student's faces and details such as their characters and their school lives. In addition, members read the testimony collections of the students. The collections indicated that the students had been robbed of their opportunity to study because of the war. GLP members realized the pleasure of studying and they were motivated to study from seeing the displays.

Gamahuya group volunteers excavate soldiers' bones

GLP members visited the excavation site of the battle of Okinawa where the bones of dead soldiers have been buried. This excavation activity is done by the volunteer group Gamahuya. "The bones are the weak who cannot say anything. To defend their human rights, we, as the survivors of the battle, need to return them to their family" said Takamatsu Gushiken who is the representative of Gamahuya. He has undertaken the activity by using his holidays for more than 30 years.

In addition, Gamahuya did a large-scale excavation from October to December 2009, supported by Japanese govern-

List of Experts Who Delivered Lectures

NAME	Position
Kevin Clements	Professor of University of Otago
Junzo Iida	Professor of Soka University
Natsuko Imai	Programme Assistant of United Nations University
Tetsuo Kondo	Director of United Nations Development Programme Representative Office in Japan
Eiji Yamamoto	Ambassador of Japan to Timor-Leste
Yoshinobu Tatewaki	Unit Head, Portfolio Management of Bangladesh Resident Mission of Asian Development Bank

By Yuya Okada, Maia Yamashita and Kazumi Yamamoto

CONTINUED ON PAGE 2

JAPAN

Japanese students lacking in enterprise for global issues

In Soka Senior High School (Kodaira, Tokyo), GLP members are learning global issues, and we surveyed students in Tokyo, Okinawa and California about peace and human rights as a part of our GLP research. We found the Japanese students are on the defensive on global issues. This summer, GLP members went to Okinawa and California for fieldwork. The reason why we conducted this survey whose respondents live in the three areas is that we wanted to know differences of attitudes by area.

The question "What kind of human rights issues are you interested in?" (Chart 1) illustrates California students have more concerns than Japanese students do on all of the issues. Japanese are interested in refugees and immigrants' rights more than other issues such as women's rights and LGBT's rights.

The second question "How often do you talk about war (current conflicts, terrorism, etc.) with your family and friends?" shows that the number of people answered either "often" or "sometimes" in California is larger than that of the Japanese. We found Japanese students answered "being interested in refugees and immigrants' rights," but they do not exchange their opinions

about conflicts with their family and friends (Chart 2). This result displays that Japanese students have a low problem consciousness and are backward in terms of human rights issues. Meanwhile, we can see that California students are keenly interested in human rights problems and their attitude to exchange opinions with their family and friends.

The third question "Where have you heard about the practical experiences of war before?" (Chart 3) shows a difference in the areas. In Okinawa, the number of respondents who answered "at school" were much more than the other two areas. We can see there are war experiences passed down as school education because Okinawa is the only place a ground battle occurred in Japan.

Responding the same as Okinawa, "at school" is also the top answer in Tokyo, while we can see it followed by "on TV or the internet." Still, "on TV or the internet" produces much higher numbers in California students, showing that California students are trying to search and get information proactively by themselves when they are studying on practical experiences of war. Japanese students, again, take less action.

This survey was conducted

CONTINUED FROM PAGE 1

ment, which hired 55 people, the homeless and poor together. This succeeded in collecting 175 people's bones, and encountering the soldiers' bones was to become a life education for the participants who might have given up living a happy life.

Now Gushiken is struggling to build systems to return the soldiers to their homes by identifying the bones through DNA examinations.

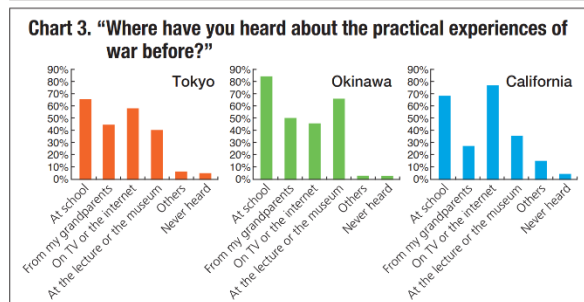
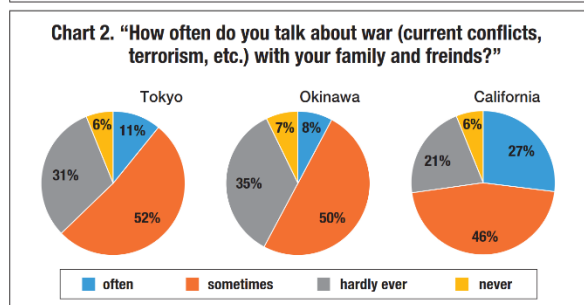
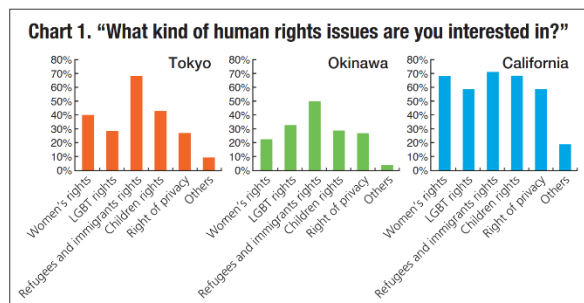
GLP members entered the cave where people had hidden during the battle. They touched personal items that have remained since those days and

found the cave very dark and muddy. This experience cannot be learned by just reading textbooks. It gave them a deep impression.

They could understand the need for achieving peace after touching the bones. Then, they realized that such a real experience that makes them learn the tragedy of war is very important for young generations to not repeat wars.

Interaction with Okinawa students

Students from Okinawa Prefectural Naha Kokusai Senior High School, which, like Soka,



on students in three places: Soka Senior High School, Naha Kokusai Senior High School (Okinawa), University

of California, Irvine from August to September 2016.

By Risa Torigai and Ami Hiraoka

is also certified as a Super Global High School. Students from both schools discussed various topics such as their desire for peace.

After cultivating friendships through the discussion, they went to Mabuni Hill where many people had jumped to their deaths during the Battle of Okinawa. They also went to Foundation of Peace, which is composed of stone monuments. The names of all the war dead are carved on each monument without the distinction of nationalities and whether civilian or military. Students shared the time and pledged to build peace.

GLP members deepened understanding of the history of Okinawa and the tragedy of the war through interaction with local people during three days of fieldwork. "I will make efforts to build a peaceful world after this fieldwork experience," one of the members said passionately.

By Masami Shibata and Yuka Nishiura

NOTICE TO READERS

The Soka Gakuen Times was created by 16 members of the Global Leaders Program (GLP) of Soka Senior High School in Kodaira, Tokyo. The members illustrate the results of their research on global issues.

WORLD

GLP members visit California

Sixteen students of Soka Senior High School took part in fieldwork in California to learn about war and peace from Aug. 20 to 27.

On the second day, the students visited the Simon Wiesenthal Center Museum of Tolerance and the Japanese American National Museum in Los Angeles. They learned about the Holocaust and Japanese internment. Students also had a chance to learn how important it is to have generous views.

The students of GLP stayed at the University of California, Irvine (UCI) for six days, from

Aug. 21 to 26. The students attended three lectures on sociology and they presented their papers on peace studies to Tustin High School students and UCI undergraduate students. They had exchange meetings and campus tours with UCI students from Aug. 22 to 25.

They visited Soka University of America (SUA) on Aug. 25, where they took part in a campus tour and attended a lecture by Michael Weiner, an SUA professor.

By *Maia Yamashita, Yuya Okada, Kazumi Yamamoto and Hisami Hojo*



GLP students conduct a survey in the U.S.

MASAYOSHI ISHINO PHOTO

What is international human rights law?

Junzo Iida, a Soka University professor, and David Kaye, a University of California, Irvine, professor, lectured on international human rights law. GLP members watched movies about what human rights are on the United for Human Rights website in Iida's lecture. In Kaye's lecture, the Soka students learned about progress in the development of the international human rights law. The following is essential information to understand what international human rights law is.

Q: What is international human rights law?

A: International human rights

law is one of the international laws, which are made commonly through ratification or accession.

Q: When did human rights become a big international issue?

A: In 1948, the United Nations Human Rights Commission made the Universal Declaration of Human Rights (UDHR) in order to prevent human beings from further massacres like the ones in World War II. UDHR does not have legal validity. UDHR became the source for various international human rights treaties.

By *Naomi Tamagawa and Yoshimi Kondo*



David Kaye lectures California fieldwork members.

MASAYOSHI ISHINO PHOTO

Changing our consciousness on nuclear weapons

Seventy-one years ago, the explosion of nuclear weapons killed more than 200,000 people, and left many suffering from terrible nausea and deformation of their skin. Since chemical weapons and cluster bombs have been banned because of their inhumane slaughtering method, we should prohibit nuclear weapons due to the same cruelty as chemical ones. In addition, their existence makes people vulnerable; the economic damage by radioactivity violates the dignity of life. In an effort to find a way to abolish nuclear weapons, we studied about whether it is appropriate for atomic weapons to exist. In concrete terms, we judged if we can deny the existence of atomic bombs through international law under the notion of security.

First, using nuclear weapons is a violation of international law. The reason is that nuclear

weapons generate radioactive materials that destroy the environment and crops. International law bans the destruction of the environment and crops during wartime. In addition, using nuclear weapons for self-defense is dangerous because the defense can escalate into an annihilating atomic war. The International Court of Justice demands to avoid such cases. Thus self-defense by nuclear weapons is an undesirable way. However, since there are a variety of interpretations of using atomic bombs, the current situation of this problem is very severe.

Second, we protest nuclear weapons from the perspective of security. From the view of national security, the atomic bombing of Hiroshima and Nagasaki enabled the U.S. to profit, increase the United States' presence and speed the end of the war. In addition, it has deterrent

effect to hold nuclear weapons because some terrorists and rogue states exist in the present world. However, since the 21st century, when some researchers have come to insist on human security, the use and possession of nuclear weapons incur a loss from the perspective of human security. That is to say, the conceptual conflict between national security and human security has occurred. Generally speaking, however, they do not regard national security and human security as a confronting concept but a complementary one. Regarding the fact that the usefulness of nuclear weapons is recognized for the sake of national security, states should make a complete paradigm shift. This means we have to change our thinking from national security to human security in order to aim for nuclear abolition.

Like these, it is difficult to

discriminate whether the existence of nuclear weapons is right by current international norms. In addition, each interpretation of criteria like international law differs depending on their thoughts. In other words, this problem is really delicate; the road to nuclear abolition may not be smooth. Actually, when we presented the results of our research work like above to some American high school students, they were embarrassed because they thought that nuclear deterrent maintained peace. This embarrassment shows the difference of thoughts on atomic bombs. When we approach nuclear abolition from international law or security, we are required to change our consciousness on nuclear weapons.

By *Yuya Okada, Arashu Onodera and Sakura Mori*

INTERVIEWS

[SGH×SGU*] What I learned from GLP

Two GLP students interviewed Taiga Baba, a member of the first GLP class. Currently, he is a freshman in Jurisprudence Department at Soka University. On campus, he is a part of Global Citizenship Program (GCP), a specially designed class to foster global citizens. In GCP, 30 students are selected to study for a foundation in many fields.

What is your best memory in GLP?

My best memory in GLP is fieldwork in Hiroshima. I was impressed by the stories told by Hibakusha (atomic bomb survivors). They talked about how they had survived after being bombed and illness caused by radiation. I found that the stories of Hibakusha were not known to the general public through the media, thus it is important to dialogue and hear these stories firsthand.

Do you find similarities between GLP and GCP?

GLP provides basic skills for GCP activities. Both programs conduct a poster-making workshop, interviews and fieldwork. Through these activities in GLP, I gained presentation skills, logical and critical thinking skills, research skills and communication skills that are all useful in GCP. Next February, I'm going to the Philippines for fieldwork

and, with the skills I developed in GLP, I hope my fieldwork will be better than it would have been able without my GLP skills. Also, taking an online English conversation lesson from Filipino teachers regularly and talking with Indian high school students helps me a lot.

Compared with other GCP students, I feel I can communicate with English native speakers more. Above all, I'm not afraid of people from different backgrounds.

Please give some advice to current GLP students.

I believe that in SGH, GLP is the only program that combines the opinions of SGH and the philosophy of Soka. How fortunate the students are, to experience these activities at their age! With further learning opportunities as SGH, I hope the students lead Soka schools through their efforts. Moreover, I hope the students create a new tradition as pioneers with a wide perspective. It is also important to remember that GLP has the mission to bring fruit to the effort of the school.

By Shunji Fueki and Tsugumi Minami

*The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology designated Soka Senior High School and Soka University as a Super Global High School (SGH) and Super Global University (SGU), respectively.



Taiga Baba, a GCP student at Soka University

SOKA GAKUEN PHOTO

Alumni recommend peace museums

In June 2015, students of inaugural GLP class visited peace museums in Tokyo, comparing the perspectives of exhibits. Masayuki Oyama and Nene Inoue — members of that first GLP class — introduce peace museums in Tokyo.

Oyama recommended the Korea Museum, “You will develop your interest in Korea and deepen your understanding of Korea,” he said. “In addition to the comprehensive history of the relationship between Japan and Korea, this museum displays Korean culture and drama. The display is created from a Korean perspective, which is a rare case in the museums we researched.”

Inoue visited the Memorial

Museum for Soldiers, Detainees in Siberia and Postwar Repatriates.

In this museum, the displays are designed to tell the suffering of Japan's World War II soldiers, detainees in Siberia, and post-war repatriates. “You can find precious historical antiques. Wearing a diorama coat of Japanese laborers at Siberia was very moving” Inoue said. This museum is looked after by the Ministry of Internal Affairs and Communications.

Like this research on museums, GLP conducts programs to learn about a wide range of perspectives.

By Shunji Fueki and Tsugumi Minami

What are language arts?

When someone asks Japanese “Do you like cats,” some respond only “Yes” or “No.” On the contrary, Westerners reply like “Yes I do. I like cats because I can breed them easily. So I am fond of cats” to this question. They learn language



GLP members learning language arts in a group with teachers.

arts since their entrance into elementary schools. According to Tsukuba Language Arts Institute, language arts is a subject, in which students think logically and express to make their counterparts understand through smooth communication.

Soka Senior High School has adopted language arts this year to train students so that they will play an active role in the world. In this class, for example, students play a question and answer game in which they repeat answering logically to simple questions such as the

one mentioned above. They also learn how to analyze pictures and sentences critically. All of these activities are supposed to be done in mother tongue.

Now, imagine playing the Q&A game. There are two things that require attention. Firstly, specify both subject and object in speaking. Secondly, describe in the order of conclusion, reason, and conclusion again. Based on these points, answer this question, “Do you like English?”

By Shinsaku Takikawa and Kanon Goto

SOKA GAKUEN TIMES

Published by Soka Senior High School in Kodaira, Tokyo, in cooperation with the not-for-profit Global Education Information Center (GEIC) and The Japan Times, Ltd.

Publisher: Seichi Kinoshita, Principal, Soka Senior High School

Project Supervisor: Masayoshi Ishino, Tsubasa Togawa, Fumie Konno and Kanichiro Ochiai (Soka Gakuen)

Project Coordinator: Junji Sakurai (GEIC)

Editor: Shunji Fueki

Assistant Editors: Hisami Hojo and Arashu Onodera

Contributing Editors: Minoru Matsutani, James Soulliere (The Japan Times) and Miki Tanaka

Staff Writers: Tsugumi Minami, Naomi Tamagawa, Yoshimi Kondo, Yuka Nishihara, Kanon Goto, Sakura Mori, Ami Hiraoka, Risa Torigai, Shinsaku Takikawa, Maia Yamashita, Yuya Okada, Kazumi Yamamoto and Masami Shibata

Contact: 2-1 Takanodai, Kodaira-shi, Tokyo 〒187-0024

Website: <http://www.soka.ed.jp>



SOKA GAKUEN TIMES

Special Edition

March 2017

Special measures taken to improve language skills

Soka Gakuen has placed high priority on language learning since its foundation, and after being named a Super Global High School (SGH), the language focus has been strengthened. As a person's second language won't be more advanced than their native tongue, language arts classes began at the school in April 2016 to improve both Japanese and English proficiency. The main training is done through games and lectures that encourage telling ideas to a partner accurately. Language arts teacher Toshiaki Nagashima said: "Language is thought. I hope students become global citizens who analyze things definitively, and who can respect diversity."

The scores of the writing section of the 10th graders who took the EIKEN Test in Practical English Proficiency second grade this year, were the highest in the school.

Another example of Soka Gakuen's focus on language education is encouraging students to speak with non-Japanese via Skype in cooperation with the Weblio company. These activities get students used to speaking



Students have a discussion using their dialogue skills obtained in the language arts class.

with non-Japanese and the aim is to help students be less fearful of making mistakes.

According to Masayoshi Ishino, English department chief, "Listening and talking is an elementary step in English, so these activities contribute to improving overall English skills."

Moreover, English conversation class not only focuses on speaking and listening skills, but also presentation is taught by an assistant language teacher. Presentation is a particularly suit-

able tool for English language learning. It is because discussion with each other is made on subjects such as the environment, poverty, morality and the like, and students make presentations on them in front of other people. Through talking with others, the abilities to think, absorb knowledge and communicate information accurately can be acquired.

In addition, students do extensive English reading. It means reading many books in English. In the school library, there are

about 2,500 English books ranging across six levels for extensive English reading, allowing students to read whatever they like.

Through extensive reading, students can get accustomed to reading large volumes. This helps students acquire vocabulary, master grammar and improve their ability to read quickly in English.

In view of such efforts, one can see why Soka Senior High School has been designated a SGH.

Studio Ghibli president speaks on the role of global citizens



Koji Hoshino, president of Studio Ghibli, speaks at Soka Senior High School on Nov. 17.

Koji Hoshino, president of Studio Ghibli, Japan's most famous anime movie company, delivered a speech in commemoration of Wisdom Day at Soka Gakuen on Nov. 17, 2016. He spoke under the theme of "Global Citizens Who Play an Active Part in the World." In his speech, he noted three important points necessary to being global citizens: be a powerful person for people; take chances your own; and keep passion in your heart.

Shiho Ohashi, one of the Soka students who attended the lecture, offered her thoughts. She

said: "I feel I need to think about various processes and do everything from now with all my energy, because my dream is enormous. Also, I noticed that people who became great followed a certain way to become that way and produced their fortunes in this way."

Seiichi Tsunehara, Wisdom Day chairperson said: "Mr. Hoshino's lecture was very good. I was moved that Mr. Hoshino's life was hard and he worked to overcome hardships. I also learned that patience is very important."

ACTIVITIES

Students keep their spirits up with *aisho-ka* school songs

Many school songs are *aisho-ka*, or well-loved songs that have encouraged students since Soka Gakuen was established. The lyrics of our songs show a bond with school founder Daisaku Ikeda and school spirit. Soka Gakuen has more than 100 *aisho-ka*. An *aisho-ka taikai*, which is a gathering to sing such songs is held by volunteer students in the mornings and on lunch breaks. Thus, *aisho-ka* have shown to be loved by students.

According to a questionnaire done in December 2016, 92 percent of all students have taken part in *aisho-ka taikai*, and 78 percent of students were encouraged to take part in them. The most popular *aisho-ka* is “Make-jidamashii-Kokoniari” (Our undefeated spirit). It is sung by students very often. For example, at the end of the *aisho-ka taikai* every morning, students sing this song, and the song is always sung at the beginning and end of each semester.

This song was created by the founder and students. Students sing with determination and loyalty to the founder. In this song, one of the lyrics says, “Study, learn and be victorious the world over! Undefeated spirits filled with joy.”



Students sing a school song during an *aisho-ka taikai* on their lunch break.

Another popular song, “Zenshin-no-Uta,” (Moving forward) was composed before Glory Day in 2016. Glory Day is a day before the end of the first semester on which students learn the spirit of this school. Every year, before Glory Day, a new school song is composed by members of a club tasked with composing a song for the year. “Zenshin-no-Uta” is sung not only on Glory Day. For exam-

ple, it is sung at the opening and closing ceremonies of the second semester. This reminds students of their Glory Day determination.

Naomi Tamagawa, a senior who worked on composing the song, talks about making a school song.

She felt a sense of responsibility and mission. Gakuen students wanted to include challenge, friendship and loyalty to

the founder. She said, “The song gives us the actual feeling and pleasure of being students at Gakuen.”

The oldest school song is “Tomoyo” (Dear friends), which was composed in 1970.

Regarding *aisho-ka*, Seiichi Kinoshita, principal of Soka Senior High School, said: “A song brings me passion. When I sing school songs, I can summon my determination.”

Long-running peace efforts continue with today’s students

On Oct. 2, 2016, the 16th Peace Symposium was held at Soka Senior High School. The symposium welcomed prominent intellectuals as panelists in a discussion with two high school students on the theme of global problems such as war, refugees and earthquake disaster. The theme was “Growing problems of Refugees — How to Face Them.” We welcomed Megumi Nakamura, a former staff member of UNHCR, from the Japan Association for UNHCR, and Takehiro Hozumi, a program manager at the Tokyo office of the Association for Aid and Relief, Japan, as panelists.

Sae Sonoda, the leader of the symposium, said, “When I acquired the ability to not only gain knowledge about peace,



Students involved in the 16th Peace Symposium pose with the two guest panelists.

but also think on my own through the knowledge, I feel the work is worth doing.”

This symposium was inherited by students who seriously studied world peace and thought of

making efforts only students can make. Their idea was triggered by the Sept. 11, 2001 terror attacks in the U.S. In October of that year, some students decided to adopt the founder’s concept

of peace and promote it from Soka Senior High School. That year, the first peace symposium was held under the theme of “How to Fight with Nonviolence.”

Shunji Fueki, the vice leader of the symposium, said: “I hope that through developing the symposium, more students think about social issues closely stimulated by friends thinking deeply about peace. I also hope such students think and do what they can to tackle problems such as donating to charity activities.”

Students think and create solutions by themselves. The world situation is now about to change significantly. Young people interested in taking action to make peace will become more important.

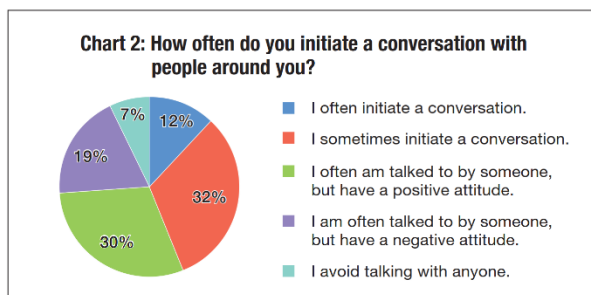
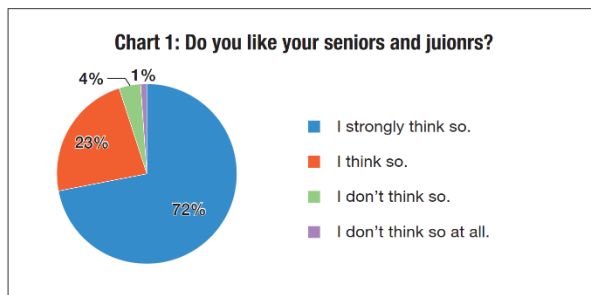
STUDENTS

Soka Senior High School students outgoing, friendly

In order to better understand the lives and minds of Soka Senior High School students, a survey was conducted in December. With 147 students responding, the survey showed Soka Senior High School students to be generally friendly and kind.

The results showed that they have good relationships with students in different grades. Chart 1 shows the answers to the question, "Do you like your seniors and juniors?" The chart shows that 72 percent strongly think so and the total that said they do reached 95 percent. On Nov. 18, 1999, Founder Daisaku Ikeda said: "You must respect your seniors as your older brothers or sisters. You must love your juniors as your younger brothers or sisters."

Soka Senior High School students recite that message before classes one morning a week. The survey shows that not only



do they say it, but also keep the idea in their mind. The survey also showed that they are quite

open to talking with each other and listening to others.

Chart 2 shows the answers to

the question, "How often do you initiate a conversation with people around you?" The students who take an active and positive attitude are about 75 percent. In addition, students speak with their classmates during class.

Students have many chances to learn about the founder and the school's founding spirit in school life. As a result, they come to understand that Ikeda has held dialogues with many intellectuals from around the world.

In "The New Human Revolution Vol. 16, Ikeda wrote: "Dialogue is the best privilege of human beings. It is beyond various barriers and binds people's hearts and world and becomes the strongest bond."

From the results, the survey shows Soka Senior High School students are empathetic to the people around them and are trying to live up to the expectations of Ikeda.

Appeal Group showcases school's open and welcoming spirit

Have you ever seen guides at open school day and other such events at Soka Senior High School? These students cheerfully welcome guests from all over Japan with smiles. They are members of the Appeal Group.

According to Keiichi Nakazato, a teacher who is in charge of Appeal Group, it was formally organized 15 years ago. The origin of Appeal Group dates back 40 years when graduates helped on the school open day and other occasions to support examinees.

These activities made a substantial contribution to Soka Senior High School. That's why, according to questionnaires taken by examinees, the biggest reason for applicants to apply for the school is "because I'm inspired by Gakuen students who help people."

The Appeal Group tries to interact with people who visit Soka Senior High School with an honest attitude. Masami Tsukada is a leader of Appeal Group. When she was a junior high school stu-

dent, she was encouraged by a senior student of Appeal Group. Because of that experience, she wanted to encourage someone, like her senior did, so she joined Appeal Group. She says that we try to behave as if we represent Soka Gakuen, and the beliefs of founder Daisaku Ikeda.

Sana Kazama is a leader of the school open day activities. She said, "I gained patience, a sense of responsibility and the ability to carry on through Appeal Group."

Moreover, she said, "I'm very happy to meet people who I would never have met if I didn't join Appeal Group."

Appeal Group members outside the school show visitors the way to school on open school day. If accidents happen, members are quick to respond. Kiyoshi Tsunoda, the captain of the group that works outside the school, said that the difficult things in their work are to respond to changes in temperature and to pay attention to group member's condition. In addition, they have barely enough members to manage the open school

day. Therefore, it is difficult to have enough people to do all the work. According to Tsunoda, he learned assertiveness and planning ability from his experience in Appeal Group. He learned to greet anyone in any circumstances because in Appeal Group, he greets people who visit the school. Regarding planning ability, members of Appeal Group always plan events to make guests happy.

Tsunoda said that they do the activities in Appeal Group to welcome guests warmly in place of founder Ikeda. And another thing is to participate to make their school appealing to children who might become Soka Senior High School students. Tsunoda said he is proud of his work.



Members of "Appeal Group" welcome visitors at the open school day on June 24, 2016.

NOTICE TO READERS

The original purpose of making this newspaper is to introduce our school. You may believe that this theme is common and all schools have similar features. However, we strongly felt "warmth" and "energy" of our school through experience to write these articles. We are pleased if these special things are able to reach you.

GLOBAL EDUCATION

Fostering global citizens to play active roles

Soka Senior High School is engaged in various activities to foster students who can play an active part in the world. One of the main activities is the Global Citizenship Project (GCP), the purpose of which is to acquire a wide range of knowledge and improve problem-solving skills.

As a part of GCP, students conducted fieldwork in Iwate Prefecture from July 25 to 27. They went to the Kuzumaki Plateau Farm, learned about life cycles and visited a wind power plant that boasts an energy self-sufficiency of 160 percent. They also spoke with victims of the Great East Japan Earthquake.

Waka Hirano, one of the participating students, said: “Rikuzentakata still shows the impact of the disaster. Some places have still been left as they were after being struck by tsunami. I was encouraged by the survivors of the disaster as they were cheerful and overcame the disaster. Both Kuzumaki and Rikuzentakata taught me the importance of life.”

In another GCP activity, first-



After feeding cattle, participants eat beef and learn the importance of life at the Kuzumaki Plateau Farm.

year students played a trading game in which they tried to make money by selling products they made using only tools and papers provided.

The planner of the game, the GCP leaders, worked to make it close to reality. For example, they made differences in various rules on capital for teams so as to give an advantage to teams representing developed countries

over teams representing developing countries. They also added in price fluctuations in the middle of the game. In this way, students could understand the basic system of the world economy and trade while trying to solve problems.

Third-year students participated in a Model United Nations (MUN). MUN is a model debate in which everyone acts as ambas-

sadors of countries and explains their situations to other ambassadors to negotiate and adopt draft resolutions. At this MUN, students discussed the environment.

One of the participants, Ms. Shimazu said: “I fully felt the difficulty of diplomacy. In the actual debate in consideration of saving profits and the order of the world, I couldn’t use ways I had thought at all. It wasn’t easy for us to open our hearts even if we shared purposes. I felt that I could truly and realistically learn through MUN.”

Camp a good chance to improve English skills

About 30 students participated in an English camp at Soka University on Nov. 12 and 13, 2016. The camp saw students from different grades spend two days using only English. Part of the Super Global High School projects, this was the second camp since it began in 2015. The theme of the camp was “Let’s Learn about Japan From Inter-

national Students.” Based on this theme, students interviewed international students who are studying at Soka University and showed their findings during a poster session.

Some of the students who took part shared some impressions of the camp. First-year student Yurika Morii said, “I become used to speaking in English

while working with international students.” Another first-year student, Daichi Takagi, commented: “I realized it didn’t matter how poor my English skills are. By using gestures I somehow managed.”

The English teachers of Soka Senior High School praised the students on their efforts to be proactive about studying through this experience. One of the leading teachers Hirotsuke Mikami said: “They took the initiative on the survey and poster work, instead of waiting for instructions. Some of the students become more positive about using English in class, too. Some students had even improved their pronunciation.”

In the English camp, the students had a chance to enjoy some snacks and food with the international students. This event can become a good starting point to improve students’ English skills.



Soka students explain through posters what they learned by speaking with international students at an English camp on Nov. 13.

SOKA GAKUEN TIMES

The Soka Gakuen Times was created and published by a group of 30 volunteer first-grade, second-grade and third-grade senior high school students of Soka Senior High School in Kodaira City, Tokyo, in cooperation with the not-for-profit Global Education Information Center (GEIC) and The Japan Times, Ltd.

Publisher: Seiichi Kinoshita, Principal, Soka Senior High School
 Project Supervisor: Tsubasa Togawa and Masayoshi Ishino (Soka Gakuen)
 Project Coordinators: Junji Sakurai (GEIC) and Hiroshi Mishima (The Japan Times)
 Editor: Ami Hiraoka
 Contributing Editors: Masaaki Kameda, James Souilliere (The Japan Times) and Kazue Suzuki (Gunma University)
 Staff Writers: Kiyoshi Morita, Yui Kobayashi, Hirofumi Omori, Chiharu Nagai, Momoko Nukui, Rin Watanabe, Yuki Suzuki, Yoko Kusakabe, Takako Fujii, Ami Toyota, Wakana Odaka, Erika Kimura, Hiroka Sue, Minami Takahashi, Kaori Miyajima, Akane Yamauchi, Haruka Naganuma, Sakura Mori, Koichi Satake, Satoru Shudai, Takuro Nemoto, Shota Yoshihara, Daichi Matsuura, Toshiaki Sagawa, Hiromi Chugo, Masami Tsukada, Yuko Sasaki, Miho Maezono, Yuna Taniguchi

Contact: 2-1 Takanodai, Kodaira-Shi, Tokyo 〒187-0024 Japan
 Website: <http://www.soka.ed.jp>

平成 28 年度指定 スーパーグローバルハイスクール 第 1 年次

研究開発実施報告書

平成 29 年 3 月 31 日

発行 学校法人 創価学園 創価高等学校

〒187-0024 東京都小平市たかの台 2-1

電話 : 042-342-2611(代表)

印刷 株式会社 コモダ印刷

〒185-0002 東京都国分寺市東戸倉 2-36-12

電話 : 042-321-0721



SOKA Senior High School